

和歌山市内遺跡発掘調査概報

— 平成13年度 —

太田・黒田遺跡第50次調査
川 辺 遺 跡 発 掘 調 査

2003

和歌山市教育委員会

序 文

和歌山県の県庁所在地である和歌山市は、和歌山県の北西、紀ノ川の河口部に位置しています。紀伊山地に源を発し、西流して紀伊水道に注ぐ紀ノ川は、河口部に肥沃な和歌山平野を形成しました。

和歌山市は、この平野部を主たる市域としており、古代より文化の栄えた場所です。そのため、市内には全国的にも著名な岩橋千塚古墳群や大谷古墳をはじめとし、およそ400ヶ所にもものぼる遺跡が確認されています。

近年、市域においても宅地造成等に伴う開発が増加してきています。それらの開発に対処するために、平成7年度から国庫補助金・県費補助金を得て、和歌山市内に存在する遺跡の緊急発掘調査を行ってまいりました。

本書には、平成13年度に実施した太田・黒田遺跡と川辺遺跡の発掘調査で得られた貴重な成果を収めています。ここに報告する調査概要が、地域の歴史の解明に活用されれば幸いです。

最後になりましたが、調査にあたり御指導、御協力を頂きました関係者各位の皆様に深く感謝いたします。

平成15年3月31日

和歌山市教育委員会

教育長 山口喜一郎

例 言

- 1 本書は、平成13年度国庫補助事業として計画し、財団法人和歌山市文化体育振興事業団に事業の委託を行った埋蔵文化財発掘調査の概要報告書である。
- 2 調査対象経費の総額は520万円であり、国1/2、県1/8、市3/8の補助率である。
- 3 本年度の調査対象は下記のとおりである。

事業名	調査地	調査期間	調査面積	調査担当
太田・黒田遺跡第50次調査	和歌山市太田514-18番地	平成13年6月14日～平成13年7月19日	45㎡	井馬好英
川辺遺跡発掘調査	和歌山市川辺237番地	平成13年12月26日～平成14年2月25日	192㎡	川口修実

- 4 発掘調査に係わる事務局は下記のとおりである。

【和歌山市教育委員会】

教育長 山口喜一郎
文化財室長 榎本直樹
文化財班長 田中郁次
学芸員 益田雅司

【財団法人和歌山市文化体育振興事業団】

理事長 喜多誠一
総務室長 高野眞次郎
総務室班長 久保雅英
主 事 山口美二（文化財事務担当）
学芸員 井馬好英（発掘調査担当）
学芸員 川口修実（ “ ” ）

- 5 報告書刊行に係わる事務局は下記のとおりである。

【和歌山市教育委員会】

教育長 山口喜一郎
文化財室長 榎本直樹
文化財班長 田中郁次
学芸員 益田雅司

【財団法人和歌山市文化体育振興事業団】

理事長 喜多誠一
総務室長 高野眞次郎
総務室班長 久保雅英
主 事 山口美二（文化財事務担当）
学芸員 井馬好英（報告書担当）
学芸員 奥村 薫（ “ ” ）
学芸員 川口修実（ “ ” ）

- 6 本書のうち発掘調査の概要部分についてはそれぞれの調査担当者である財団法人和歌山市文化体育振興事業団学芸員が担当した他、「太田・黒田遺跡第50次調査 5.遺物(1)(2)」については同財団学芸員川口修実が、「太田・黒田遺跡第50次調査 5.遺物(3)(4)(5)」については同財団学芸員奥村 薫がそれぞれ分担し、本書の構成については益田雅司が行った。
- 7 写真図版の遺物に付した数字番号は実測図番号に対応する。
- 8 本書の作成にあたり、関係機関等の方々に有益な御教示・御指導を賜ったことに感謝の意を表します。

本文目次

太田・黒田遺跡第50次調査

1. 調査の契機と経過	1
2. 位置と環境	2
3. 調査の方法と経過	4
(1) 調査の方法	4
(2) 調査の概要	4
4. 遺構	6
(1) 第4～6遺構面検出の遺構	6
(2) 第3遺構面検出の遺構	7
(3) 第2遺構面検出の遺構	7
(4) 第1遺構面検出の遺構	10
5. 遺物	10
(1) 弥生時代の土器	11
(2) 古墳時代の土器	13
(3) 中世の土器	14
(4) 瓦	15
(5) 土製品	15
(6) 石器・石製品	16
(7) 自然遺物	18
6. まとめ	18

川辺遺跡発掘調査

1. 調査の契機と経過	21
2. 位置と環境	22
3. 既往の調査	24
4. 調査の方法と経過	26
(1) 調査の方法	26
(2) 調査の概要	27
5. 遺構	28
6. 遺物	34
(1) 縄文時代の土器	34
(2) 弥生時代の土器	35
(3) 古墳時代以降の土器	36
(4) 石器	37
(5) 石製品	39
(6) 金属製品	39
(7) 自然遺物	39
7. まとめ	40
報告書抄録	42

図版目次

図版 1	太田・黒田遺跡遺構	調査前の状況(東から)、第1区第5遺構面全景(南から)
図版 2	太田・黒田遺跡遺構	第1区第3遺構面全景(南から)、第2区第3遺構面全景(西から)
図版 3	太田・黒田遺跡遺構	第1区第2遺構面全景(北から)、第1区第2遺構面全景(東から)
図版 4	太田・黒田遺跡遺構	第2区第2遺構面全景(東から)、第1区第1遺構面全景(北から)
図版 5	太田・黒田遺跡遺構	SK-13(南東から)、SK-13土層堆積状況(南東から)
図版 6	太田・黒田遺跡遺構	SB-2(北東から)、SB-2土層堆積状況(南東から)
図版 7	太田・黒田遺跡遺構	SB-1(北東から)、SB-1土層堆積状況(南西から)
図版 8	太田・黒田遺跡遺構	SD-3・5土層堆積状況(南から)、 SD-1土層堆積状況(南西から)
図版 9	太田・黒田遺跡遺構	第1区東壁土層堆積状況 X=-196304m付近(西から)、 第2区北壁土層堆積状況 Y=-73912m付近(南から)
図版10	太田・黒田遺跡遺物	SK-13出土遺物
図版11	太田・黒田遺跡遺物	弥生土器
図版12	太田・黒田遺跡遺物	土師器、須恵器
図版13	太田・黒田遺跡遺物	中世の土器、瓦、土製品
図版14	太田・黒田遺跡遺物	石器、石製品
図版15	川辺遺跡遺構	調査前の状況(東から)、調査地全景(右が北)
図版16	川辺遺跡遺構	第1区全景(東から)、第2区全景(北から)
図版17	川辺遺跡遺構	第2区全景(南から)、第2区サブトレンチ2縄文土器出土状況(北東から)
図版18	川辺遺跡遺構	第2区SB-1・2(北から)、第2区SB-1(右が北)
図版19	川辺遺跡遺構	第2区SB-1(東から)、第2区SB-1(北から)
図版20	川辺遺跡遺構	第2区SB-1炉1・2(南東から)、 第2区SB-1炉1土層堆積状況(南西から)
図版21	川辺遺跡遺構	第2区SB-1P-4土層堆積状況(東から)、 第2区SB-1P-4遺物出土状況(東から)
図版22	川辺遺跡遺構	第2区SB-2(北から)、第2区SB-2(東から)
図版23	川辺遺跡遺構	第2区SB-2炉土層堆積状況(東から)、 第2区SB-2P-1遺物出土状況(西から)
図版24	川辺遺跡遺構	第1区SK-1(西から)、第1区SK-1土層堆積状況(南から)
図版25	川辺遺跡遺構	第2区SX-10~13(南東から)、第2区SX-10~13盛土畦畔(南東から)
図版26	川辺遺跡遺構	第2区SX-10~13土層堆積状況(南西から)、第2区SX-17~21(東から)
図版27	川辺遺跡遺構	第1区サブトレンチ1東壁土層堆積状況(西から)、 第2区サブトレンチ4西壁土層堆積状況(東から)
図版28	川辺遺跡遺物	縄文土器、弥生土器
図版29	川辺遺跡遺物	弥生土器、古墳時代以降の土器
図版30	川辺遺跡遺物	石器、石製品、金属製品

太田・黒田遺跡 第50次調査

1. 調査の契機と経過

今回の調査は、和歌山市太田514-18番地において個人住宅が建築されることになり、この場所が『和歌山県埋蔵文化財包蔵地所在地図』に記載された周知の遺跡である太田・黒田遺跡（遺跡番号327）及び太田城跡（遺跡番号356）の範囲内であったため、和歌山市教育委員会が届け出を行い、この工事に先立つ遺跡確認のための発掘調査を行うこととなった。この調査は、同市教育委員会が国庫補助金を得て実施したもので、同市教育委員会の指導のもと財団法人和歌山市文化体育振興事業団が委託を受けて行った。

太田・黒田遺跡は、紀ノ川下流域南岸の和歌山平野ほぼ中央部、JR和歌山駅東側の和歌山市太田から黒田にかけて広がる遺跡で、平野部でも微高地にあたる地点に位置し、数多くの遺跡が分布する地域に所在する（第1図）。この遺跡は、東西500m、南北850mの範囲であり、これまでに49次にわたる発掘調査が行われ、弥生時代から江戸時代にかけての複合遺跡として周知されている。これらの調査では、竪穴住居や井戸、溝、土坑墓、土器棺墓、水田などの遺構、銅鐸・銅鏃などの金属器や多量の土器類などが発見され、弥生時代前期から中期にかけての県内最大規模をほこる集落跡であることが確認されている。また古墳時代から江戸時代にかけての遺構、遺物を多数検出している。特に、室町時代には羽柴秀吉に水攻めを受けたとされる太田城跡の推定地が重複している。

今回の調査地は、太田・黒田遺跡の中央やや南側、太田城跡のほぼ中央部に位置し、昨年度調査を行い弥生時代前期の2条の環濠を検出した第45次調査地及び弥生時代中期初頭の竪穴住居を検出した第46次調査地の隣接地にあたる（第3図）。この第45次調査で検出した環濠は、1995年に調査を行った第26次調査で検出した大溝の延長部であることが判明し、この弥生時代前期環濠が前期集落の西側を取りまくものと考えられた。このことから、当調査地は前期環濠集落の内側に位置し、弥生時代前期の遺構・遺物が検出されるものと推定された。

現地における調査は、平成13年6月14日に開始し、約1ヶ月の期間を要し、同年7月19日にすべての作業を終了した。



第1図 調査位置図

2. 位置と環境

太田・黒田遺跡（1）は、和歌山市のほぼ中央部にあたる紀ノ川南岸の沖積平野上に立地する遺跡である。当遺跡が所在する和歌山市太田及び黒田周辺から南東方向にあたる同市秋月・鳴神地域にかけては、平野部のなかでも標高4 m前後を測る比較的高い微高地上にあたる地点であり、紀ノ川の沖積作用による陸化が比較的早く進んだ地域といえる。またこの周辺の平野部には、集中して遺跡が形成されたことで注目される地点である（第2図）。

周辺の遺跡について概観すると、縄文時代の遺跡として東側約1.6kmに国の史跡に指定されている鳴神貝塚（27）が位置する。鳴神貝塚は、近畿地方で最初に発見された貝塚として知られ、土坑墓や甕棺が検出され、縄文時代中期から晩期の土器とともに弥生時代前期の土器も出土している。また縄文晩期の土坑墓から猿の橈骨で作った耳栓を供伴した若い女性の伸展葬人骨が発見され、上下の門歯を抜歯していたことなどから、この女性がシャーマンではなかったかと考えられている。

弥生時代には当遺跡を初めとして平野部を中心に多くの遺跡が営まれている。当遺跡の南東側に隣接する秋月遺跡（23）の東部における近年の調査では、前期の石器製作に関するとみられる土坑などが検出され、太田・黒田遺跡に最も近接する前期集落の存在が明らかとなった。また当遺跡では、1995年に行われた第26次調査において中期初頭頃の水田が3面検出されており、南側約2.5kmに位置する神前遺跡（42）において検出された水田とともに県内最古級の水田遺構として注目されている。

古墳時代では、当遺跡においても竪穴住居などが検出されており、弥生時代と同様に平野部を中心として集落が形成されている状況である。当遺跡の西側約500mに位置する友田町遺跡（3）では前期から後期にかけての竪穴住居や掘立柱建物などの遺構が検出され、当遺跡の古墳時代集落との関係が重点課題のひとつとして考えられている。また先述の秋月遺跡やその東側の鳴神Ⅳ遺跡（24）や音浦遺跡（28）などの鳴神遺跡群からは、多数の竪穴住居、掘立柱建物などの遺構が検出され、この周辺が古墳時代の集落の中心部であったものと考えられる。古墳の築造は、秋月遺跡において県内最古級の前方後円墳及び方墳群が築造され、その周辺部の鳴神Ⅴ遺跡（25）などにおいても円墳及び方墳群が造られている。そして、前期末には花山丘陵上に花山古墳群（29）が、中期後半から後期にかけて岩橋山塊に岩橋千塚古墳群（35）や寺内古墳群（41）などが形成された。

歴史時代になると、鳴神Ⅴ遺跡において奈良時代から平安時代にかけての土馬、陶硯、緑釉・灰釉陶器、初期貿易陶磁器などの特記すべき遺物が出土し、官衙的な施設が存在していたものと考えられている。秋月遺跡においても、奈良時代から室町時代にかけての掘立柱建物や井戸などが検出され、日前・国懸神宮に関わる大規模な集落跡が存在するものとみられる。この地域南方一帯は、県内最大規模の条里地割の痕跡が良好に残っている地域であり、河南条里と呼称されている。

室町時代には、当遺跡の南半部を中心として太田城の推定地が存在する。太田城は羽柴秀吉の紀州攻めの際の水攻めがよく知られるところであるが、その構造や規模は不明である。しかし、1968年に行われた当初の調査や1987年の第19次調査などにおいて、東西方向の幅10m、深さ3mを測る中世の大溝が検出され、太田城に関わりをもつ遺構として注目されている。また水攻めに関すると思われる遺構では、太田城水攻め堤跡（22）として同市出水の地にわずかに残されている。



番号	遺 跡 名	時 代	番号	遺 跡 名	時 代	番号	遺 跡 名	時 代
1	太田・黒田遺跡	弥生～近世	15	高井遺跡	縄文～鎌倉	29	花山古墳群	古墳
2	太田城跡	安土・桃山	16	府中Ⅱ遺跡	弥生	30	津秦遺跡	弥生
3	友田町遺跡	弥生～平安	17	府中Ⅳ遺跡	弥生～古墳	31	津秦Ⅱ遺跡	古墳～奈良
4	木広町遺跡	弥生	18	田屋遺跡	弥生～古墳	32	鳴神Ⅱ遺跡	弥生～平安
5	和歌山城跡	近世	19	西田井遺跡	弥生～中世	33	栗栖Ⅰ遺跡	古墳
6	本願寺跡	中世～	20	有本銅鐸出土地	弥生	34	岩橋Ⅱ遺跡	古墳～室町
7	鷺ノ森遺跡	弥生～江戸	21	紀ノ川銅鐸出土地	弥生	35	岩橋千塚古墳群	古墳
8	山吹丁遺跡	弥生～古墳	22	太田城水攻め堤跡	戦国～江戸	36	大日山Ⅰ遺跡	古墳～奈良
9	国有本遺跡	弥生～古墳	23	秋月遺跡	弥生～平安	37	井辺Ⅰ遺跡	弥生～古墳
10	鳴滝遺跡	古墳	24	鳴神Ⅳ遺跡	弥生～江戸	38	井辺Ⅱ遺跡	弥生～古墳
11	鳴滝古墳群	古墳	25	鳴神Ⅴ遺跡	弥生～平安	39	井辺遺跡	弥生
12	法然寺遺跡	弥生	26	鳴神Ⅵ遺跡	弥生～江戸	40	井辺前山古墳群	古墳
13	六十谷遺跡	縄文～弥生	27	鳴神貝塚	縄文～弥生	41	寺内古墳群	古墳
14	西辻遺跡	弥生	28	音浦遺跡	古墳	42	神前遺跡	弥生

第2図 太田・黒田遺跡周辺の遺跡分布図

3. 調査の方法と経過

(1) 調査の方法

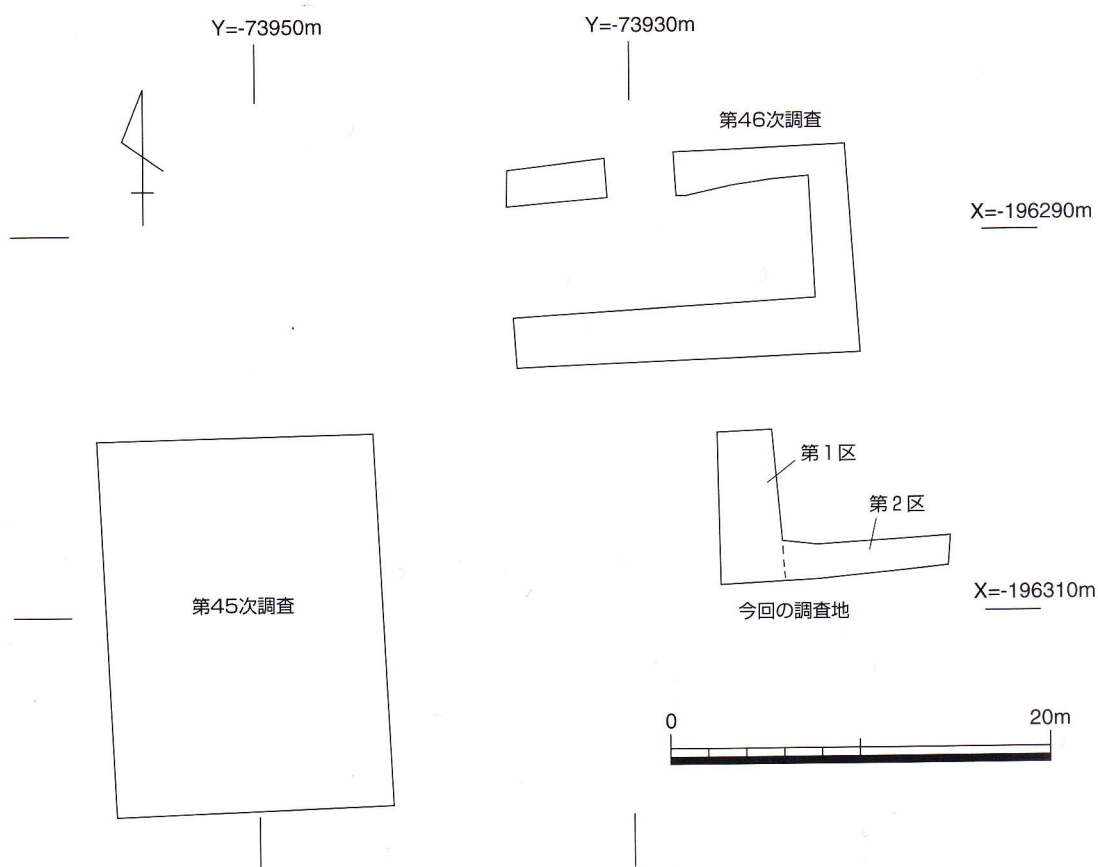
調査区は、深掘される建物の基礎部分にあたる地点に「L」字状に設定し、北側に位置する東西幅3 m、南北長8 mの範囲を第1区、南北幅2 m、東西長9 mの範囲を第2区と定めた。また、隣接する調査範囲の位置関係を含め第3図に示した。

調査の方法は、当地が整地を施した宅地（図版1上）であったことから、上層の整地土を重機によって掘削を行い、第2層以下の遺物包含層と遺構の調査を人力掘削によって行った。竪穴住居や溝などの遺構掘削については、土層堆積観察用のベルトを直交するライン上に設け、写真撮影を行い、2層以上の堆積が確認できたものについては実測図等の記録保存を行った。土層の色調及び土質の観察については、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』を用いた。

図面による記録は、平面図に関しては国土座標軸を基準とした値を使用し、このラインを基準に1/20の縮尺を用い手実測を行った。また遺跡の水準は、国家水準点（T.P.値）を基準とした。

(2) 調査の概要

調査地の基本層序は第4図に示したとおりである。この基本層序は、2000年に調査を行った南側隣接地の第46次調査に対応し、この調査では第3層上面（室町～江戸時代）、第4a層上面（弥生時

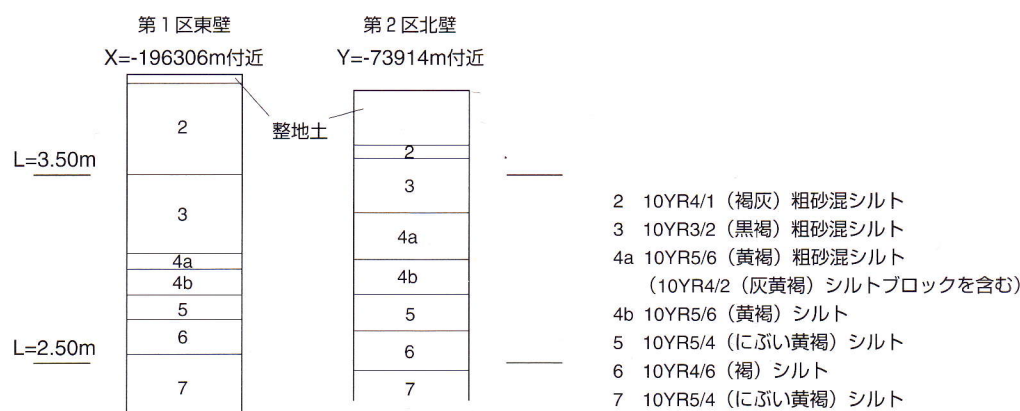


第3図 調査地区割図

代中期～鎌倉時代)、第4b層上面(弥生時代中期初頭)、第6層上面(弥生時代前期末)において4面の遺構面が検出されている。今回の調査では、さらに第7層上面及び第5層上面において新たに遺構を検出し、先述の4面の遺構面を含め、6面の遺構面が存在することを明らかにした。

調査地の現況が宅地であるため、表土は厚さ5～30cmを測る整地土である。この土地の地表面は西から東にかけて緩やかな傾斜をもつ。このため、北側隣接地で昨年度に行った第46次調査等において確認した第1層は、当地では整地を行った際に削平を受けているとみられた。第2層は、第2区東端の東側において5cm程度であるのに対して第1区周辺の西側では50cm程度と厚く堆積している。また第3層は30～40cmの厚みをもち東から西に緩やかに傾斜をもつ。この傾斜は現地表面とは異なる傾斜であり、本来東側の第2層も厚く堆積していたものが削られて現状に至っているものと判断できた。この第2層は、江戸時代もしくはそれ以降の堆積土である。また第3層は黒褐色系のシルト質層で、多量の土器を含む遺物包含層である。この第3層の上面が第1遺構面であり、第1区において室町時代の溝2条、江戸時代の土坑1基を検出した。第3層以下の状況は、黄褐色系のシルト質土層(第4層)が比較的細かく数単位に分けられ、ほぼ水平堆積する状況が確認できた。この状況は、北側隣接地の第46次調査及び西側隣接地の第45次調査地点においても類似する様相である。各層における検出遺構は、まず第4a層の上面(第2遺構面)で弥生時代中期から鎌倉時代までの溝や土坑・ピットなどを、第4b層(第3遺構面)の上面で弥生時代中期古段階のピットや土坑などを検出した。また、さらに下層の状況は、第5層上面(第4遺構面)において弥生時代中期初頭頃のピットを、第6層上面(第5遺構面)で弥生時代前期新段階の土坑やピットをそれぞれ検出した。このなかで、第5層上面(第4遺構面)における遺構は、今回新たに検出したものである。また第1区の東壁直下に設定したサブトレンチ内における第7層上面(第6遺構面)においても土坑1基を検出した。この第7層上面での遺構の検出は、第46次調査時において炭層の堆積を検出し、遺構面の存在が指摘されていたものであり、今回それを明確にしたことになる。

以上のことから、今回の調査では遺構面が少なくとも6面存在することを明らかにした。また第7層以下の状況は、今回の調査では確認できなかったが、近年の調査成果からみて第7層も遺物包含層である可能性が高いものとみられる。



第4図 調査地土層柱状模式図

4. 遺構

今回の調査では、遺構面を6面検出し、弥生時代前期から江戸時代にかけての遺構を多数検出した。以下、各遺構面ごとに遺構の記述を行い、なかでも重要と考えられるものについては個別に説明を行う。

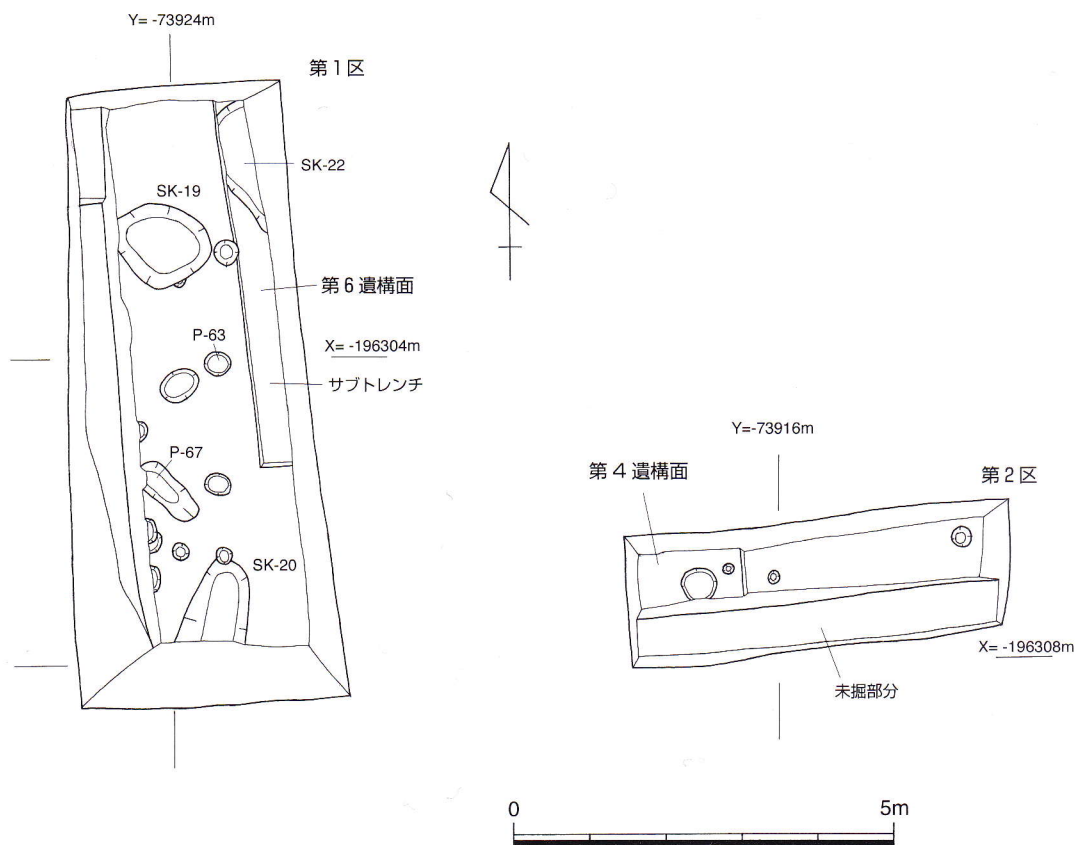
なお、第1遺構面については、遺構を検出した第1区のみを示した。また第4遺構面については第2区の西端の一部においてのみ検出したものであるため、第1区のサブトレンチ調査によって検出した第6遺構面とともに第5遺構面の平面図に部分的に追加して示した。

(1) 第4～6遺構面検出の遺構 (第5図)

第6遺構面は、第1区の東壁直下において設定したサブトレンチ内の第7層上面(標高約2.5m)において検出したものである。検出した遺構は、弥生時代前期後半の土坑1基(SK-22)である。[SK-22]

SK-22は長辺1.8m以上、短辺0.5m以上、深さ25cmの不定形のもので、覆土は2単位に分けられ、上層が黄褐色の色調をもつ粘土、下層が褐灰色の色調をもつ粘土で、下層には焼土と炭が含まれていた。

第5遺構面は、調査区全体の第6層上面(標高2.7m前後)において検出したものである。遺構は、弥生時代前期後半の土坑2基(SK-19・20)とピットを多数検出した(図版1下)。このなか



第5図 第5遺構面遺構平面図(第4・6遺構面を部分的に追加。)

で、第1区において検出したSK-19・20には多条のヘラ描直線文をもつ紀伊第Ⅰ様式新段階に併行する弥生土器が一定量出土した。またP-67は長径90cm、短径35cm、深さ45cmの楕円形のもので、同時期に併行する土器とともに石庖丁（第20図、60）が1点出土した。

第4遺構面の遺構は、第5層上面（標高約2.9m）で検出したもので、第2区の西端の一部のみにおいて弥生時代中期初頭とみられるピット2基を検出した。

（2）第3遺構面検出の遺構（第6図、図版2）

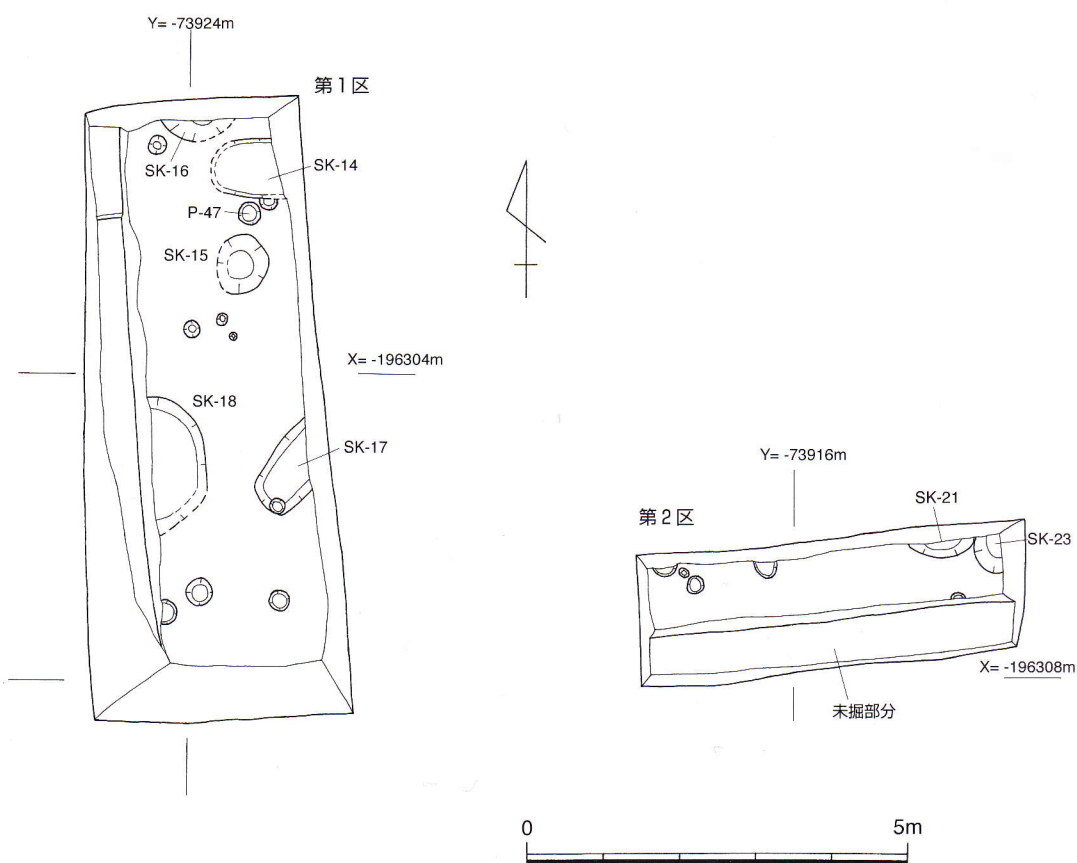
第3遺構面は、調査区全体の第4b層上面（標高約3.0m）において検出したものである。遺構は、弥生時代中期前半の土坑7基（SK-14～18・21・23）とピットを多数検出した。

[SK-16・21・23]

第1区北端部において検出したSK-16及び第2区東端部において検出したSK-21・23は、ともに全形が不明であるが直径1m程度、深さ20～40cm程度の円形のものともみられ、覆土の上部は黄褐色系のシルト質土層で埋まっているが、下層には炭が多量に含まれていることなど類似点のある遺構である。これらのことから、炉の可能性が考えられる遺構として注目できる。

（3）第2遺構面検出の遺構（第7図、図版3・4上）

第2遺構面は、調査区全体の第4a層上面（標高3.1～3.3m）において検出したもので、今回の調査のなかでは最も多くの遺構を検出した遺構面にあたる。遺構は、弥生時代中期の土坑3基



第6図 第3遺構面遺構平面図

(SK-9・12・13)、古墳時代の竪穴住居2棟(SB-1・2)、溝2条(SD-5・7)、土坑6基(SK-2・4・6～8・10)、平安時代の溝1条(SD-6)、鎌倉時代の溝2条(SD-3・4)、土坑1基(SK-11)のほか、弥生時代中期から鎌倉時代にかけてのピットを多数検出した。

【弥生時代の遺構】

[SK-13] (第8図、図版5)

SK-13は、第1区北半部で検出した長径1.8m、短径1.2mの楕円形の土坑で、最深部では検出面からの深さが63cmである。覆土は5単位に分けられ、上部が黒褐色系の粗砂混シルトで、下層になると黄灰色系の色調となり、土質は粘土質から砂質となる。遺物からみて紀伊第Ⅱ様式に併行する時期のものとみられ、一定量の壺や甕などの弥生土器が出土した。

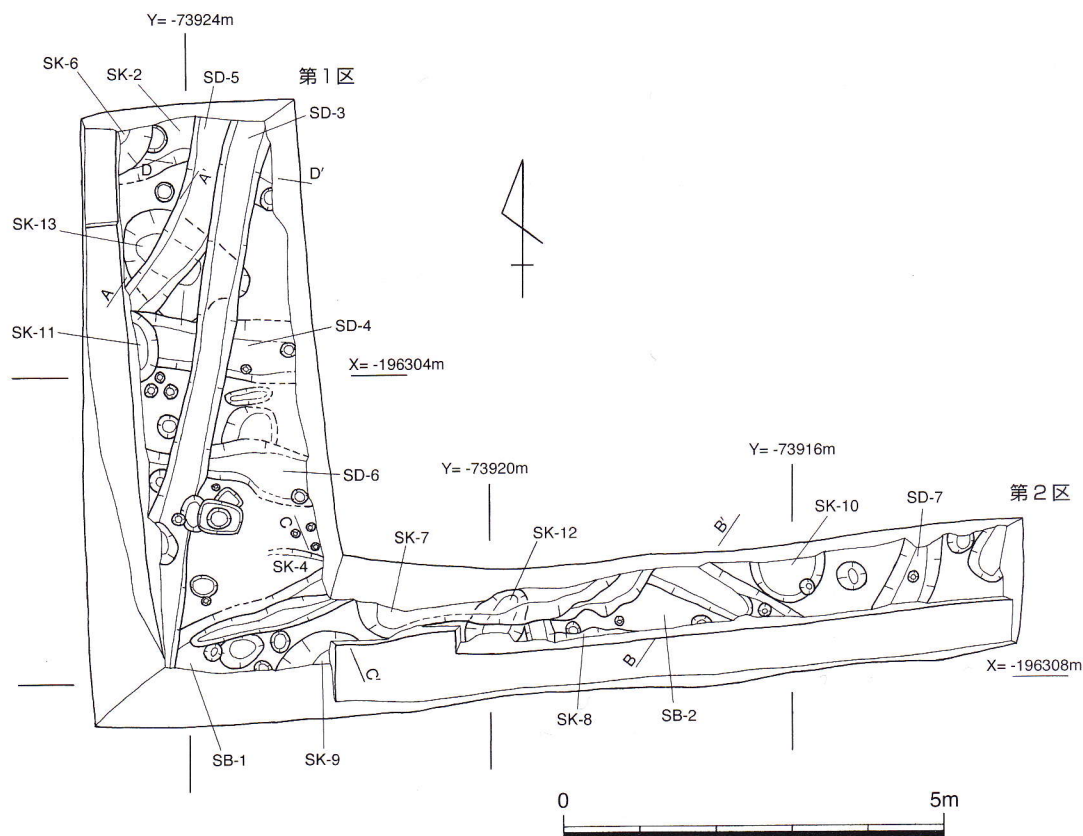
[SK-12]

SK-12は、第2区の中央部において検出した土坑で、上部は古墳時代の土坑(SK-7)によって削平を受けている。規模は、長径90cm以上、短径70cm、検出面からの深さ74cmのもので、紀伊第Ⅲ様式の新段階に併行するものとみられる。この土坑内からは、弥生土器壺(第15図、19)が1点出土した。

【古墳時代の遺構】

[SB-2] (第9図、図版6)

SB-2は、第2区の中央部で検出した竪穴住居である。調査区が狭少な範囲であったことと、西側のほとんどの部分が後出する他の遺構と重複し、削平を受けていたため北壁際の一部のみの検



第7図 第2遺構面遺構平面図

出となった。この検出した壁面及び壁溝が直線的であるので、方形もしくは隅円方形のプランをもつ住居と考えられる。床面までの深さは約15cm、壁溝の幅約50cm、床面からの深さ約15cmである。出土した遺物から、前期の範疇におさまるものとみられる。

〔SB-1〕(第10図、図版7)

SB-1は第1区南端部から第2区にかけて検出した竪穴住居であり、北側と東側の壁面と壁溝の一部を検出した。この住居は、東西長4.8m以上、南北長2.2m以上の方形の平面形をもつものと考えられる。覆土は黒褐色系の粗砂を含むシルト質土層の単層であり、出土した遺物から後期に比定できるものとみられる。

〔SD-5〕(第11図、図版8上)

SD-5は、第1区北半部で検出した幅50~60cm、検出面からの深さ約40cmの溝である。覆土は3単位に分けられ、ともに黒褐色の色調をもつが、下層ほど粘性が強い。この溝も遺物からみて、中期に比定できるものとみられる。

このほか、第1区北端の土坑(SK-2)は、中期に位置づけられるもので馬の歯が1点出土したほか、第2区北半部で検出した不定形の土坑(SK-7)からは後期末の土器が多量に出土した。

【平安時代の遺構】

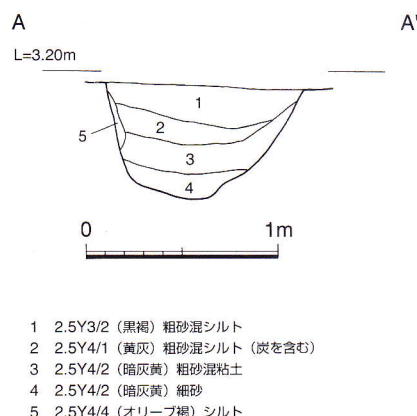
〔SD-6〕

SD-6は、第1区中央部において検出した東西方向にのびる溝で、幅50~60cm、深さ20cm前後である。今回の調査では、黒色土器が一定量出土しているが、平安時代とみられる遺構はSD-6のみである。

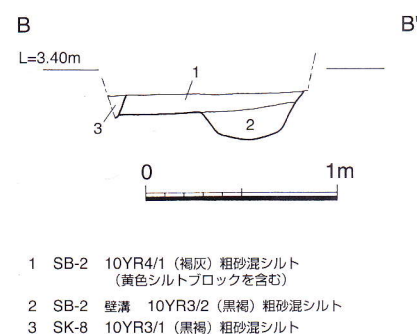
【鎌倉時代の遺構】

〔SD-3・4〕

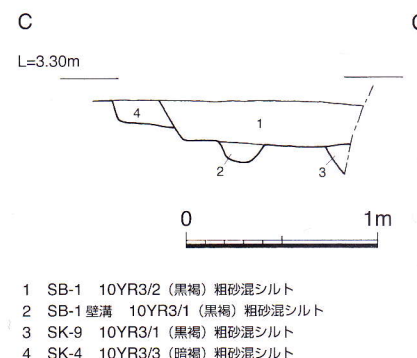
SD-3は、第1区を南北に貫いてのびる溝である。この溝は幅約50cm、深さ10~15cm前後であり、第46次調査において検出した溝の延長部とみられ、その状況からN-12°-Eの方向性で直線的に20m以上続くものとみられる。またその流路方向は底面の比高差からみて、北から南と考えられる。またSD-4はSD-3と直交して重なりをもつ溝で、SD-3より先行するものである。



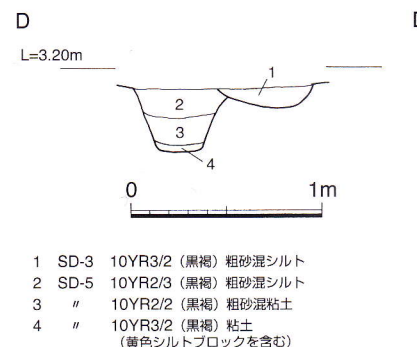
第8図 SK-13土層断面図



第9図 SB-2土層断面図



第10図 SB-1土層断面図



第11図 SD-3・5土層断面図

[SK-11]

SK-11は、SD-4と重なりをもつ土坑である。この土坑は、東西幅30cm以上、南北幅90cm以上のもので、復元径1m程度の円形のものとみられる。深さは検出面から1.2mの深さまで掘削したが、湧水等の悪条件のため底面まで掘削することはできなかった。遺構の性格としては、井戸の可能性が高いものである。

(4) 第1遺構面検出の遺構 (第12図、図版4下)

第1遺構面は、第3層上面(標高約3.5m)において検出したもので、遺構が検出できたのは第1区のみである。検出した遺構は、室町時代の溝2条(SD-1・2)及び江戸時代の土坑1基(SK-1)である。

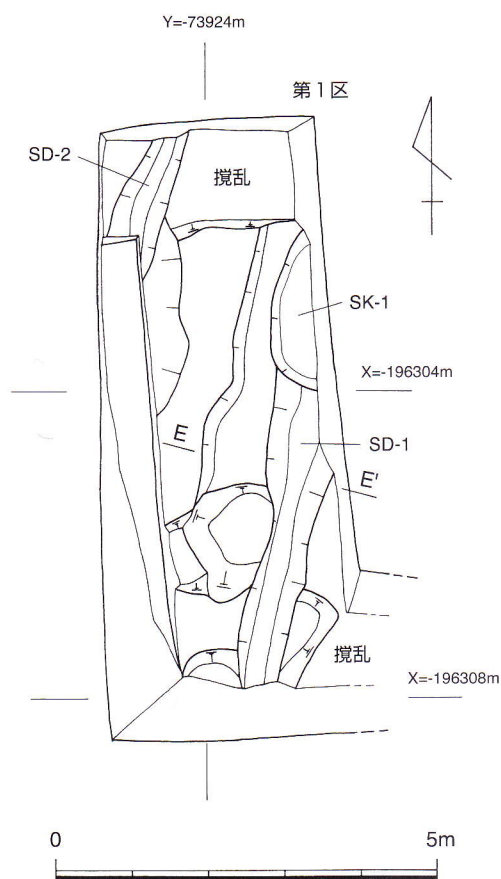
[SD-1] (第13図、図版8下)

SD-1は調査区を南北貫いてのびる溝である。この溝は、2時期に分けられるもので、再掘削が行われたとみられる新段階のもの(SD-1a)は、幅90cm、深さ30cm程度で暗灰黄褐色系の色調をもち、覆土は2単位に分けられる。また古段階のもの(SD-1b)は西肩部を検出し、少なくとも幅95cm以上、深さ15cm程度を測るものとみられる。この溝の新段階の延長部は第46次調査において検出しており、その状況からN-14°-Eの方向性で直線的に20m以上続くものとみられる。また古墳時代の遺物混入とみられる須恵器イイダコ壺(第16図、34)がSD-1bから出土した。

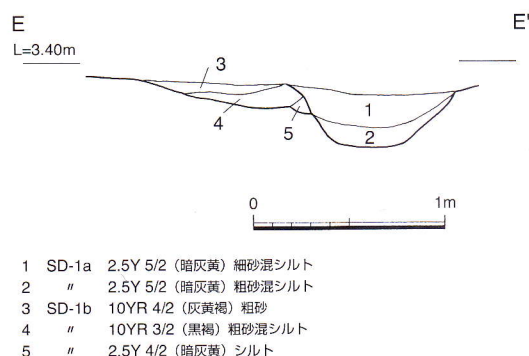
5. 遺物

遺物は、各時代の遺構の覆土や第2～7層の遺物包含層から遺物収納コンテナ約14箱分が出土した。これら遺物の内容は、弥生時代前期から中期にかけての土器をはじめ、土師器、須恵器、黒色土器、中世土師器、瓦器、瓦質土器、輸入陶磁器、国産陶磁器、瓦、石器、石製品などがある。なかでも、弥生土器、土師器において一括性が高い重要視される遺物群があり、また特筆されるものに第1区第1遺構面のSD-1から出土した古墳時代の遺物混入とみられる須恵器イイダコ壺や碧玉製の管玉がある。

本書では、これらの遺物を遺構出土の一括性が高いものを中心として、大きく各時代に分類してふれ、その後に瓦や石器、石製品などを個別に説明する。



第12図 第1遺構面遺構平面図



第13図 SD-1土層断面図

(1) 弥生時代の土器

[SK-13出土土器] (第14図1～7、図版10)

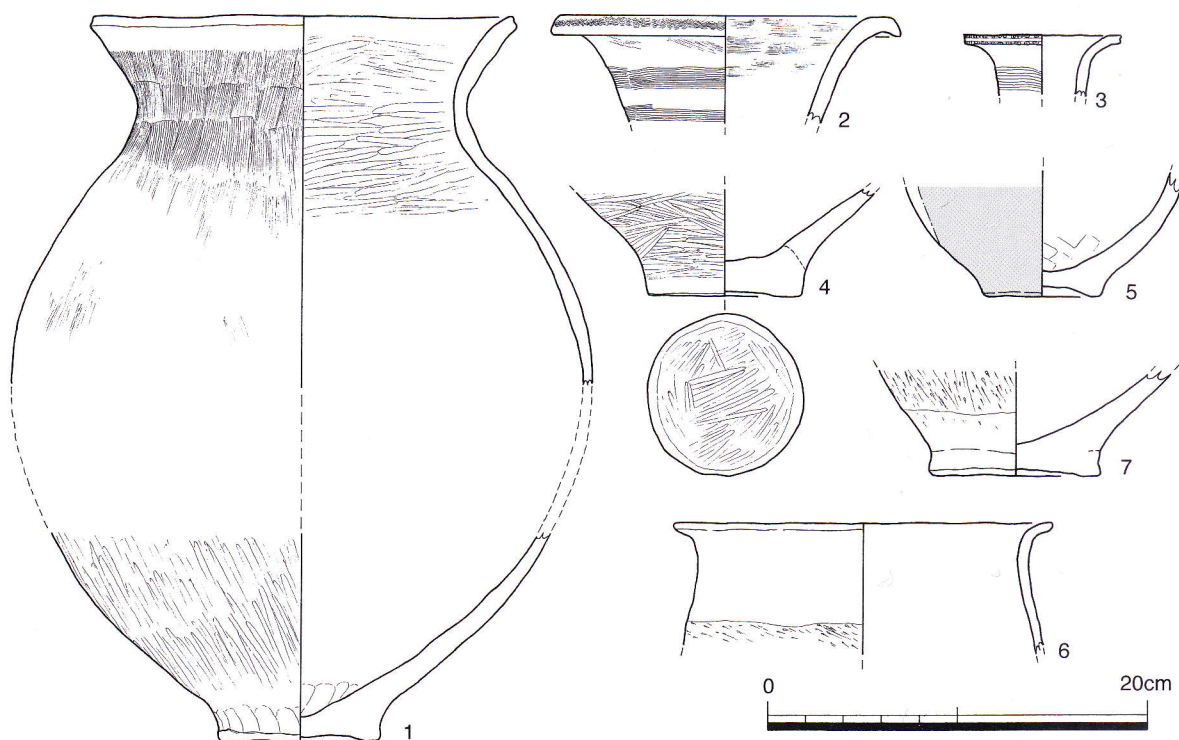
1～5は壺である。1は口径22.4cm、復元器高38.0cm、底径8.2cmを測る広口壺で、卵形の体部に短く外反する口縁部を有する。外面は、体部下半から底部にかけてタテ方向のヘラミガキ調整、口縁部から体部上位にかけてはタテ方向のハケ調整を施し、体部はハケメをナデ消している。内面はナデ調整を基本とするが、頸部にはヨコ方向のヘラミガキが施され、上部はナデ消しが行われる。2は口径17.0cmを測る広口壺で、大きくひらく口縁上端部は面をもち、端部を大きく垂下させ、外端部をつくり出す。内外面ともにハケ調整で、頸部外面にはクシ描直線文が、口縁外端面には波長の細かい波状文がそれぞれ施される。また、胎土中には、雲母が多量に含まれており、搬入土器の可能性はある。3は、口径8.2cmを測る小型の広口細頸壺である。口縁外端面には刻み目が、頸部外面にはクシ描直線文が施される。4・5は、底部である。4は底径8.0～8.5cmを測るもので、外面及び外底面にはヘラミガキが施された後、端部をヨコナデによって調整する。5は底径6.0cmを測り、底部の形状は上げ底状を呈する。外面は、僅かなヘラミガキが観察されるが不明瞭である。内面は、板状工具によるナデ調整がみられる。

6・7は、紀伊型甕である。6は口径19.8cmを測る口縁の破片で、口縁端部の形状はやや丸みをもち、体部外面はヨコ方向のヘラケズリの後、上位から口縁部にかけてヨコナデ調整を施す。7は底径9.0cmを測る底部で、外面はタテ方向のヘラケズリの後、ヨコナデによって調整する。

これらの土器は、2を除いて胎土中に石英・結晶片岩などを含むことから、在地系の土器と考えられ、時期的には紀伊第Ⅱ様式に併行するものと考えられる。

[SK-20他出土土器] (第15図8～19、図版11)

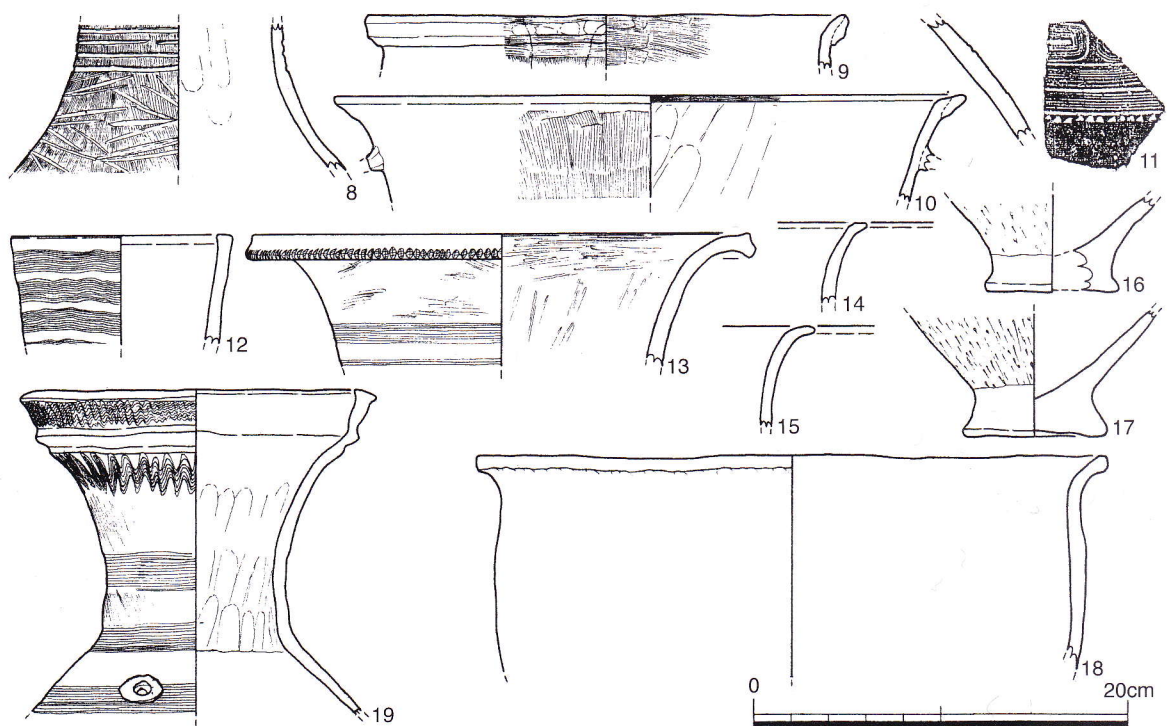
8は広口壺の頸部で、タテ方向のハケ調整の後、部分的にヘラミガキを行い、ヘラ描による沈線



第14図 遺物実測図1

を4条以上施すものである。9・10は、口縁部に突帯を貼付けるものである。9は口径25.8cmを測る甕で、口縁部はナデと指オサエによって成形し、体部から口縁部にかけてハケによる調整が施され、口縁端部のハケメはナデ消される。内面は、ヨコ方向のハケ調整である。10は、口径33.8cmを測る鉢で、外面にはタテ方向のハケ調整の後、把手が貼付けられている。内面はタテ方向のナデによる調整がみられるが、口縁内端部にはヨコハケがみられる。11は壺の体部上半の破片であり、外面にはクシ描による直線文・流水文の後、ヘラ描による沈線を施し、最後にヘラ先による三角形の刺突文が施される。12は、口径12.0cmを測る直口壺である。内外面ともにナデによる調整の後、外面にはクシ描直線文が4条以上施される。13は口径26.4cmを測る広口壺で、口縁端部を強いヨコナデによって肥厚させながら垂下部をつくり、その下端部にはクシ先によって刻み目を施している。内外面ともにヘラミガキによって調整され、外面にはクシ描直線文が2条以上施される。14～17は、紀伊型甕である。14・15は口縁部の破片で、14の口縁上端部は強いヨコナデ調整によって面をなすが、15はやや丸みのある形状を呈する。16・17は、底部である。ともにタテ方向のヘラケズリの後、下端部はヨコ方向のナデによって調整される。底径は16が7.0cm、17が7.6cmである。18も甕で口径33.8cmを測り、口縁端部はやや肥厚し、体部の張りが弱い形態を呈する。19は口径19.2cmを測り、口縁部が有段状をなす直口壺である。口縁部は強いヨコナデ調整が施され、口縁部と頸部の境は突帯状に肥厚している。外面はタテ方向のハケの後、ナデによって調整し、口縁部はクシ描波状文が2条、頸部から体部にかけてはクシ描直線文が3条以上施された後、円形浮文が貼付けられ、浮文はさらに竹管文によって加飾されている。

以上の土器は、胎土の特徴から在地系の土器と考えられ、時期的には8～10が紀伊第Ⅰ-2～3様式、11～18が紀伊第Ⅱ様式、19が紀伊第Ⅲ-3様式に併行するものと考えられる。これらの出土位置は、8・9・11が第6層、10がSK-20、12・18が第4b層、13がSK-15、14～16が第5層、17



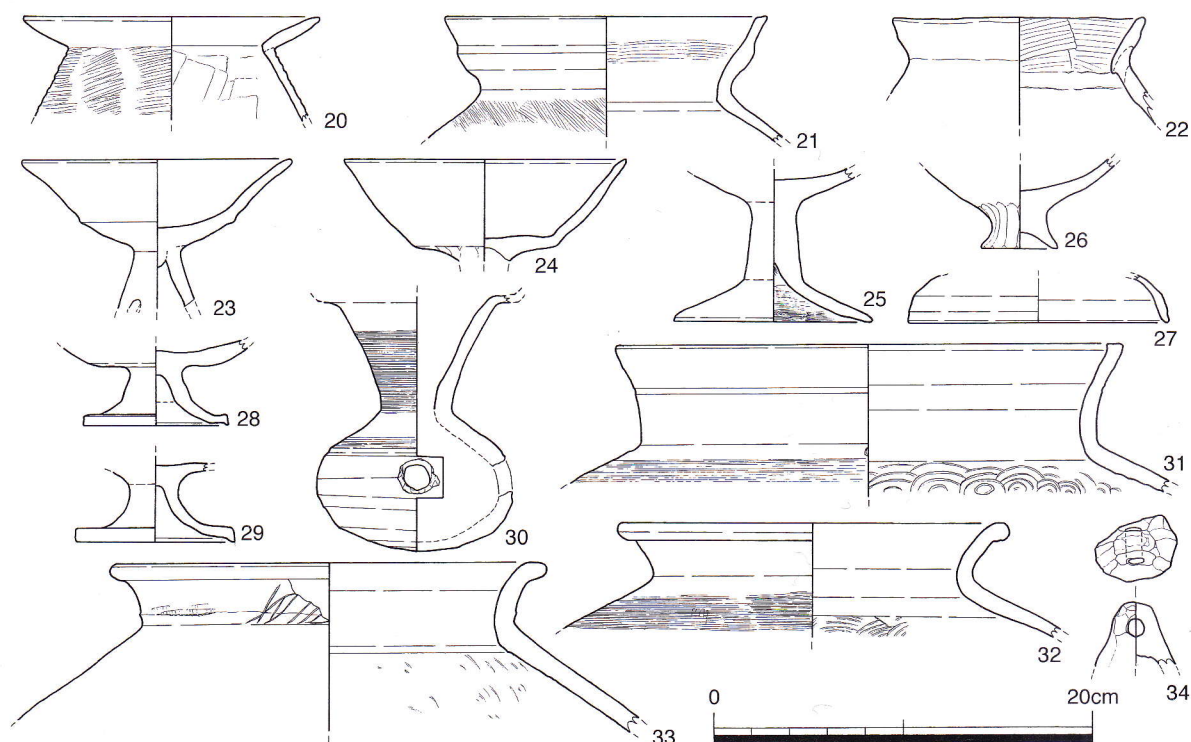
第15図 遺物実測図2

がP-47、19がSK-12であるが、11については第5層の混入である可能性が高い。

(2) 古墳時代の土器 (第16図20~34、図版12)

20~26は、土師器である。20は甕で、口径15.6cmを測り、口縁部は「く」の字状に外反し、体部はヨコ方向のタタキ、内面はヨコ方向の板ナデによって調整される。21は壺とみられ、口径16.8cmを測り、やや退化した有段状の口縁形態を呈する。内外面にはナデに先行するハケ調整がみられる。22は口径13.2cmを測る甕で、全体的にやや粗雑なつくりであり、口縁部内面にはヨコ方向の粗いハケ調整が施される。23~25は高杯である。23・24は杯部外面に段を有し、口径は23が14.0cm、24が14.8cmを測る。ともにナデによる調整が施され、23の脚部には円孔が穿たれている。25はラッパ状にひろく脚部で、杯部外面及び、脚部内面はハケ調整が施される。26は脚台付きの製塩土器で、脚部底径4.0cmを測り、脚部には成形時の指頭圧痕がみられる。

27~34は、須恵器である。27は口径13.6cmを測る杯蓋で、口縁端部はやや屈曲させ、丸くおさめる。28・29は低脚の高杯で、脚部は扁平に大きくひらき、下方に屈曲して接地するものであり、脚部径は28が7.6cm、29が8.3cmを測る。30は、甕である。口縁部を欠損する以外はほぼ完形であり、口縁形態は有段状を呈するものと考えられる。また円孔の周囲は、使用により破損している。31~33は、甕である。口縁部の形態は、31が直立ぎみに立ち上がるもので、32・33は口縁部を外反させ、端部が肥厚するものであり、口径は31が26.8cm、32が20.6cm、33が23.0cmを測る。31・32は体部外面にカキメ調整、体部内面には当て具の痕跡がみられるが、33は内外面ともにナデ消しが行われる。また31の肩部には、小突起の剥離痕跡が僅かに残存し、33の口縁部外面にはヘラ記号と思われる刻線がみられる。34はイイダコ壺である。残存高3.4cm、残存幅4.2cmの破片で、全形は不明であるが、鐸状をなすものと考えられる。把手部には、直径9~10mmの円孔が穿たれる。



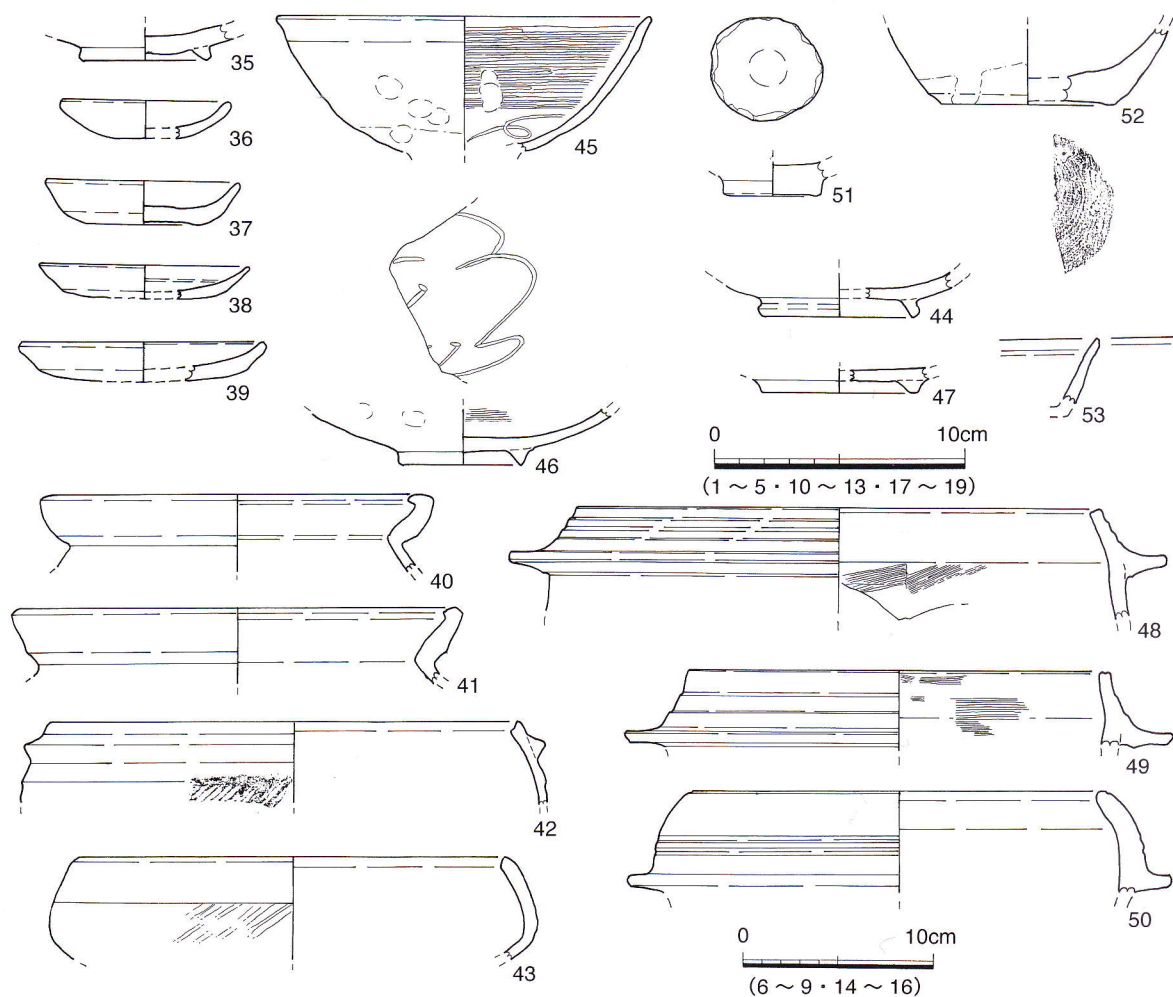
第16図 遺物実測図3

これらの出土位置は、20がSB-2、21・24・26・28～33が第3層、22・23がSD-5、25がSK-7、27がSB-1、34がSD-1bから出土したが、33については同一個体と考えられる破片がSB-1から出土しており、本来はSB-1出土の土器である可能性が高い。

(3) 中世の土器 (第17図35～53、図版13)

35～43は土師器である。35は高台径4.7cmを測る碗で、赤褐色を呈する。36～39は皿で、褐色系の色調を呈し、胎土は密である。36は口径6.6cm、器高1.5cm、37は口径7.6cm、器高1.6cmを測る。内面にタール状のものが付着していることから灯明皿とみられる。38は口径8.3cm、器高1.3cm、39は口径9.5cm、器高1.6cmを測る。40・41は釜の口縁部である。40は口径19.2cm、41は口径23.0cmを測る。40・41は鎌倉時代のもものとみられる。42・43は塼である。42は口径23.8cmを測るもので、外面口縁直下に突帯をもつものである。突帯下には平行タタキ調整が施されている。43は口径22.5cmを測るもので、外面体部側面に浅い平行タタキ調整がみられる。42・43は室町時代のもものとみられる。

44～47は瓦器碗である。44は高台径5.3cmを測るものである。45は口径14.6cmを測るもので、外面には指オサエ、内側面には密なミガキ調整が施されている。また、外面には重ね焼きの痕跡がみられる。46は高台径4.7cmを測り、内面には45と同様に密なミガキ調整が施されている。44・45は共に内底面に連結輪状暗文がみられる。47は高台径6.1cmを測るものである。



第17図 遺物実測図 4

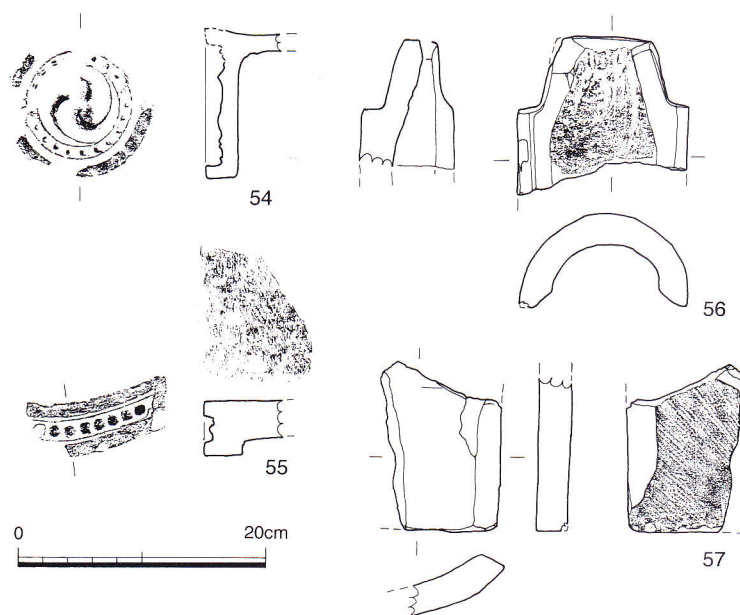
48～50は瓦質土器羽釜である。これらは黒灰色を呈し、胎土は密である。48は口径27.8cm、鋳部径35.1cmを測り、内面にはナナメ方向のハケ調整がみられる。49は口径22.4cm、鋳部径28.4cmを測り、口縁部内面にはヨコ方向のハケ調整が施されている。50は口径21.8cm、鋳部径29.0cmを測る。胎土は赤褐色であり、結晶片岩の砂粒を含むものである。

51・52は瀬戸美濃系陶器である。51は天目茶碗の高台部で、高台径3.4cmを測る。円板状に周囲を打ち欠き転用されたものである。52は黒褐釉を体部下半まで施釉した壺の底部である。底部径6.8cm、残存高3.0cmを測り、底部には回転糸切り痕がみられる。外底面は、化粧掛けが施されているものである。53は輸入磁器の白磁皿である。口縁部は釉をケズリ取ったものであり、いわゆる口禿げのものである。48～53は室町時代のものとみられる。

それぞれの出土位置は、35・44は第2区第3層、36～38・40～43・45・46・48・50～52は第1区第2層、39・49・53はSD-1aの第2層、47は第1区第3層である。

(4) 瓦 (第18図54～57、図版13)

54は左巻三巴文軒丸瓦で、外区に圈線と連珠文を配する。瓦当径12.0cm、瓦当幅1.2cm、丸瓦部厚さ1.3cm、残存長6.0cmである。珠文径3mmを測り、珠文数は21個を復元できる。巴尾部が接することによって圈線状を呈する。巴文様の中心部には直径1mmの突起がみられる。55は連珠文軒平瓦で、周縁近くに細い圈線を配しているものである。瓦当幅4.3cm、瓦当厚3.1cm、



第18図 遺物実測図5

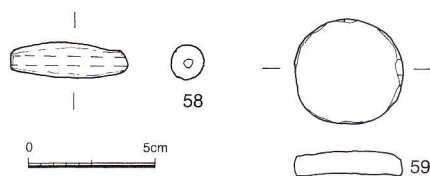
平瓦部の厚さ2.9cmを測る。珠文は直径1.0cmを測り、珠文数8個以上である。56は丸瓦の玉縁部である。凹面に布目痕がみられる。玉縁部幅10.2cm、玉縁部端部幅7.0cm、厚さ2.5cm、残存長12.2cmを測る。57は平瓦の木口部で、凸面に斜めコビキ痕が顕著にみられるものである。残存幅8.2cm、厚さ2.5cm、残存長12.4cmを測る。54～57は表面に細かな離れ砂の痕跡がみられる。

これらの出土位置は、第1区第2層からで、鎌倉時代のものとみられる。

(5) 土製品 (第19図58・59、図版13)

58は管状土鍾である。両端の細くなる円管形のものであり、全長4.7cm、最大径1.4cmで、重量は7.1gである。黒褐色を呈し、古墳時代のものと考えられる。59は弥生土器の壺胴部の破片を利用した円板状転用品である。周囲の破断面を丁寧に研磨したものであり、直径4.0cm、厚さ9mmで、重量は16.8gである。

これらの出土位置は、58がSD-1aの第1層、59はP-63である。



第19図 遺物実測図6

(6) 石器・石製品

[磨製石器] (第20図60~64、図版14)

60・61は結晶片岩製の磨製石庖丁である。ともに直線刃で半月形を呈するものとみられ、61が約1/2程度に欠失している。60の刃部は、使用による消耗が著しく明瞭な稜が認められない。また裏面の紐孔には上部に向け明瞭な抉れが観察できる。61は背部と刃部及び側面の一部にそれぞれ明瞭



第20図 遺物実測図 7

な敲打痕がみられるもので、石庖丁の破損品を叩き石として使用した可能性が考えられる。このような敲打痕は、60の背部にも観察され、この敲打によって紐孔部の一部まで破損している。ともに暗緑色の色調であるが、60には石英質の白色の部分の確認できる。

62は、結晶片岩製の扁平両刃石斧である。刃部の約1/2程度を欠損しているが、復元刃部長2.9cm、長さ4.9cm、最大厚1.0cmを測るもので、重量は22.4gである。刃部の研磨は両側面の一部まで及んでいる。また上部の両側縁部には敲打痕が認められ、紐などを使用して固定するための挟りの可能性が考えられる。さらに、背部の状態や形状などからみて、石庖丁の破損品を転用した石斧の可能性も考えられる。

63・64は結晶片岩製の磨製石斧を転用した叩石と考えられる。63は太形蛤刃石斧の転用品とみられ、裏面は大きく欠損しているものの長さ12.5cm、最大幅5.3cm、残存厚3.6cmを測り、重量は400gである。叩石として使用された敲打痕は、両端部と側縁面に観察できる。64は長さ10.2cm、最大幅4.1cm、厚さ2.6cm、重量200gのもので、裏面の一部が欠損している。敲打痕は両端部と両側縁面を中心に顕著にみられ、側縁部は敲打によってやや挟れるように窪んでいる。

これらの出土位置は、60が第1区のP-67、61が第1区第3層、62が第1区第6層、63が第1区第2層、64が第2区第3層である。

〔礫石器〕(第20図65～67、図版14)

65は砂岩の河原石を用いた叩石である。長さ8.6cm、幅7.1cm、厚さ4.3cmを測り、重量350gのもので、側縁面を中心に敲打痕が観察できる。

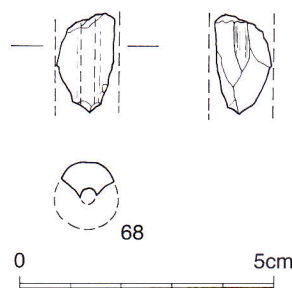
66は砂岩の自然石を利用した重量1.57kgを量る台石である。上面は約1/2程度を砥石として使用したとみられる研磨痕がみられ、平滑になっている。他の部分は上部から敲打を受けたとみられる痕跡が明瞭に確認できる。側面の1面には同様の敲打痕が観察できるとともに、側縁部は叩石としても使用したと考えられる敲打痕が確認できる。また、ほぼ全面が火を受けたとみられ、黒褐色に変色している。

67は砂岩を用いた重量670gを量る砥石である。両端部の2面を除く他の面すべてに使用痕が認められる。研磨痕には筋状に窪んだ帯状の単位が6単位以上確認できる。また平滑面の側縁部に敲打痕がみられることから、叩石もしくは台石としても使用されたものと考えられる。

これらの出土位置は、65が第2区SK-7、66が第1区SD-3、67が第1区第5層である。

〔碧玉製管玉〕(第21図68、図版14)

68は大半が欠失した碧玉製管玉であり、残存長2.0cm、復元径1.3cm、穿孔径3.5mmである。この管玉は、第1区SD-1aから出土した。この管玉の色調は、暗緑色を呈する。



第21図 遺物実測図 8

(7) 自然遺物

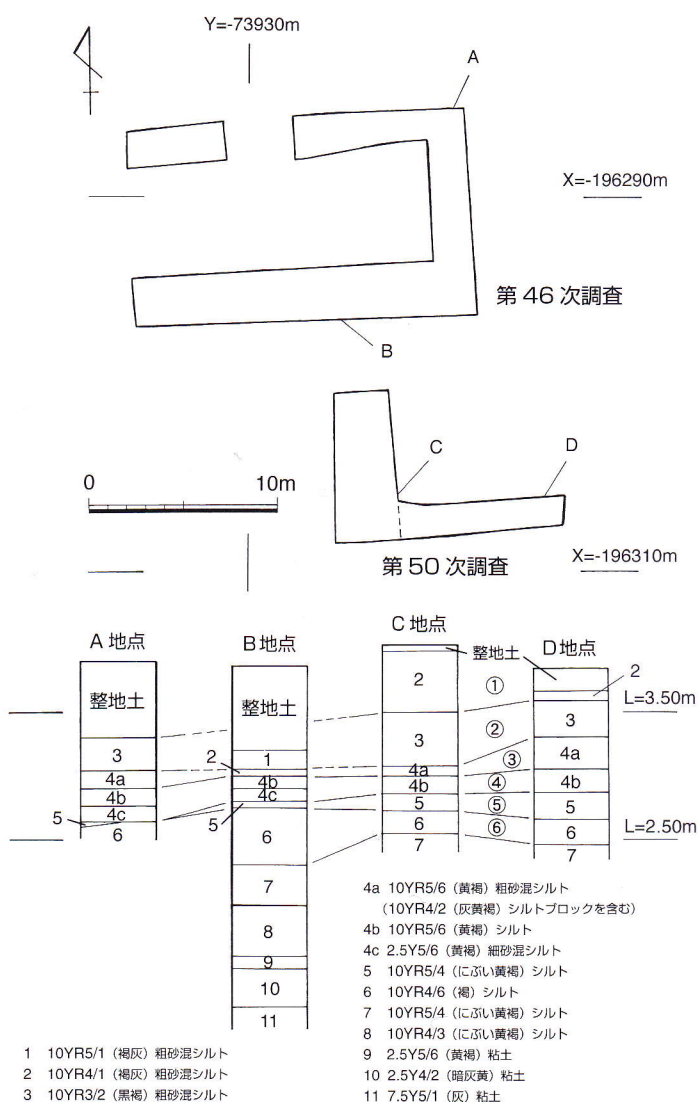
今回の調査における自然遺物では、代表されるものに馬歯がある。馬歯は第2区SK-7から1点(写真1)出土したほか、SK-2から破片が出土している。



写真1 自然遺物(馬歯)

6. まとめ

今回の調査成果のひとつとしては、これまで確認されていた4面の遺構面のほか、新たに2面の遺構面を検出し、合計6面の遺構面の存在を明らかにしたことである(第22図)。2000年に調査を行った北側隣接地にあたる第46次調査では、今回の第1・2・3・5遺構面に対応する4面の遺構面を検出していたが、この調査に加えて、今回第5層上面及び第7層上面において新たに遺構を検出することができた。遺構面の時期としては、まず弥生時代に比定できるものとして、第6遺構面(第7層上面)が紀伊第I様式の新段階古相、第5遺構面(第6層上面)が紀伊第I様式の新段階新相、第4遺構面(第5層上面)が紀伊第II様式の新段階、第3遺構面(第4b層上面)が紀伊第II様式の新段階、第2遺構面(第4a層上面)が紀伊第III様式の新段階以降にそれぞれ位置づけられる。また第2遺構面では、弥生時代中期から鎌倉時代までの遺構を検出し、第1



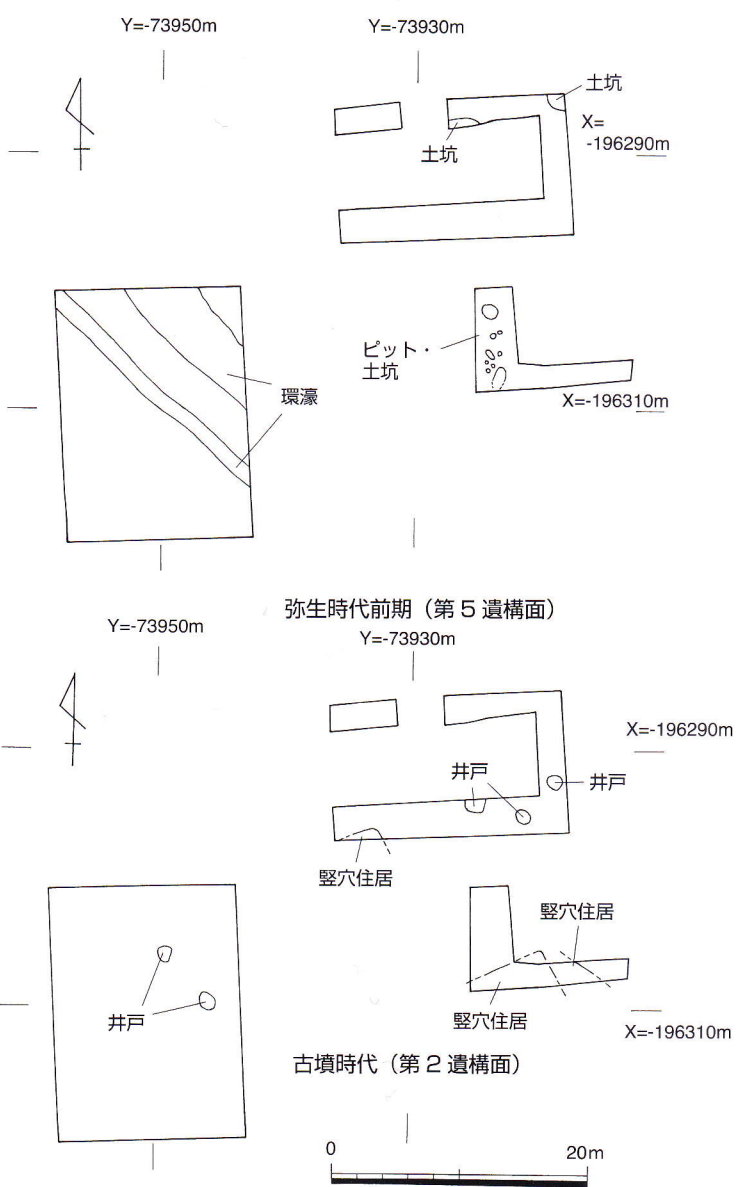
第22図 調査地周辺の遺構面対応土層柱状模式図

遺構面（第3層上面）では室町時代から江戸時代までの遺構をそれぞれ検出した。さらに、第7層においても遺物が含まれている点からみて、紀伊第Ⅰ様式の新段階古相以前の生活面は第7層より下層に存在する可能性があり、今回の調査ではその状況を確認するところまでには至っていない。

また第46次調査地との土層の対応関係からみて、江戸時代の水田開発等によって第3層などが削平を受けているB地点を除いて、他の地点ではそれぞれ対応する土層を確認することができた。この状況から、第5層を境としてその上位にあたる第1～4遺構面は北西側に位置するA地点から南東側に位置するB地点に向かって緩やかに高くなり、また下位にあたる第5遺構面はB・C地点の標高が高く、第6遺構面はC地点の標高が最も高いという結果が得られた。このことから、弥生時代中期以降の遺構面が南東側に向かって高くなっていくものとみられ、集落の中心地と考えられる微高地部が当調査地の南東側に位置するものと考えられる。また第5遺構面（第6層上面）に対応するとみられる第26次調査及び第45次調査において検出した弥生時代前期の環濠からみて、当調査地がこの前期環濠集落の内側に位置するものとみられることから、現存する環濠内部の遺構面の標高が約2.6m程度であるものと考えられる。

遺構からみた成果では、まず弥生時代前期の遺構検出である。今回の調査では第7層上面において新たに遺構を検出し、既往の調査成果のなかでもより古い段階の生活面が存在することを明らかにした。また今回の調査地は、環濠推定位置から10m程度に隣接する調査区であったが、前期環濠に対応する第5遺構面においてピットや土坑を検出することができた。北側隣接地の第46次調査地でも部分的な下層調査であったが土坑2基を検出しており、これらの環濠集落内部ではかなりの密度で遺構が検出されるものと推測できる（第23図上）。

次に、古墳時代の遺構では、今回の調査において竪穴住居を2棟検出し、第46次調査で検出した1棟とともに、明らかに隣接して確認できる状況にあり、当遺跡では合計3例目にあたる。しかし、こ



第23図 周辺の主要遺構配置図

これらの竪穴住居は調査区が狭少な範囲であったことなどから、全形を明らかにしたものではない。また第46次調査検出の竪穴住居のように床面までが削平を受け、壁溝だけが残存しているという極めて遺存状態の悪い状況にある。このことは、第45次調査地においても同様で、深掘された井戸などの遺構だけが残存している状況である。これに比べ、今回の調査区は比較的残存状態が良く、2棟の竪穴住居とも壁面や覆土が遺存しており、太田・黒田遺跡で検出された古墳時代の竪穴住居では最も良好なものといえる。これらの竪穴住居は、方形から隅円方形のプランをもつもので、その方向性はすべて座標北からやや西に振っている。また時期的には今回の調査において検出したSB-2が最も古く、古墳時代初頭に位置づけられ、次いで第46次調査時のものが前期の範疇に、そして今回のSB-1が後期に比定できる。竪穴住居以外に多数検出されている井戸は、第45次調査で2基、第46次調査で3基検出されているが、これらはすべて前期の範疇におさまるものである(第23図下)。さらに、今回の調査において中期に比定できる溝(SD-5)や土坑(SK-2)、後期に比定できる土坑(SK-7)などを検出していることと、直上の遺物包含層(第3層)から古墳時代を通した遺物が多量に出土していることなどから、当地周辺が古墳時代集落の中心部分の一角であるものと考えられる。

以上、今回の調査成果のなかで特に重要視された弥生時代前期と古墳時代についてふれてきたが、第3・4遺構面に対応する弥生時代中期前半の遺構や、第2遺構面において検出された弥生時代中期中頃と平安時代から鎌倉時代にかけての遺構、第1遺構面において検出された室町時代から江戸時代の遺構についても良好なものを多数検出した。また室町時代末期の太田城に関する明確な遺構は検出できなかったが、第1遺構面検出の溝(SD-1・2)がその時期の範疇におさまるものと考えられるため、今後の調査において関連性を確認する必要性がある。

最後に、遺物について、その割合からみれば弥生・古墳時代の遺物量が圧倒的に多くをしめる。特殊な遺物では、古墳時代とみられるイイダコ壺が挙げられる。この土器は、主として大阪湾沿岸域で出土するもので、和歌山県内での出土例は極めて少なく、和歌山市内では海浜集落である西庄遺跡と関戸遺跡で各1点の2点のみが知られている。このイイダコ壺が太田・黒田遺跡にもたらされていることについても今後の検討課題のひとつに挙げられるものであろう。

【参考文献】

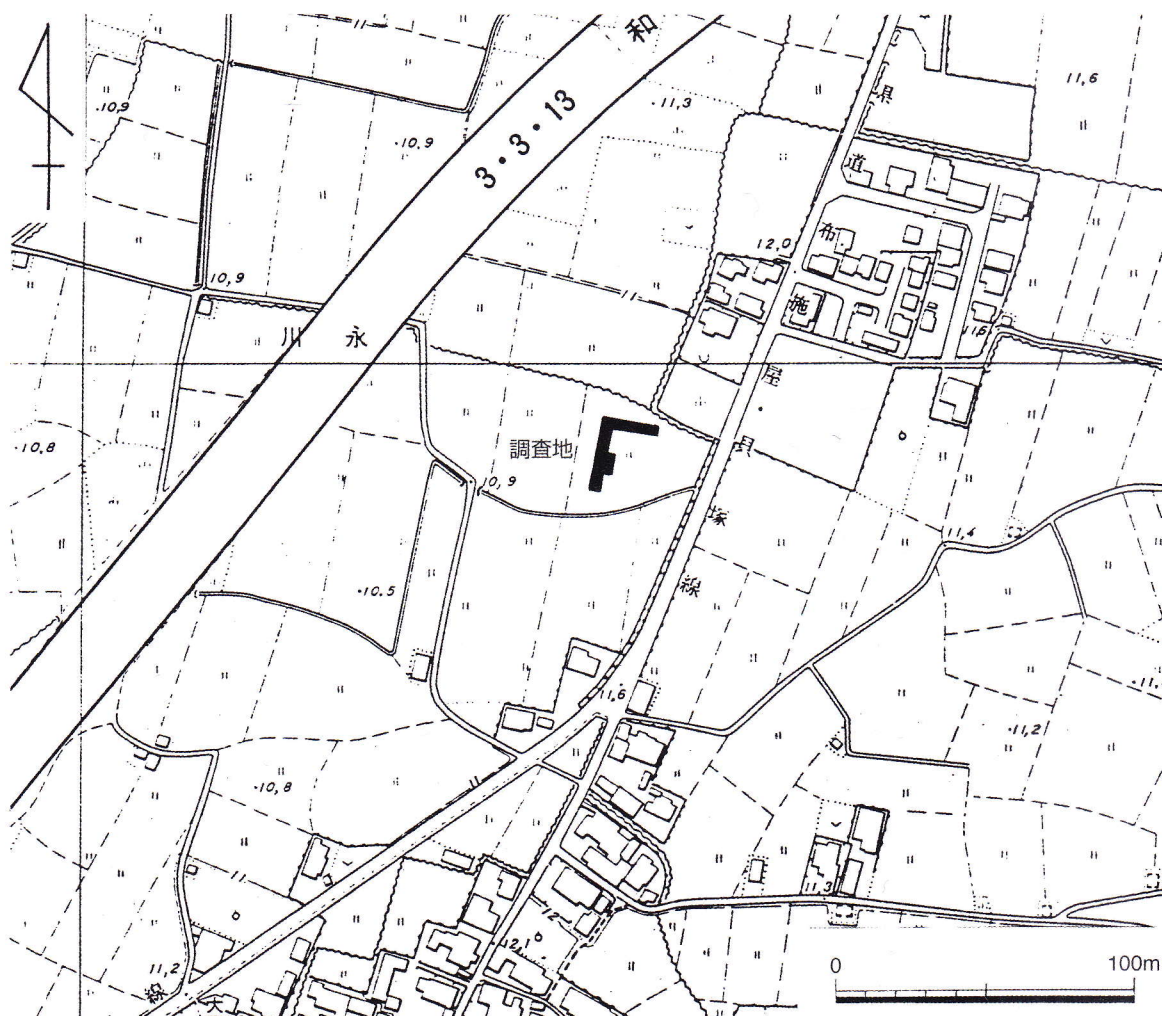
- 『太田・黒田遺跡第26次発掘調査概報』(財)和歌山市文化体育振興事業団 1995年
- 『太田・黒田遺跡第45次発掘調査現地説明会資料』和歌山市教育委員会・(財)和歌山市文化体育振興事業団 2000年
- 『太田・黒田遺跡第46次調査』『和歌山市内遺跡発掘調査概報—平成12年度—』和歌山市教育委員会 2002年
- 大野左千夫他「和歌山県」埋蔵文化財研究会第19回研究集会『海の生産用具—弥生時代から平安時代まで—』1986年
- 『西庄発掘調査Ⅱ』(財)和歌山県文化財センター 1999年

川辺遺跡 発掘調査

1. 調査の契機と経過

川辺遺跡は、和歌山市の北東部、那賀郡岩出町との境界近くに位置する遺跡である。川辺遺跡周辺は、和歌山市内においても、弥生時代以降の大規模な複合遺跡が集中する箇所の一つであり、また『日本書紀』安閑二年（535年）五月の条に記述された「河辺屯倉」が設置されたと考えられている地域である。本遺跡は、1987年度から1992年度にかけて実施された、一般国道24号和歌山バイパス工事に伴う調査において、縄文時代晩期から近世にわたる多数の遺構・遺物が検出され、大規模な複合遺跡として周知されるようになった。近年にも県道和歌山貝塚線道路改良工事に伴い、遺跡北部の調査が行われ、弥生時代後期から中世にかけての遺構・遺物が検出されており、遺跡中央部から北部にかけては、その様相が明らかになりつつある。

今回の調査は、『和歌山県埋蔵文化財包蔵地所在地図』に記載され、縄文時代から中世の集落跡として周知されている川辺遺跡（遺跡番号145）について、その実態を解明するために、和歌山市教育委員会が国庫補助金を得て発掘調査を実施したものである。調査は財団法人和歌山市文化体育振興事業団が同教育委員会から委託を受け、遺跡中央部にあたる和歌山市川辺237番地において、面積192㎡を調査対象として実施した（第1図）。現地における調査の期間は、平成13年12月26日から平成14年2月25日までの約2ヶ月間を要した。



第1図 調査位置図

2. 位置と環境

和歌山市は、和歌山県の北西端に位置し、北は和泉山脈を境に大阪府泉南郡岬町・阪南市に、東は和歌山県那賀郡岩出町及び貴志川町に、南は海南市に接し、西は紀伊水道に面している。本市は、和泉山脈の南裾に沿って西流し、紀伊水道に流れ込む紀ノ川により形成された和歌山平野を中心に立地する。今回報告を行う川辺遺跡は、紀ノ川の河口から約12km上流の北岸に位置し、和泉山脈の南麓、紀ノ川との間に形成された標高11～12mを測る沖積平野の微高地に立地する（第2図）。

川辺遺跡周辺における旧石器時代の遺跡は、現在のところ知られていないが、紀ノ川北岸地域の遺跡として、鳴滝遺跡・園部出土のナイフ形石器が知られている。

縄文時代の遺跡としては、川辺遺跡（1）、高井遺跡（7）、六十谷遺跡（9）など平野部から段丘上に営まれた遺跡と、湯谷池西遺跡（13）や名草池北遺跡（18）など丘陵部に位置する遺跡が知られており、土器や石器などの遺物が採集されている。川辺遺跡では、後期から晩期の土器が多数出土している他、竪穴住居、土器棺墓等の遺構が検出されている。

弥生時代には川辺遺跡、宇田森遺跡（2）、北田井遺跡（3）、西田井遺跡（4）、田屋遺跡（5）、弘西遺跡（19）、山口遺跡（22）、吉田遺跡（24）など多くの遺跡が分布する。このことは、弥生時代中期以降に本遺跡の位置する微高地に開発が及び、それ以降安定した生活域として利用されたことを示している。宇田森遺跡は、溝や土坑から一括遺物の出土があり、紀ノ川下流域における弥生時代中期土器編年の標識遺跡となっている。またこれら平野部の集落に対し、高地性集落として橘谷Ⅰ～Ⅲ遺跡（17）があげられる。橘谷Ⅰ～Ⅲ遺跡は4本の空濠で囲まれた後期の集落であり、5棟の竪穴住居が確認されている他、近接地から銅鐸が出土しており注目される。

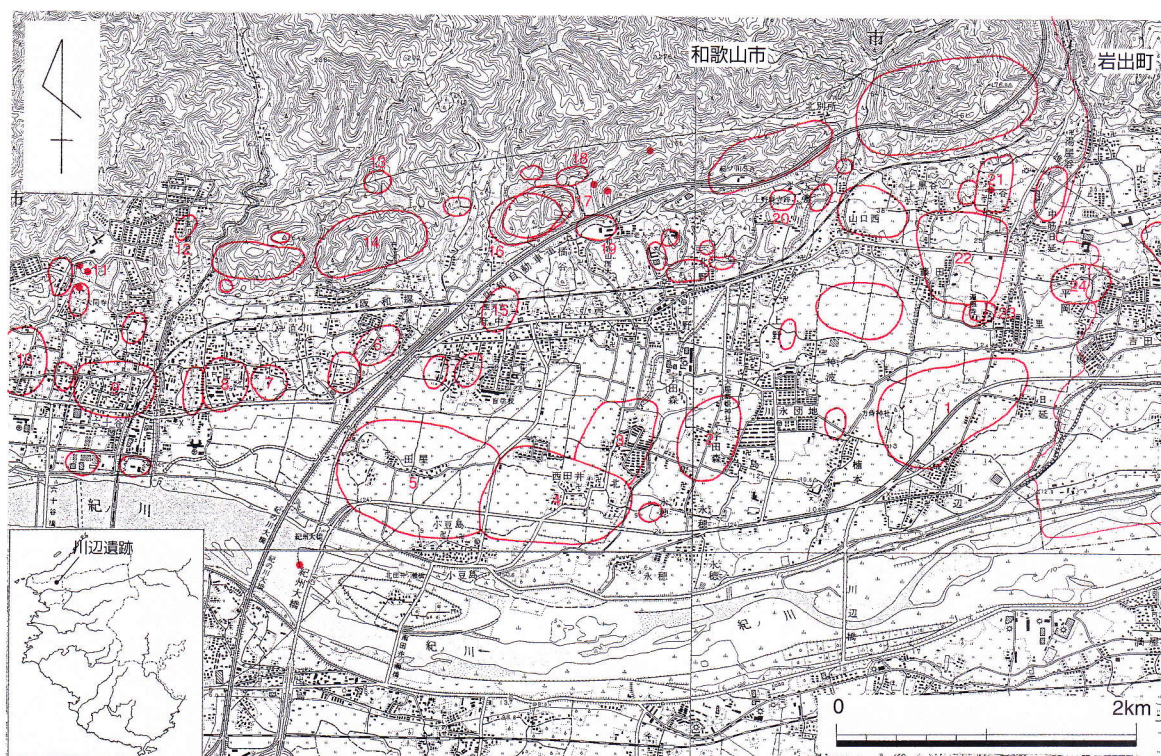
古墳時代の集落も弥生時代の集落域と重なり、本遺跡周辺の平野部に展開するものが多い。その中で丘陵上に営まれた集落として府中Ⅳ遺跡（6）がある。弥生時代後期後葉から古墳時代前期にかけて営まれた集落で、県内最大級の規模をもつ一辺8mを越す大型住居が検出されている。古墳の築造は、和泉山脈南端の丘陵部において馬甲・馬冑を初め多くの渡来系遺物が出土した大谷古墳、晒山古墳群、鳴滝古墳群、六十谷古墳群（12）、直川八幡山古墳群（14）、八王寺山古墳群（16）などが位置する。六十谷古墳群は1号墳が直径10mの円墳、2号墳が全長27mの前方後円墳であり、埋葬施設は検出されなかったが、出土した埴輪類により前期後半から中期前半にかけて築造されたことが明らかになっている。八王子山古墳群は、前方後円墳3基、円墳17基からなる古墳群である。調査が実施された8号墳は直径35mを測る円墳で、埋葬施設は木棺直葬である。鋸歯文鏡・鉄剣・鉄槍・鎌・琴柱形石製品・玉類などの副葬遺物が出土しており、5世紀前半の築造と考えられている。古墳時代後期には、八王子山16号墳において、両袖式の横穴式石室が確認されている。またこれら丘陵に立地するものの他、平野部においても古墳は造営されていたようであり、北田井遺跡では5世紀後半の埋没古墳が確認されている。

歴史時代以降、紀ノ川北岸地域では南海道に面する形で、直川廃寺跡（8）、上野廃寺跡（20）、山口廃寺跡（21）などの寺院が建立された。ほぼ全容が明らかにされた上野廃寺跡は、東西両塔を備えた薬師寺式の伽藍配置をとり、西塔の西方に廻廊から突出する形で講堂が設置されている。山口廃寺跡・直川廃寺跡の伽藍配置は不明ながら、創建瓦と見られる複弁八葉蓮華文軒丸瓦が出土し

ており、奈良時代前期の創建と考えられる。また川辺遺跡の西3 kmに位置する府中遺跡（15）は、「府中」という地名が残り、紀伊国府跡と推定されている遺跡である。過去の調査では、それに関わる明確な遺構は確認されておらず、実態は不明であるが、奈良・平安時代の菱形叩き目文を有する平瓦や陶硯と思われる遺物が出土しており、少なくとも平安時代には国府の設置が行われたものと考えられる。一方、この時期の集落遺跡としては、吉田遺跡において奈良時代の掘立柱建物、竪穴住居、火葬墓等が検出されており、竪穴住居からは墨書土器が出土している。高井遺跡からは、平安時代の掘立柱建物8棟以上が検出され、緑釉・灰釉陶器などの搬入土器が出土している。府中Ⅳ遺跡からも、復元条里の方向に即した奈良時代の掘立柱建物が2棟検出されているなど、これらの遺跡の分布とその性格から、古代以降、紀ノ川北岸地域が国府・国分寺・国分尼寺の設置や南海道の整備に伴い、重要な位置を占めていたことが知られ、これらの集落遺跡も官衙及びその関連施設に関わる遺跡としての性格をもつようになる。

鎌倉・室町時代においても、本遺跡周辺には西田井遺跡、高井遺跡、吉田遺跡など、多くの遺跡がある。西田井遺跡では、「コ」の字状の溝によって区画された掘立柱建物群、井戸、池泉が検出され、これは室町時代における一つの屋敷としての遺構群と考えられる。高井遺跡からは掘立柱建物、北宋銭15枚以上が出土した土葬墓、火葬施設の可能性がある集石遺構などが検出されている。

江戸時代の遺跡としては、紀州徳川家の別邸である山口御殿跡（23）が知られており、既往の調査によって礎石や石組井戸、埋桶遺構、瓦敷き溝、周濠などの関連遺構が検出されている。



番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代
1	川辺遺跡	縄文～中世	7	高井遺跡	縄文～中世	13	湯谷池西遺跡	縄文～弥生	19	弘西遺跡	弥生
2	宇田森遺跡	弥生	8	直川廃寺跡	奈良～平安	14	直川八幡山古墳群	古墳	20	上野廃寺跡	白鳳～平安
3	北田井遺跡	弥生～古墳	9	六十谷遺跡	縄文～弥生	15	府中遺跡	奈良～平安	21	山口廃寺跡	白鳳
4	西田井遺跡	弥生～中世	10	有功遺跡	古墳～中世	16	八王子山古墳群	古墳	22	山口遺跡	弥生～中世
5	田屋遺跡	弥生～古墳	11	大同寺墳墓	奈良～平安	17	橘谷Ⅰ～Ⅲ遺跡	弥生	23	山口御殿跡	江戸
6	府中Ⅳ遺跡	弥生～中世	12	六十谷古墳群	古墳	18	名草池北遺跡	縄文	24	吉田遺跡	弥生～奈良

第2図 川辺遺跡周辺の遺跡分布図

3. 既往の調査

今回の調査地点は、川辺遺跡のほぼ中央部にあたる。既往の調査としては、一般国道24号和歌山バイパス工事（1987～1992年度調査地）、県道和歌山貝塚線道路改良工事に伴う調査（1998・2000年度調査地）が財団法人和歌山県文化財センターにより行われている（第3図）。以下、既往の調査成果について、その概要を略述する。

1987～1992年度調査 調査は遺跡の南西部から北東部を横断するように、幅30m、総延長1kmの調査区（Ⅰ～Ⅸ区）が設定され、約30,000㎡の範囲について発掘調査が実施された。

Ⅰ区 上下二面の遺構面が確認された。上面では、中世の掘立柱建物2棟以上、溝、井戸の他、木棺墓21基などが検出されている。掘立柱建物は木棺墓の以前と以後とに分けられるが、詳細な時期については定かではない。下面では、弥生時代末から古墳時代初頭の溝、古墳時代末から飛鳥時代の竪穴住居・掘立柱建物群、火葬墓の可能性ある土坑などが検出された。掘立柱建物には、総柱で、方形の掘方をもつものがあることから、倉庫状建物の可能性が指摘されている。

Ⅱ区 上下二面の遺構面が確認された。検出遺構は、地割りに伴うと推定される東西南北の方向性をもつ近世後期の溝、近世の桶棺が検出されている。遺構は希薄で、東側では遺構が検出されおらず、西側においても、Ⅰ区上面で検出された中世の遺構は全く確認されていない。下面では、弥生時代から奈良時代にかけての溝状遺構が検出されている。調査区を蛇行する弥生時代の溝は、幅5m、深さ1.1mを測る自然流路で、弥生時代における住吉川本流の可能性が考えられている。

Ⅲ区 遺構面は1面のみであり、溝状遺構が多数検出された。この中でSD237・238は、幅1.5～2.4m、深さ0.6～0.8mを測る道路状遺構の側溝である。溝の内端距離は8.0m、外端距離は12.0mを測り、奈良時代から平安時代にかけての多量の土器が出土している。

Ⅳ区 上下二面の遺構面が確認された。上面では、古墳時代後期の溝2条など溝状遺構が検出されているが、遺構の密度は希薄である。下面では、縄文時代の竪穴住居2棟、同時期と考えられる焼土土坑1基の他、小規模なピットが多数検出されている。

Ⅴ区 上下二面の遺構面が確認された。上面では、古墳時代前期から後期を中心とした溝状遺構が検出されているが、西側は遺構の密度が希薄である。下面では、弥生時代末から古墳時代初頭の溝1条の他、ピットが確認されているが、上面と同じく遺構は希薄である。

Ⅵ区 上中下3面の遺構面が確認された。上・中面では、銅地の耳環が1点、滑石製紡錘車が1点出土した古墳時代後期の溝、総柱の掘立柱建物1棟、中世の石組井戸、河原石を敷き詰めた土坑2基、土坑群が検出されている。下面では、縄文時代の溝・土坑、弥生時代の溝が確認された。また、Ⅶ区においては、包含層から多量の縄文土器の他、遮光器土偶の腕手部分が1点出土している。

Ⅶ区 上下二面の遺構面が確認された。上面では、古墳時代後期から中世の溝・石組井戸、土坑、土師器皿7枚・鉄剣が副葬され、鉄釘が原位置で出土した木棺墓などが検出されている。下面では、幅9mを測る縄文時代の落ち込み状遺構から、多量の土器が出土しており、この中には大洞式期の東北系土器が含まれている。

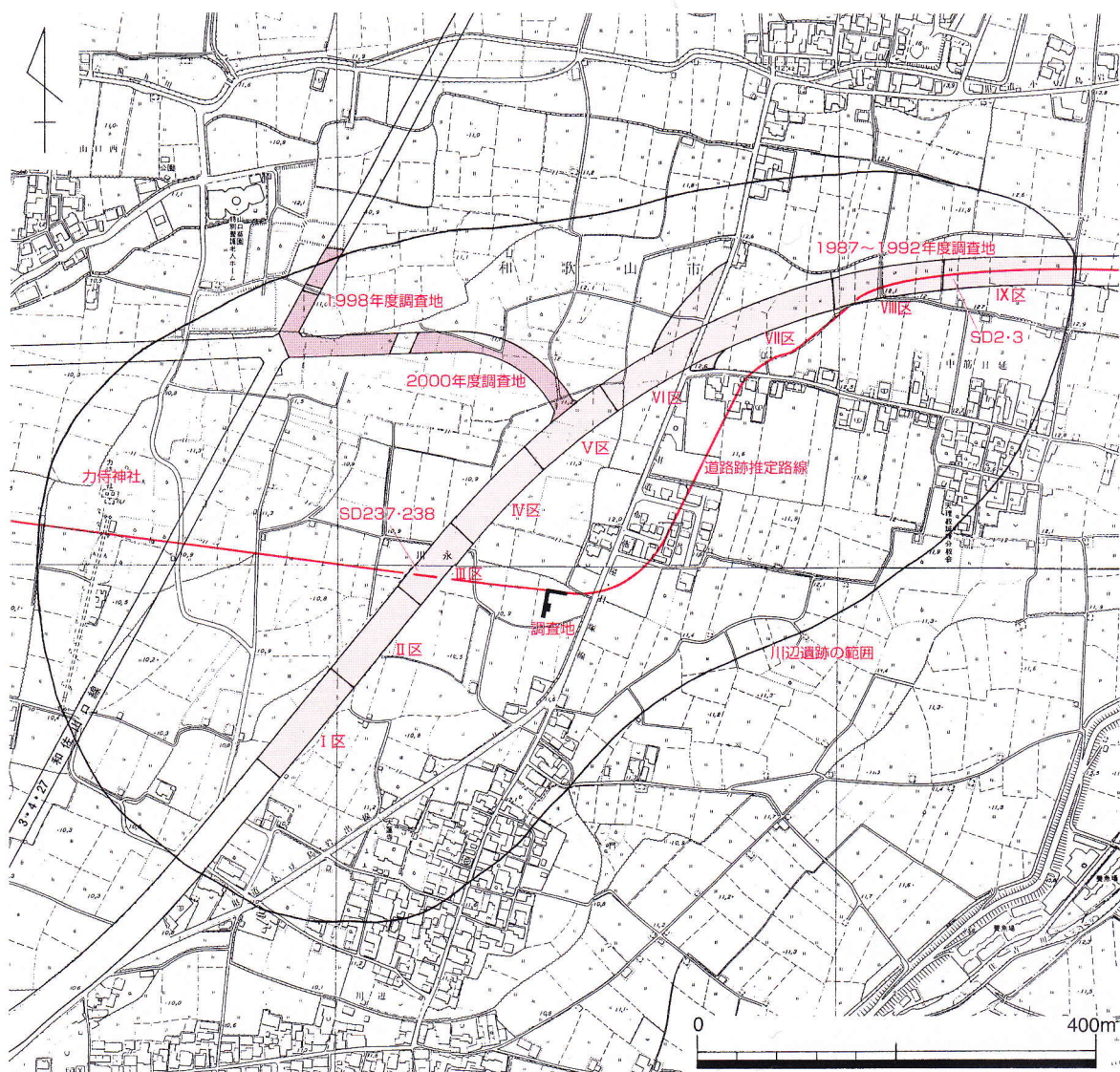
Ⅷ区 上下二面の遺構面が確認された。上面では、深鉢を用いた土器棺墓6基、弥生時代から中世の溝、古墳時代の竪穴住居、道路状遺構の側溝（SD2・3）が検出された。側溝は幅1.2～3.0m、

深さ1.0m、内端距離5.0m、外端距離は9.0mを測り、奈良時代から平安時代にかけての遺物が出土した。下面では、弥生時代の方形周溝墓・溝などが確認されたが、遺構は希薄である。

Ⅸ区 上下二面の遺構面が確認され、上面では弥生時代中期の竪穴住居1棟、Ⅷ区から続く道路状遺構の側溝、掘立柱建物などが検出された。SD3からは、鞍・障泥などの馬具が表現された大型土馬が出土している。下面では不整形な落ち込み状の遺構が検出されたが、遺構は希薄である。

1998年度調査 上下2面の遺構面が確認された。上面は中世の遺構面であり、数条の溝群をはさんだ北・東側の微高地上で、掘立柱建物10棟、土坑墓数基が確認された。土坑墓の内1基からは、土師器の小皿9枚と骨片が出土している。下面は弥生時代後期から古代の遺構面で、調査区の東端から西端にのびる弥生時代後期の溝、方形周溝墓、古墳時代の竪穴住居が1棟検出されている。方形周溝墓の周溝部からは、底部穿孔の土器が出土している。

2000年度調査 調査区南東端において弥生時代後期の溝、全域において古墳時代の竪穴住居14棟以上が検出された。古墳時代の竪穴住居群は、1998年度調査区東端から拡がりをもつもので、当該期の集落域を明確にする資料として重要である。調査区中央部においては、飛鳥時代の掘立柱建



第3図 既往の調査地点及び今回の調査地位置図

物、奈良時代の土坑墓2基が確認されている。飛鳥時代の掘立柱建物は、1987～1992年度調査Ⅰ区において同様の建物群が検出されており、遺跡西部から北部中央へその拡がり及ぶことが明らかになった。その他、中世の掘立柱建物数棟、溝・土坑・土坑墓が確認されている。土坑墓には底面が被熱を受け、炭の堆積が確認されるものがあることから、火葬墓と考えられる。

以上、既往の調査成果を略述した。この中で特に注目される成果は、1987～1992年度調査Ⅲ区及びⅧ・Ⅸ区の2地点において、道路状遺構が検出された点である。この道路状遺構については、その規模から当時の官道である南海道に相当する可能性が指摘されており、調査担当者によりその推定路線も示されている。その推定によると、本調査地の西側Ⅲ区で検出された道路跡は、力侍神社の南側から本調査地を通り、本調査地の東側で北東に向きを変え、Ⅷ・Ⅸ区検出の道路跡に繋がるというものである（第3図赤線部）。この想定案によって、今回の調査では、当初から道路状遺構及び関連遺構の存在が予想された。

【参考文献】

松下 彰『川辺遺跡発掘調査報告書』（財）和歌山県文化財センター 1995年

佐伯和也『川辺・山口遺跡の発掘調査』『（財）和歌山県文化財センター年報』1998 （財）和歌山県文化財センター 1999年

佐伯和也『川辺の第2次発掘調査』『（財）和歌山県文化財センター年報』2000 （財）和歌山県文化財センター 2001年

黒石哲夫『川辺遺跡の古代の道路跡について』『紀北考古学談話会会報』No.25 紀北考古学談話会 1997年

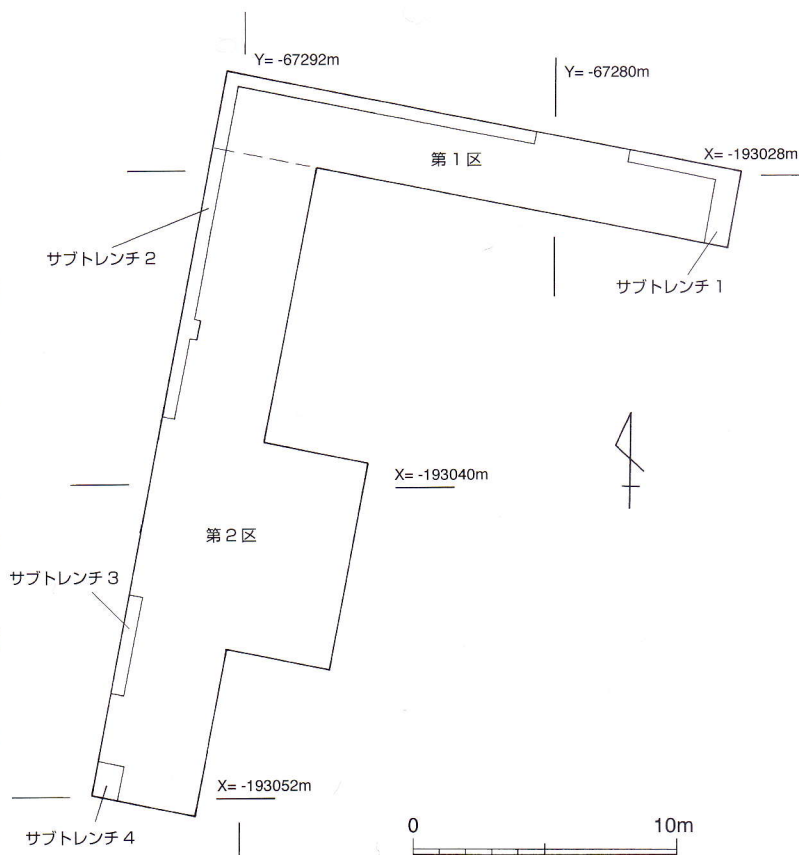
4. 調査の方法と経過

（1）調査の方法

本調査地の現況は水田である（図版15の上）。調査は、調査対象地全域の様相を確認するために、調査区をL字状に設定した。

まず、調査地北側において東西20m、南北3mの調査区を第1区とし、調査区の西側に設定した東西4m、南北25mの調査区を第2区とした。また、第2区中央部において竪穴住居を1棟検出したが、遺構がさらに東側へ続くことが判明したため、その全様相を確認するために、東西4m、南北8mの範囲において東側に調査区の拡張を行った。

以上の合計面積は192㎡である。さらに、下層遺構の有無及び土層



第4図 調査地区割図

堆積状況の確認を目的として、第1区北側及び東側、第2区西側の4箇所それぞれ幅50cm、深さ60cmのサブトレンチ1～4を設定した(第4図)。なお、サブトレンチ1・2においては、縄文土器がまとまって出土したため、遺物の出土範囲を明らかにするために、部分的な拡張を行った。

調査の方法については、まず重機による掘削は、現代の水田耕作土(第1層)と床土(第2層)までとし、第3層以下の遺物包含層と遺構の掘削については、人力掘削によって行った。また、遺物包含層(第3層)における遺物の取り上げについては、国土座標軸を基準に設定した4mメッシュを用いて行った。

図面による記録は、平面図に関しては国土座標軸を基準とした値を使用し、このラインを基準として実測を行った。また、壁面土層断面図や遺構平面図及び土層断面図については、1/20の縮尺を用いた実測を行い、遺物出土状況図は1/10の縮尺を用いた。遺構全体平面図については、縮尺1/40でラジコンヘリによる航空写真測量を実施した。土層の色調及び土質の観察については、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』を用い、遺跡の水準は、国家水準点(T.P.値)を基準とした。

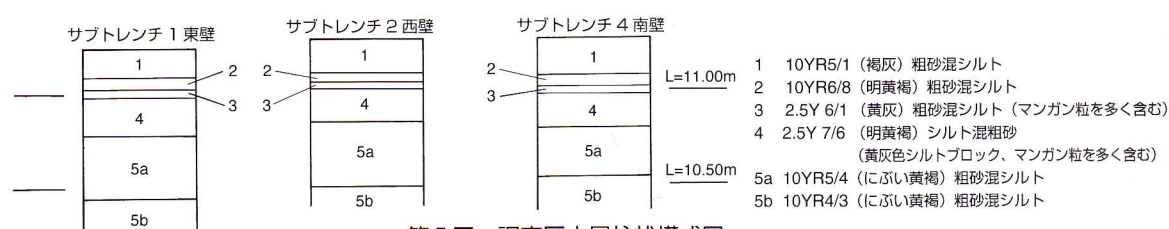
(2) 調査の概要

調査区の基本層序については、第5図に示した通りである(図版27)。

まず表土は現代の水田耕作土(第1層)が約20cmの厚さで堆積しており、この下層には床土(第2層)が約5cmの厚さで水平堆積する。第3層は、マンガン粒を多量に含む黄灰色の粗砂混シルトであり、約4cmの厚さで薄く堆積する。この第3層には縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、黒色土器、輸入陶磁器、備前焼、瀬戸美濃系陶器、肥前系陶磁器などの土器や、サヌカイトの剥片、瓦など縄文時代から近世にわたる遺物が含まれる。第3層は、これら包含する遺物の年代観から、江戸時代後期の遺物包含層と考えられる。

第4層は、明黄褐色のシルト混粗砂で、第3層と同様にマンガン粒を多量に含むものであり、約20cmの厚さで堆積する。第4層からは、縄文土器が極少量出土している。第5層は、にぶい黄褐色の粗砂混シルトであり、上下2単位に分けられる。第5a層は、25～35cmの厚さで、第5b層は20cm以上の厚さでそれぞれ堆積する。遺物は第5a層から縄文土器が少量、第5b層上面において比較的まとまって遺物の出土が確認できた(図版17の下)。第5b層については、調査の範囲では遺物を確認することはできなかったため、無遺物層の可能性はある。

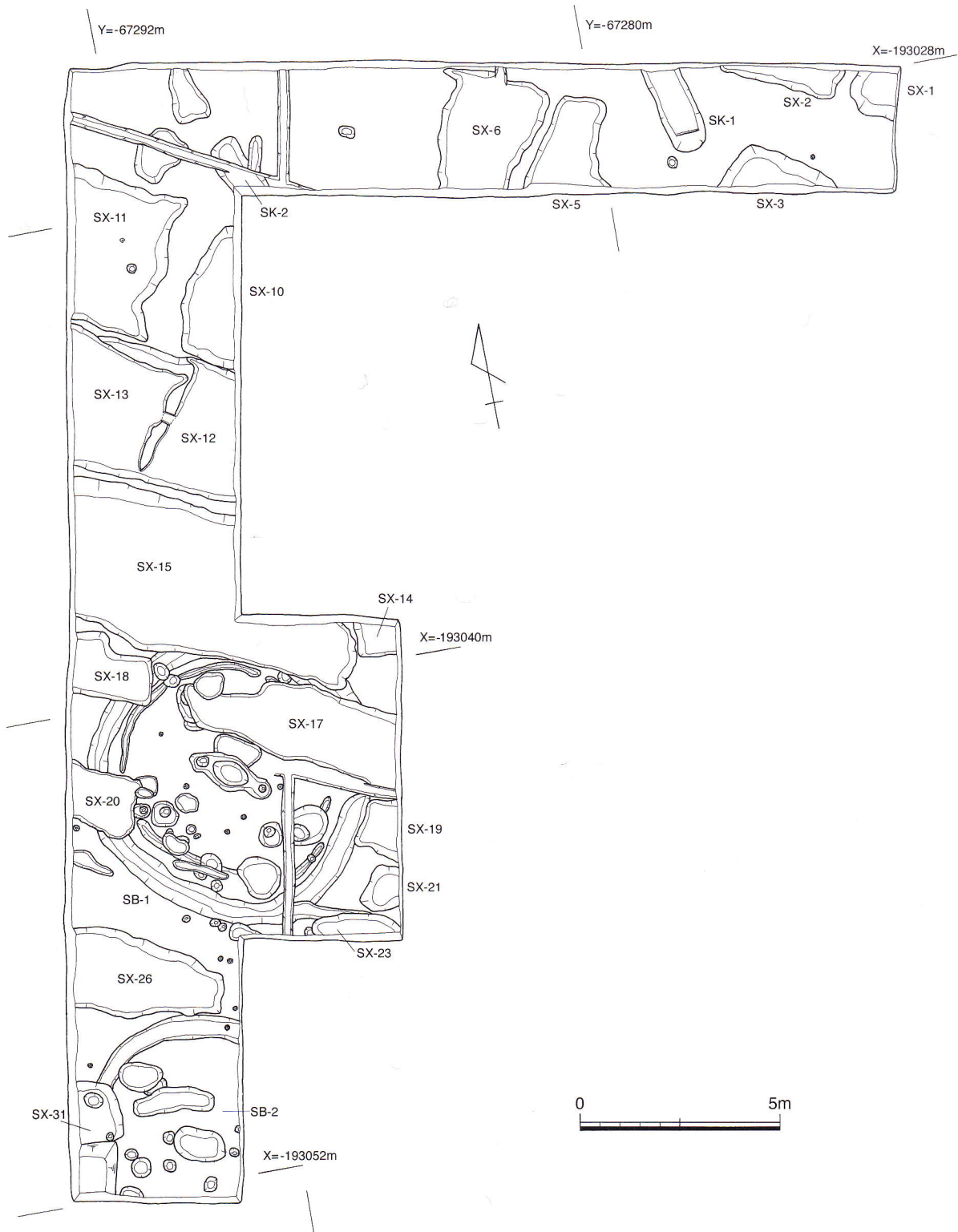
遺構については、第4層上面において遺構面を確認することができた。また、第5b層上面において遺物が一定量出土したため、遺構面の存在する可能性があるが、明確な遺構を確認することはできなかった。



第5図 調査区土層柱状模式図

5. 遺構

遺構は第3層掘削後、第4層上面で検出した。遺構面の標高は、約11.0mを測る。遺構は、調査区全域において確認し、弥生時代と江戸時代の遺構を検出した（第6図、図版15の下～17の上）。



第6図 遺構全体平面図

まず弥生時代の遺構として、第2区中央部から南端部において隣接する竪穴住居を2棟（SB-1・2）検出した。ともに円形の平面形を呈するもので、炉の両側に小規模なピットをもつことを特徴とするものである。時期的には、北側で検出したSB-1が中期中頃、SB-2が中期後半に位置づけられる。なお、SB-1・2検出の炉については、炉自体やその周辺部が被熱しておらず、炉以外の性格を有する可能性もあるが、以下の記述では炉として報告を行う。その他、第1区において土坑2基（SK-1・2）、ピットを検出した。SK-1は、木棺痕跡と考えられる直線的な落ち込みを検出し、炭を多量に含む下層の覆土が上部に立ち上がっていることから、木棺墓の可能性が考えられる。時期的には、いずれの遺構も中期のものである。

次に江戸時代の遺構としては、調査区のほぼ全域において、畦畔の伴う水田区画を19単位以上（SX-1～3、5・6・10～15、17～21、23・26・31）確認した。また、その他として水田遺構と同一の覆土をもつ不整形な土坑やピットを検出した。これら明確な水田遺構として把握できるもの以外については、上部が削平された水田及びその関連遺構の可能性が考えられるが、遺構の遺存状態が悪いため、その性格は明らかではない。水田遺構の年代は、出土した遺物の年代観から、江戸時代初頭頃と考えられるが、SX-11～13においては、盛土畦畔が形成されていることから、遺構の時期は単一の所産ではなく、2時期以上にわたるものと考えられる。

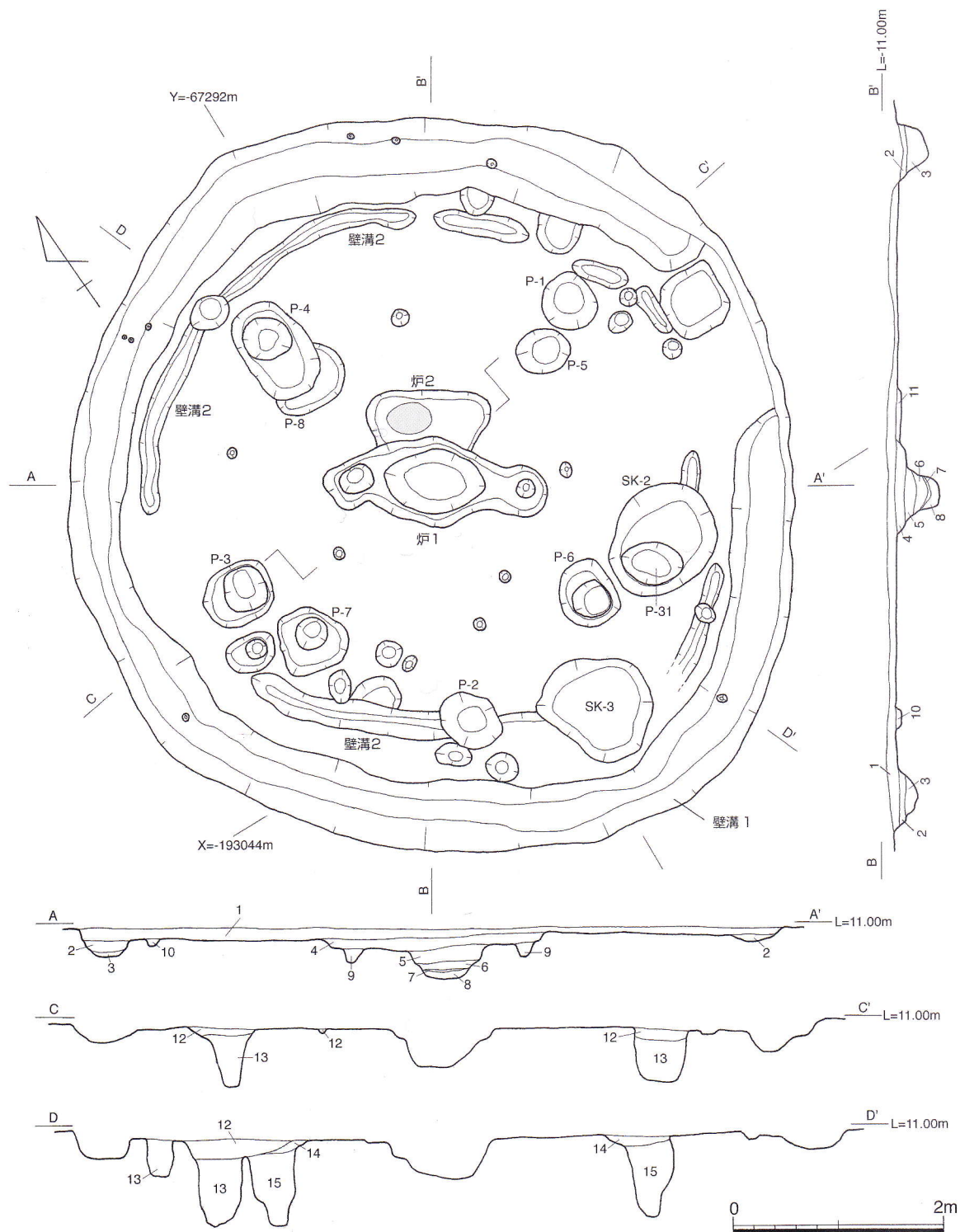
以下、主要な遺構について記述する。

[SB-1]（第7図、図版18～21）

SB-1は第2区の中央部で検出したもので、遺構の平面形はほぼ正円形を呈する。検出面から床面までの深さは5～10cmと比較的浅く、上部は削平されている。掘削の結果、床面上において壁溝を2条検出したことから、拡張による建て替えが行われたことが判明した。

まず古段階は、直径5.5mの規模を有し、幅15～20cm、検出面からの深さ5～10cmを測る壁溝（壁溝2）が巡る。壁溝は、遺構の遺存が不良のため部分的にしか検出できておらず、本来全周していた可能性もあるが、明らかではない。中央やや北寄りには炉（炉2）があり、周囲に4本の支柱穴（P-5～8）をもつ構造である。炉は東西1.2m、南北0.52mを測り、平面形は楕円形を呈する。検出面からの深さは3cmとその多くが削平されているが、底面中央部において強く被熱した20cm四方の焼土塊を検出した（第7図スクリーントーン部、図版20の上）。支柱穴は、いずれも直径40cm前後、検出面からの深さは70cm程度を測るものである。

新段階の規模は直径7.1mを測り、幅40～50cm、検出面からの深さ10～30cmの壁溝（壁溝1）が巡る。壁溝は、東側の一部が途切れており、この部分を出入口として使用した可能性がある。また、東側では深さが10cm程度と浅いのに対し、西側に向かうにつれて深い構造となっている。中央部には炉（炉1）をもち、支柱穴はP-1～4と、SK-2の床面で検出したP-31の5本柱と考えられ、拡張による規模の拡大に伴い、支柱の本数も増加させている。炉は東西2.1m、南北0.9m、検出面からの深さ42cmを測る。平面形は、やや不整形な形状を呈するもので、中央部に東西80cm、南北56cmを測り、楕円形を呈する炉の本体がある。覆土は5層に分層でき、最上層（第7図第4層）を掘削した段階で、炉本体の東西において直径20cm、検出面からの深さ10cmを測るピットを各1基検出した。炉本体の覆土は4層に分層でき（第7図第5～8層）、底面は黒変している。支柱穴は、直径



- | | |
|-------------------------------------|----------------------------------|
| 1 10YR5/3 (にぶい黄褐) 粗砂混シルト (焼土・炭少量含む) | 9 10YR4/3 (にぶい黄褐) 粗砂混シルト |
| 2 10YR6/4 (にぶい黄褐) 粗砂混シルト (炭少量含む) | 10 2.5Y6/2 (灰黄) 粗砂混シルト |
| 3 10YR5/3 (にぶい黄褐) シルト (焼土・炭少量含む) | 11 10YR5/2 (灰黄褐) 粗砂混シルト (炭多量に含む) |
| 4 2.5Y5/3 (黄褐) シルト | 12 2.5Y5/3 (黄褐) 粗砂混シルト |
| 5 10YR4/3 (にぶい黄褐) シルト | 13 10YR4/3 (にぶい黄褐) シルト |
| 6 10YR5/6 (黄褐) シルト | 14 10YR5/3 (にぶい黄褐) 粗砂混シルト |
| 7 10YR3/3 (暗褐) シルト (炭多量に含む) | 15 10YR3/3 (暗褐) シルト |
| 8 10YR3/1 (黒褐) シルト (炭多量に含む) | |

第7図 SB-1遺構平面図及び土層断面図

40cm前後、検出面からの深さは70cm程度を測るものであり、P-4からは弥生時代中期中頃の直口壺の口縁部が遺存状態の良好な形で出土している（図版21）。また、SK-3からは、一定量の炭化種子が出土したことから、貯蔵に関わる遺構の可能性はある。

遺物は、弥生時代中期の壺・甕・高杯・鉢などの土器、石鏃・石錐・太型蛤刃石斧・磨石・台石などの石器の他、サヌカイトの剥片が78点と多量に出土しており、注目できる。

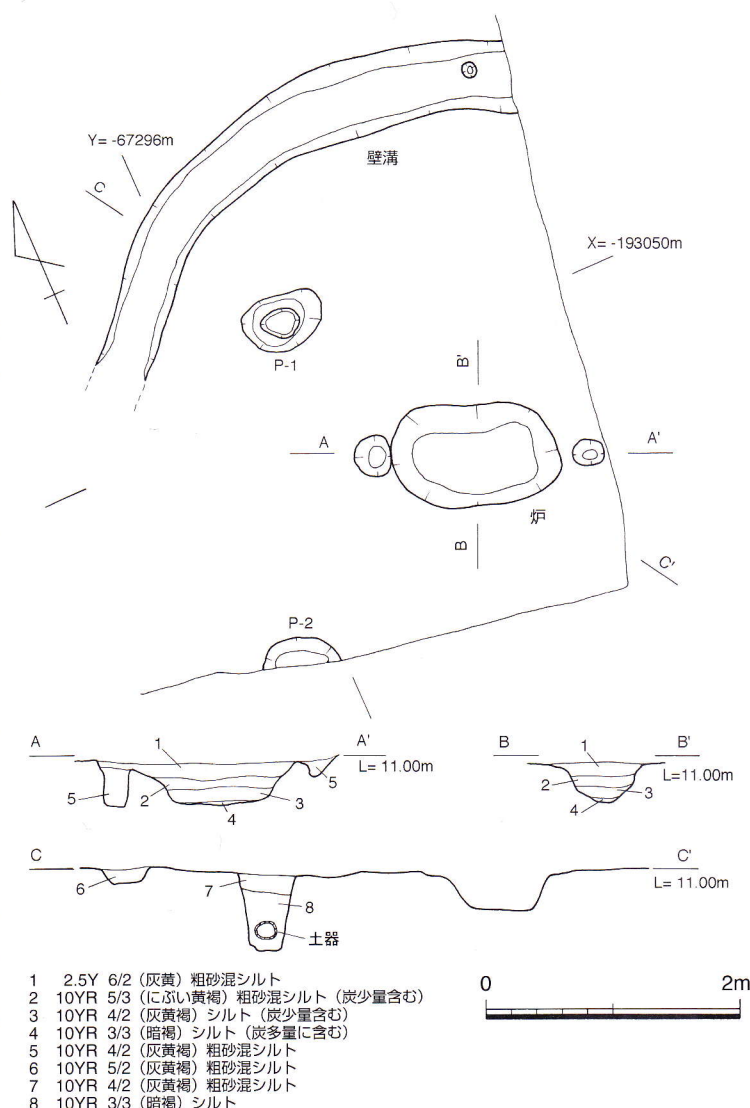
[SB-2]（第8図、図版22・23）

SB-2は第2区南端に位置し、SB-1に隣接して検出したもので、遺構はさらに調査区外へ伸びる。SX-31により、壁溝の一部が残存しておらず、その延長部が検出できていないため、全体の規模は不明であるが、復元される遺構の規模は直径6.2mを測る。床面は削平されており、遺構検出面において炉、支柱穴、壁溝などの施設を確認することができた。炉は東西1.2m、南北0.7m、検出面からの深さ0.3mを測るもので、SB-1と同じく炉の東西に直径20cmを測るピットをもつものである。覆土は4層に分層でき（第8図第1～4層、図版23の上）、第2層以下には炭が含まれ、最下層には約3cmの炭層が確認できる。支柱穴は、P-1・2の2本を確認したが、支柱穴と炉の位置関係から、本来は4本柱をもつ構造と考えられる。P-1は短径40cm、長径63cmを測り、形状は楕円形を呈する。検出面からの深さは60cmを測り、遺構底面より10cm上位において、弥生時代中期後半の直口壺の口縁部がほぼ完形の状態で出土した（図版23の下）。壁溝は、幅36cm、検出面からの深さは15cmを測るものである。

遺物は、壺・甕・高杯などの土器、磨石などの石器が少量出土したが、覆土が失われているにもかかわらず、SB-1と同じく、サヌカイトの剥片が15点と一定量出土した点が注目できる。

[SK-1]（第9図、図版24）

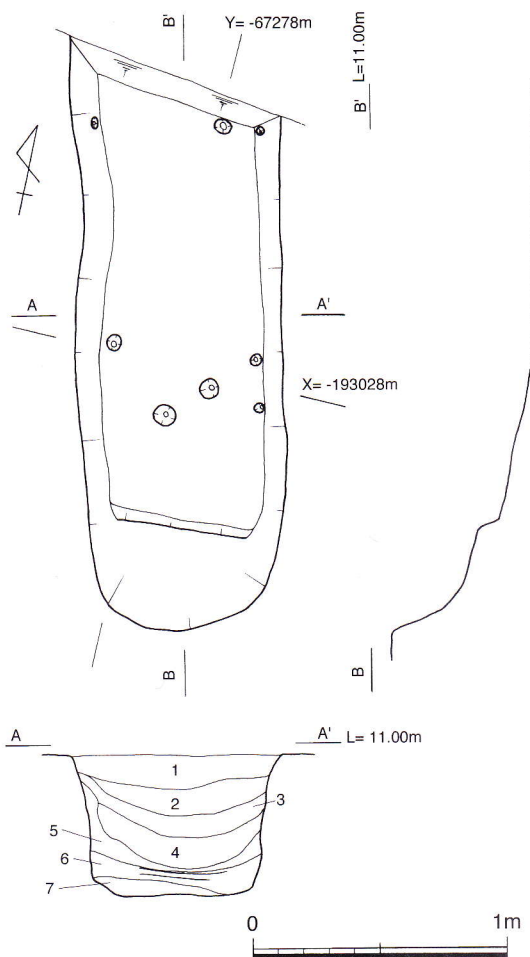
SK-1は、第1区中央部のやや東側で検出したものである。遺構は調査区北壁外へ続くため、全体の規模は不明であるが、東西0.8～0.9m、南北2.2m以上、検出面から



第8図 SB-2遺構平面図及び土層断面図

の深さは0.6mを測る。遺構の南端から40cm北側、底面から10cm上位において、木棺痕跡と考えられる直線的な落ち込みを検出したことから、SK-1は木棺墓である可能性が高い。遺構の南壁はゆるやかに落ち込むのに対し、東西壁はほぼ垂直に掘削されている。また、遺構底面において、直径10cm以下の杭状痕跡を検出したが、規則的な並びは認められず、用途・性格は不明である。覆土は7層に分層できる。最下層（第7層）には明黄褐色の粘土層が堆積するが、これは木棺埋置時の粘土床であった可能性がある。その上層に堆積する第5・6層は、炭を多く含み、さらに第6層の一部には炭が面状に堆積する。また第5層は東西の堆積が上位にそれぞれ立ち上がることから、木棺自体に伴う堆積と考えられ、第1～4層は、棺腐食後の流入土と判断できる。

出土遺物は、覆土内から弥生時代中期の土器片、石庖丁・台石などの石器、サヌカイトの剥片が出土した。



- 1 10YR 5/2 (灰黄褐) 粗砂混シルト
- 2 10YR 4/4 (褐) シルト
- 3 10YR 4/3 (にぶい黄褐) シルト
- 4 10YR 5/4 (にぶい黄褐) シルト
- 5 10YR 4/2 (灰黄褐) シルト (炭少量含む)
- 6 10YR 3/3 (暗褐) シルト (炭多量に含む)
- 7 2.5Y 6/6 (明黄褐) 粘土 (灰色粘土混じり)

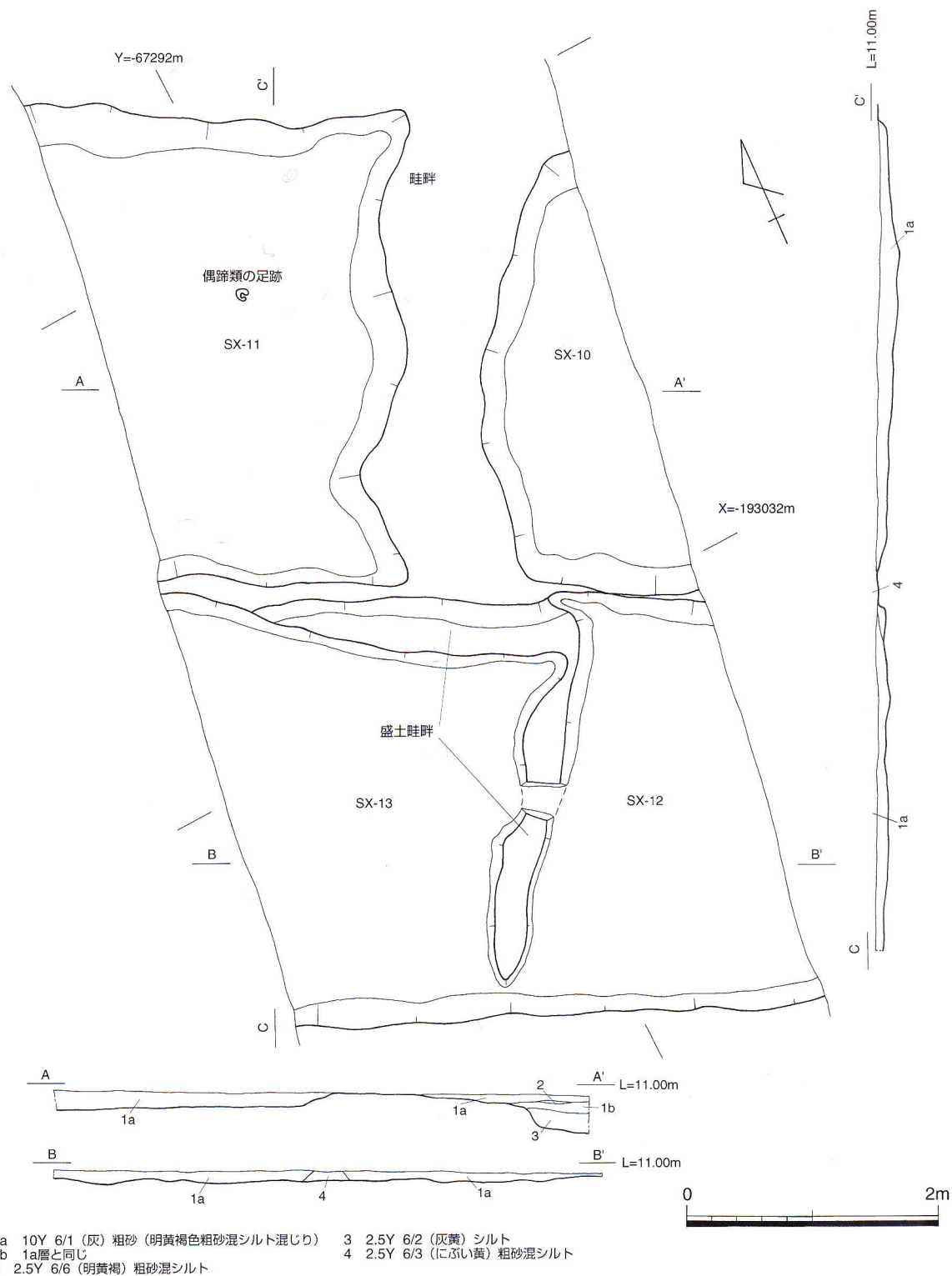
第9図 SK-1遺構平面図及び土層断面図

[SX-1～3、5・6・10～15、17～21、23・26・31] (第6・10図、図版25・26)

水田遺構は、調査区のほぼ全域において、畦畔の伴う水田区画を19単位以上検出した。遺構の主軸は全て同一の方向性をもち、真北に対して $N-25^{\circ}-E$ である。遺構の全体を検出したものがないため、規模・形状は明らかではないが、短辺3.0～3.5mのものと、1.5～2.0mのものに分けられ、長辺はもっとも検出長の長いSX-15から7m以上の規模を測るものと考えられる。遺構の形状は不整な長方形を呈するものと考えられ、遺構の隅部には水口の痕跡とみられる乱れた部分が認められる。水田間には幅10～70cmの小畦畔と第1区東側で確認した幅2mを測る大畦畔がある。また、SX-11と13、12と13の境には幅30cmを測る盛土畦畔（第10図第4層、図版25の下）が形成されている。このことから、SX-12・13は本来同一の遺構であったと判断でき、遺構の時期も単一の所産ではなく、少なくとも2時期以上にわたるものと考えられる。

これら水田遺構には、耕作土として厚さ10～20cmを測る灰色の粗砂層（第10図第1a・1b層）が堆積しており、遺構底面の堆積土である明黄褐色の粗砂混シルト層を多量に含む。SX-10においては第1層下に、灰黄色のシルト層（第10図第3層）の堆積を確認した。これは古段階の水田耕作土である可能性があるが、遺物の出土がなく、明らかではない。また、農耕に関連する痕跡として、SX-11からウシと思われる偶蹄類の足跡を1箇所検出した。

出土遺物は少量であるが、縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、瓦器、輸入陶磁器、備前焼、常滑焼、瀬戸美濃系陶器、肥前系陶器など各時代のものがあり、土器以外のものとしては、瓦や火打石、鉄釘・火打金などの金属製品が出土している。水田遺構の時期は、これら出土遺物の内、胎土目の痕跡をもつ肥前系陶器碗、瀬戸美濃系陶器の灰釉段皿・天目茶碗などの年代観から、近世初頭頃と考えられる。



第10図 SX-10～13遺構平面図及び土層断面図

6. 遺物

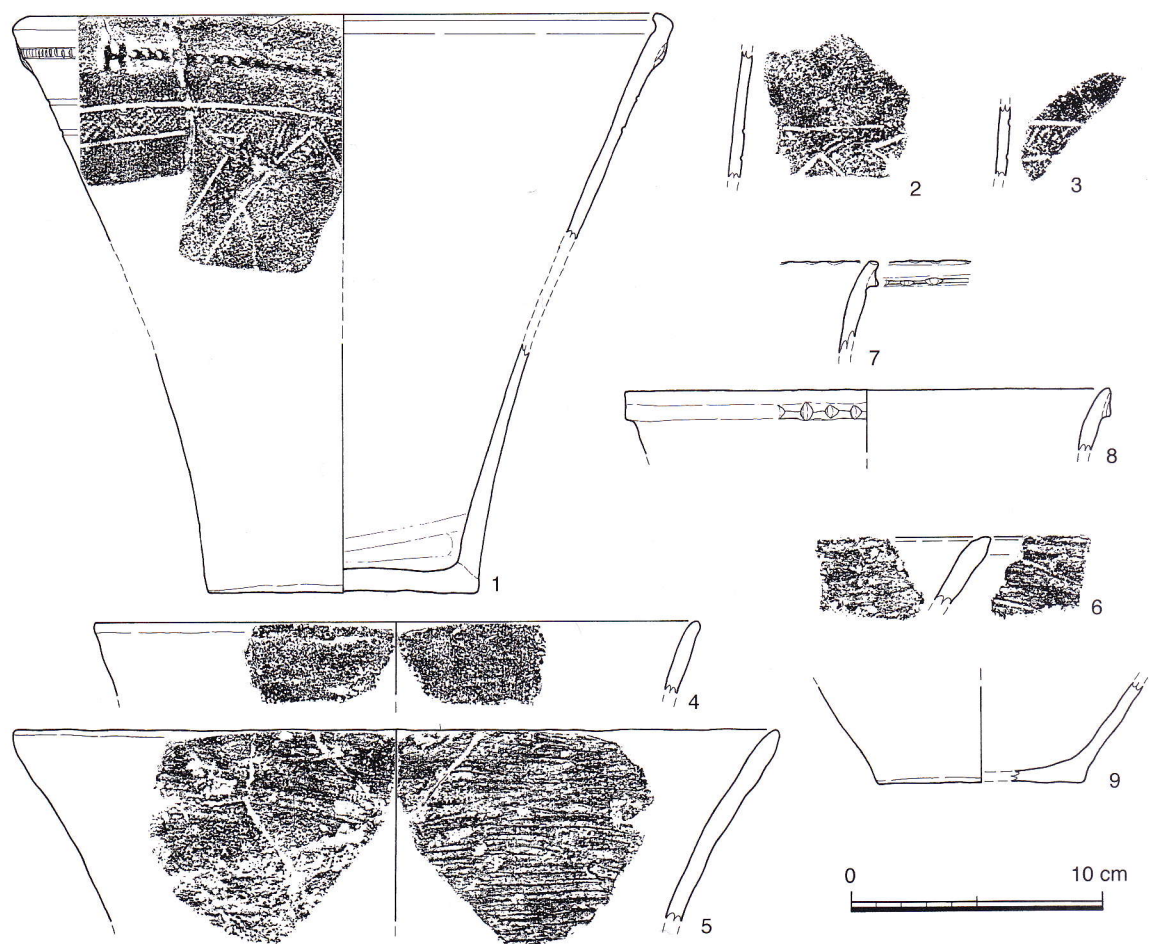
今回の調査で出土した遺物は、遺構の覆土及び第3～5層の遺物包含層から出土したものであり、縄文時代から近世に至る時期の遺物が出土した。出土遺物の量は比較的少量で、小片が多く、また保存状態の良好なものは少ない。

出土遺物には、縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、黒色土器、瓦器、瓦質土器、焼締陶器、輸入陶磁器、肥前系陶磁器・瀬戸美濃系陶器などの国産陶磁器、瓦、土製品、石器、石製品、金属製品、自然遺物が出土した。その中でも遺構を確認した弥生時代と中・近世の遺物が大半を占めており、明らかに古代の遺物と判断できるものは黒色土器の碗が1点出土したのみである。

本報告では、これらの遺物について、土器は大きく各時代に分類して述べ、その後に石器・石製品・金属製品・自然遺物の順で記述した。

(1) 縄文時代の土器 (第11図、図版28)

1～8は、深鉢である。1～3は有文土器で、磨消し縄文と沈線文を施すものである。1は堀之内Ⅱ式併行の関東系土器と考えられるものであり、口径26.4cm、復元高23.3cm、底径11.2cmを測る。円板状を呈する平らな底部に、体部から口縁部にかけて外傾しながら直線的に立ち上がり、口縁端部は内側に肥厚している。口縁部下には紐線紋が1条巡り、頂部には円形の刻み目がつけられてい



第11図 遺物実測図1

るが、一部には突帯に重ねて「8」の字状の浮文が貼付けられている。体部の紋様は、三角形区画紋とみられる。また、外底面には網代の痕跡が認められる。1～3は同一地点で出土していることや、胎土・焼成の特徴が類似することから、同一個体の可能性が高い。

4～6は、無文の深鉢である。4は口径24.2cmを測り、口縁部は直立ぎみに立ち上がる。5・6は口縁部の破片で、同一個体の可能性が考えられるものである。5は口径32.4cmを測り、体部から口縁部にかけて大きく外反しながら立ち上がるもので、内外面には貝殻条痕がみられる。7・8は突帯文土器である。7は口縁部直下に、8は口縁端部にそれぞれ低い突帯が1条貼付けられている。突帯頂部には刻み目がつけられているが、7は口縁端部にも刻み目がみられる。9は鉢の底部である。底径8.2cmを測り、器壁は薄くつくられている。

以上、本調査出土の縄文土器は、その特徴から縄文時代後期前半から晩期のものと考えられ、胎土中には片岩・石英の他、雲母を多量に含んでいる。これらの出土位置は、1～6が第5a層、7が第3層、8がSX-6、9が第4層である。

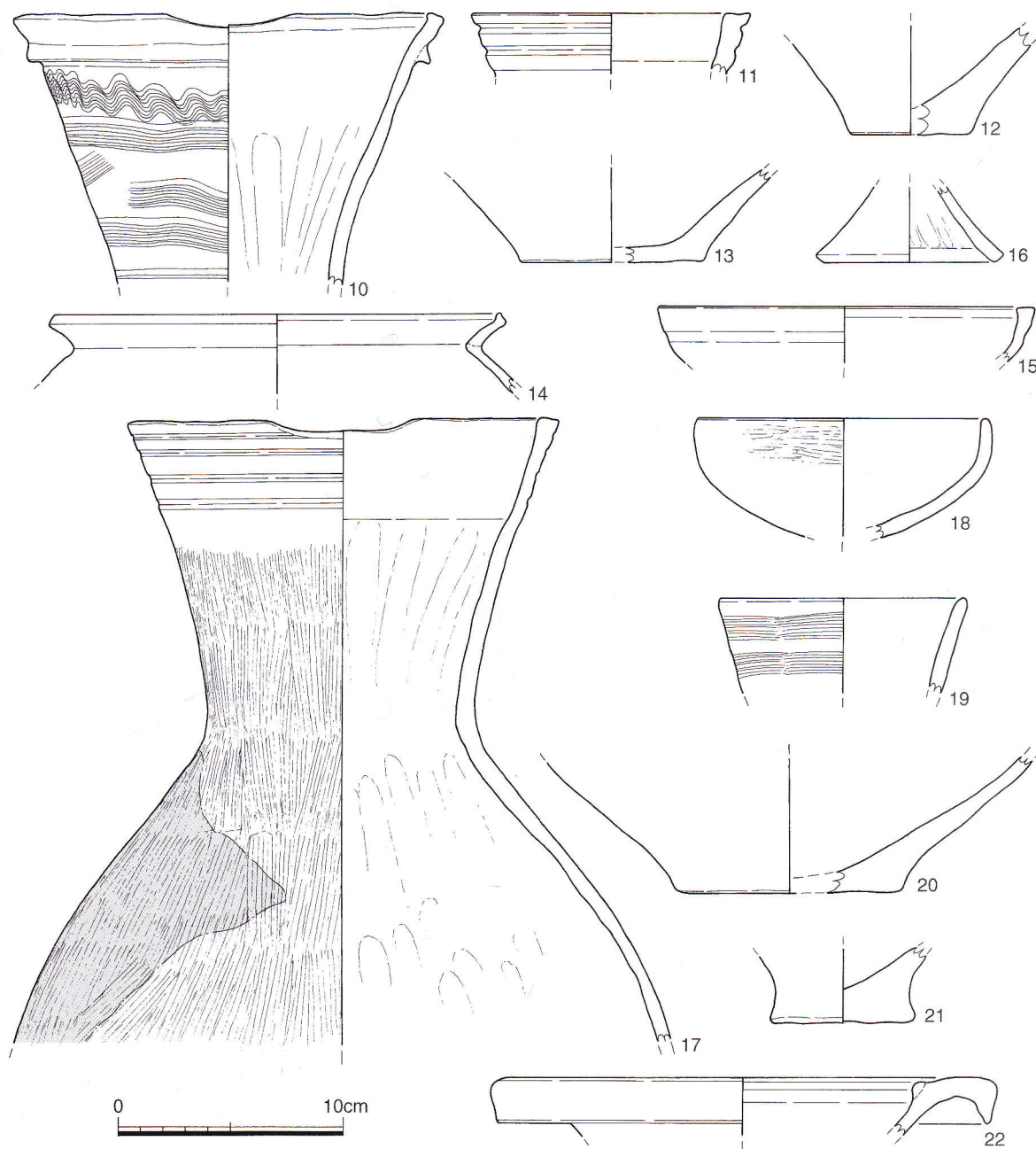
(2) 弥生時代の土器 (第12図、図版28・29)

10～16は、SB-1出土の土器である。10・11は直口壺で、10は注口部をもち、口縁端部を内側に肥厚させ、口縁部上位に1条の貼付け突帯を有するものである。外面はヨコナデによる調整の後、クシ描による波状文を1条、直線文を4条以上施しており、施文の順序は上から下と考えられる。また、内面はタテ方向のナデによる調整が観察できる。11は、口径12.4cmを測るやや厚手の口縁部である。外面は、ヨコナデによる調整の後、凹線文が3条以上施されている。胎土は礫の混和が少なく、他の個体と比較して精緻である。12・13は壺の底部で、12がやや厚手に、13がやや薄手につくられたものである。調整は、磨滅のため不明瞭である。これらの底径は、12が5.6cm、13が8.2cmを測る。14は、「く」の字状に屈曲する甕の口縁部である。口径19.8cmを測り、端部は上方に拡張している。また、屈曲部には粘土紐の接合痕跡が認められる。15は、口径16.8cmを測る高杯の口縁部である。外面はヨコナデによる調整の後、凹線文が1条施される。16は、壺か鉢の脚台部と考えられるものである。底径8.4cmを測り、内面にはタテ方向のナデによる調整がみられる。

17・18は、SB-2出土の土器である。17は口径19.2cmを測る直口壺で、口縁端部には対向する位置に2箇所、浅い注口部をもつ。外面はタテ方向のハケによる調整の後、口縁部には凹線文が4条施される。内面は、成形時の指オサエ及びタテ方向のナデがみられる。また、外面の頸部から体部にかけては暗赤褐色を呈し、赤色顔料が塗布されていた可能性がある。18は、口径13.0cmを測る高杯の口縁部である。杯部は丸みのある椀形をなし、外面は磨滅のため不明瞭であるが、僅かにヨコ方向のミガキ調整が確認できる。

19は、SK-1出土の直口壺である。口径11.0cmを測り、外面はヨコナデによる調整の後、クシ描による直線文が2条以上施され、施文は右回りで行われている。

20～22は第3層出土の土器である。20は底径9.8cmを測る壺の底部であり、器表面の磨滅が著しい。21は底径6.4cmを測る甕の底部である。調整は磨滅のため不明瞭であるが、ナデによる調整が認められる。22は口径22.4cmを測り、水平口縁をもつ高杯の口縁部である。口縁端部は、短く垂下し、内面には杯部と水平口縁の境に、突帯が1条貼付けられる。



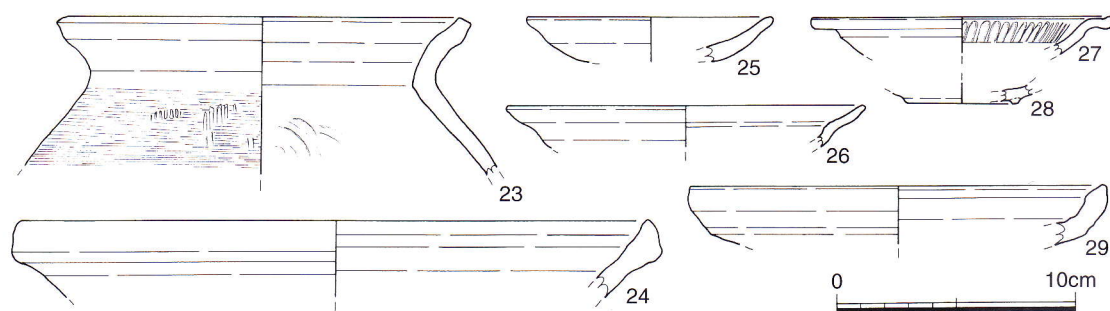
第12図 遺物実測図2

以上、本調査で出土した弥生土器は、いずれも弥生時代中期の範疇であり、その中でもSB-1は紀伊第Ⅲ-3様式、SB-2がやや後出する紀伊第Ⅳ様式のものと考えられる。

(3) 古墳時代以降の土器 (第13図、図版29)

23は須恵器の甕である。口径17.4cmを測り、口縁部は短く外反し、端部はヨコナデ調整によって面をもつものである。外面はタタキによる成形の後、カキメによる調整が施され、内面は成形時の当て具の痕跡をナデ消している。

24は東播系須恵器のこね鉢である。口径26.6cmを測り、口縁部は肥厚し、端部はやや上方に拡張している。また口縁部外面は、重ね焼き時の融着痕が認められ、暗灰色を呈する。



第13図 遺物実測図3

25は土師器の皿である。口径10.4cmを測るもので、全体をナデによって成形し、口縁部をヨコナデによって調整するものである。

26は、口径15.0cmを測る肥前系陶器の端反皿である。薄手なつくりであり、内外面には灰釉が施され、灰緑色に発色する。

27・28は、同一個体の可能性がある瀬戸・美濃系施釉陶器の折縁皿である。27は口径12.6cmを測り、外面体部下半はケズリによって調整され、鋭角をなしている。また内面には丸ノミによる削ぎがみられ、菊花が表現されている。28は底径4.6cmを測る底部の小片であり、低い貼付け高台をもつ。27・28ともに内外面には灰釉が施され、黄灰色に発色する。

29は、備前焼の鉢である。口縁部は直立ぎみに立ち上がり、端部は尖っている。内外面ともに、ロクロ成形による凹凸が著しい。また外面は暗灰色、内面は赤褐色を呈する。

以上の出土位置は、23・26・29が第3層、24・27がSX-15、25がSX-13、28がSX-3である。

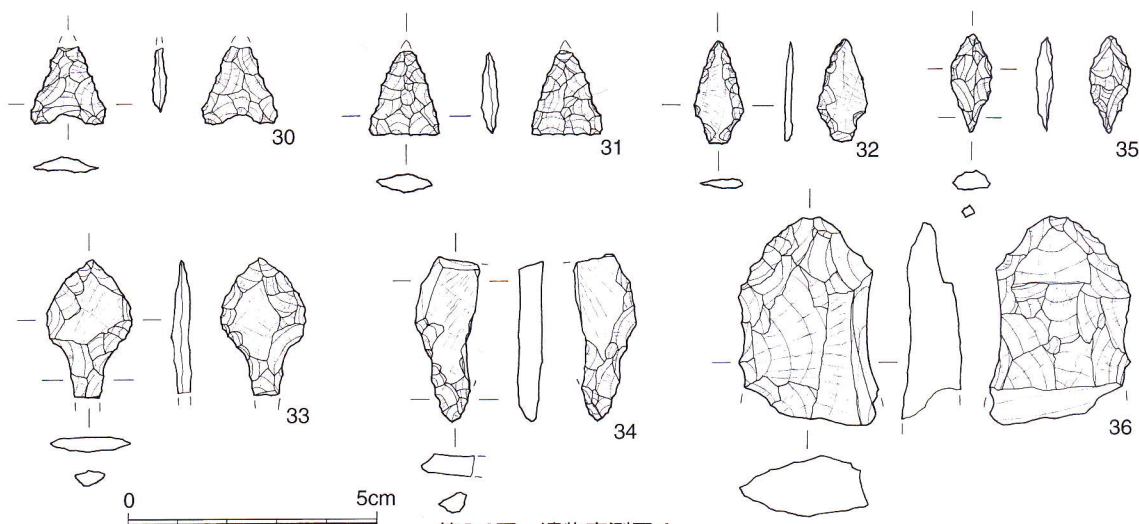
その他、古墳時代以降の土器としては、図示したもの以外に瓦質土器の鉢、常滑焼の甕、中国製の青磁・白磁・染付などの輸入陶磁器、肥前系磁器染付碗や白磁紅皿などが出土している。

(4) 石器 (第14・15図、図版30)

石器には、石鏃、石錐、石槍、石斧、叩石、磨石、台石、石皿などが出土した。

30～36は、サヌカイト製の打製石器である。

30～32は石鏃である。30は凹基式の石鏃で、残存長1.5cm、幅1.6cm、厚さ0.3cmを測り、重量は0.15gである。両面ともに右回りの細部調整が施されているが、全体的に風化が著しく、色調は灰



第14図 遺物実測図4

色を呈する。31は平基式の石鏃で、残存長1.7cm、幅1.5cm、厚さ0.4cmを測り、重量は0.2gである。全体に丁寧な細部調整が施され、調整順序は両面ともに右回りである。32は有茎式の石鏃で、全長2.1cm、幅1.0cm、厚さ0.2cmを測り、重量は0.1gである。両面に大剥離面を残した板状の素材に、周縁部のみ調整を加えており、右面の右側辺から先端部にかけては施されていない。

33～35は、石錐である。33は頭部と錐部の境が明瞭な形態のものであるが、錐部は欠損している。残存長2.8cm、頭部幅1.7cm、錐部幅0.5cm、厚さ0.3cmを測り、重量は0.6gである。頭部は、両面に大剥離面を残す素材剥片にやや粗雑な調整を施している。34は頭部と錐部の境が不明瞭な形態を呈するもので、片側の側辺部を欠損している。全長2.3cm、頭部残存幅1.2cm、錐部幅0.5cm、厚さ0.4cm、重量1.4gを測り、やや厚みのある板状の剥片素材からつくられている。細部調整は、錐部を中心に行われており、頭部にはほとんど施されていない。35は下端が鋭く尖ることから錐と考えられるもので、全長2.0cm、幅0.8cm、厚さ0.3cmを測り、重量は0.15gである。右回りの丁寧な細部調整がみられるが、全体的に風化が著しく、色調は灰色を呈する。

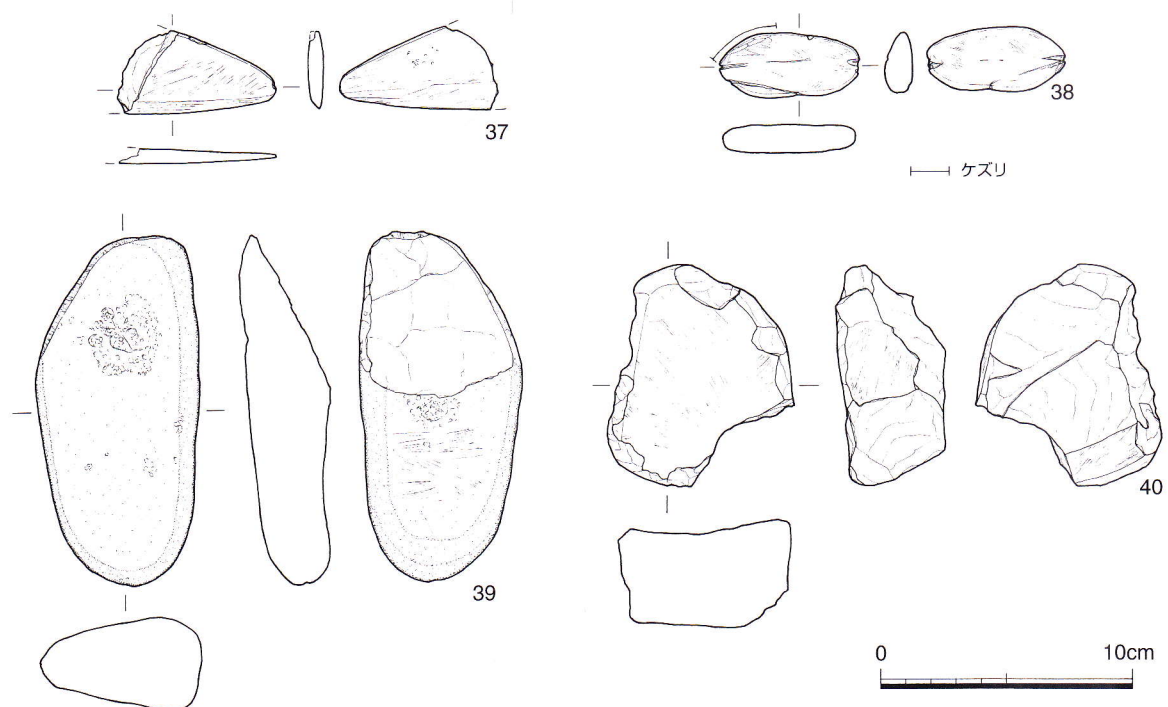
36は石槍の先頭部と考えられるもので、残存長4.3cm、幅3.0cm、厚さ1.2cmを測り、重量は22.4gである。ほぼ全体に細部調整が行われるが、左面は頭部から基部にむかって、右面は基部から頭部にむかって調整が施されている。

以上の出土位置は、30がSB-2、31～33・35がSB-1、34が第2層、36がSX-17である。

37・38は磨製石器である。

37は、結晶片岩製の石庖丁である。残存長6.3cm、残存幅3.3cm、厚さ0.6cm、重量14.6gを測り、形態は直線刃で半月形を呈するものと考えられる。刃は片刃で、片側から研磨が施され、明瞭な稜が認められる。SK-1から出土した。

38は、結晶片岩製の有溝石錘である。全長5.5cm、幅2.6cm、厚さ1.1cm、重量は22.6gを測り、扁平な楕円形を呈する石材の両端部に浅い切り込みがみられるが、溝幅は細い。研磨によって全体を



第15図 遺物実測図 5

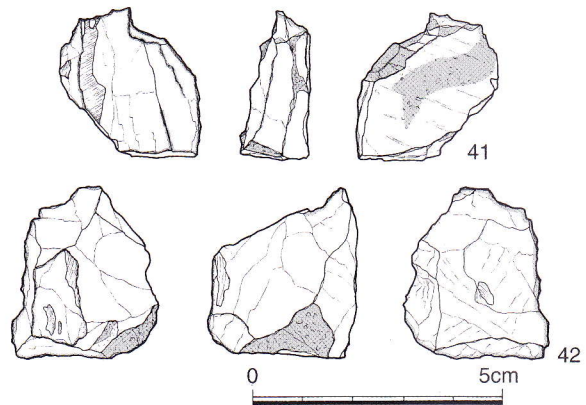
平滑に仕上げるが、一部に面取り状のケズリ痕が認められることから、本来はケズリによって整形し、その後研磨により仕上げられたものと考えられる。SB-1から出土した。

39・40は礫石器である。

39は、砂岩の河原石を用いた叩石である。全長14.0cm、幅6.6cm、厚さ3.7cm、重量420gを測り、上下面のほぼ中央部及び側縁の一部に敲打痕が、裏面に不定方向の擦痕がみられる。SB-1から出土した。40は、上面が凹形にくぼむことから石皿と考えられ、石材は砂岩の河原石を用いている。上面及び側面2箇所にも磨痕がみられるが、上面の磨痕は不定方向であるのに対し、側面は一定方向であることから、側面は砥石として使用された可能性がある。また二次焼成を受けたため、色調は赤褐色に変色し、部分的に黒変している。SB-1から出土した。

(5) 石製品 (第16図、図版30)

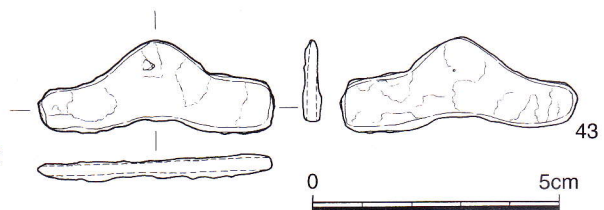
石製品としては、火打石がある。41・42は石英製の火打石で、一部には結晶片岩との剥離面がみられる。法量は41が長さ3.0cm、幅2.8cm、厚さ1.4cm、重量15.4g、42が長さ3.4cm、幅3.0cm、厚さ3.0cm、重量37.5gを測る。ともに石材の稜線は、火打金の打撃により細かく潰れているが、42は未使用の部分が多く認められ、一面に自然面を残すことから、石英の河原石を素材として打ち欠き、制作したものと考えられる。41が第3層、42がSX-15から出土した。



第16図 遺物実測図 6

(6) 金属製品 (第17図、図版30)

金属製品としては、鉄釘や火打金その他、鉄滓が少量出土している。43は火打金である。全長4.8cm、幅1.9cm、厚さ0.2～0.3cmを測り、重量は7.0gである。中央部には、0.5mm大の紐通し孔が認められるが、錆の腐食により不明瞭になっており、本来は3mm大の円孔と考えられる。SX-15から出土した。



第17図 遺物実測図 7

(7) 自然遺物 (写真1)

自然遺物としては、炭化種子がある。炭化種子はいずれも同種のものであり、0.9～1.3cmを測るものであり、SB-1P-6から約6点、SB-1SK-3から約20点が出土している。



写真1 自然遺物 (炭化種子)

7. まとめ

今回の調査地点は、一般国道24号和歌山バイパス工事に伴う1987～1992年度調査区の南東約120mに位置し、その調査成果と合わせ、遺跡中央部の様相をさらに明確化する資料が得られた。

まず、本調査地の北側で行われた1987～1992年度調査区西側の成果と比較した場合、その多くが上下2面の遺構面が存在するのに対し、本調査では弥生時代中期から近世にかけての遺構を同一遺構面で確認した。また、その検出面も本調査地の方が50～80cm程度高く、本調査地周辺が周囲に比べ、より安定した微高地に位置している状況を指摘することができる。

検出した遺構・遺物では、弥生時代中期の竪穴住居2棟、木棺墓と考えられる土坑1基、近世初頭の畦畦を伴う水田区画19単位以上を検出した。また、遺構は未確認ながら、縄文時代後期から晩期の遺物包含層を確認したことから、下面に縄文時代の単一遺構面が存在する可能性がある。

調査区全域で確認した水田区画については、既往の調査において水田関連の小溝群が確認されているが、本例のような区画水田は未検出のものである。また、その方向性は条里地割との関連が問題となるが、川辺遺跡周辺の地割の方向はN-7°-Eに復元されており、水田区画の主軸はN-25°-Eであることから、その方向性は大きく異なる。むしろ、現行の土地区画に近い方向性を持ち、復元されている条里地割との関連性は認めがたい。川辺遺跡では中世前期までは掘立柱建物・井戸・土葬墓などの生活遺構が確認されているが、それ以降は明確ではなく、本調査地周辺は中世後期以降に耕地化していくものと考えられる。

また、既往の調査の項において記述したように、1987～1992年度調査において、南海道と推定される道路遺構の側溝が2地点において確認され、その内の一つは本調査地西側のⅢ区で検出されていることから、今回の調査地点においてもその存在が予想された（第3図）。しかし、本調査ではそれに関連する遺構は確認できず、包含層出土の遺物においても、当該期の明らかな遺物は黒色土器が1点のみであった。道路状遺構の側溝SD237・238は、幅1.5～2.4m、深さ0.6～0.8mを測る大規模な遺構であり、上部の削平により失われたとも考えがたいことから、道路状遺構は別の地点に求めなければならない、南海道の推定路線も再考していく必要があると考えられる。

弥生時代では、中期の竪穴住居2棟を検出したが、それは炉とみられる中央土坑の形状が楕円形を呈し、長軸方向の端部に柱穴をもつもので、いわゆる松菊里型住居と呼称されるものである。松菊里型住居については検出例が少なく、重要な資料と考えられるので、以下に若干の検討を行う。

和歌山県内における松菊里型住居及びその系譜を引く竪穴住居の検出例は、今回の事例を含め8遺跡14例を数える（第1表）。その分布は、紀北地域の紀ノ川流域から紀中地域の日高川流域において点在しており、海南市域においてやや集中した分布が確認できる。時期的には前期から後期前半まで継続してみられ、その中でも中期中頃から後半の事例が最も多い。

次に構造面では、中央土坑や炉の形状が楕円形を呈する点が大きな特徴であり、船岡山遺跡のみが円形を呈する。堅田遺跡では、中央土坑両端の柱穴以外に主柱穴や壁溝などの施設をもたないものが2棟検出されているが、大半の事例は壁溝や主柱穴を有し、中央部の構造以外は通例の住居跡と大きな構造差がないもので、仲間研志氏の指摘する発展松菊里型住居と呼ばれるものに該当する。

松菊里型住居の多くは、集落内で通例の竪穴住居と共存し、弥生時代を通して存在することから、

通例の住居との構造差が何に起因するかが大きな問題となる。ここで注意される点は、亀川遺跡第5次調査SB-54や小松原Ⅱ遺跡において、炉周辺から多量のサヌカイト剥片が出土し、特に小松原Ⅱ遺跡では、炉堤に沿ってサヌカイト群がブロック状に検出されていることや、溝ノ口遺跡第6次調査検出例でも、炉内から石庖丁未製品が出土し、床面上より石器素材と考えられる片岩母岩の他、台石・叩石が出土しているなど、石器製作の痕跡が確認されている点である。堅田遺跡においても、4棟の内1棟からは多量のチャートの石屑に伴って石錐が出土し、石器工房であることが明らかとなっており、県内の松菊里型住居は、石器製作の場としての性格を有する可能性が指摘できる。その他、溝ノ口遺跡1994年度竪穴住居149では、炉内から鋳型の中子や砂岩の砥石が、亀川遺跡第9次調査SB-91からは13個の紡錘車が出土しているなど、特殊な遺物の出土も注目できる。

以上、県内の松菊里型住居は、出土遺物の様相から、石器製作や他の工房的な性格を有している可能性が考えられ、本調査SB-1からもサヌカイトの剥片が多量に出土した点は、それを追認する資料であると言える。しかし、亀川遺跡第5次調査SB-54の近隣に位置し、年代的にもほぼ併行するSB-52は、通例の住居跡であるが、炉周辺からは多量のサヌカイトの剥片が出土しており、石器製作は必ずしも松菊里型住居に限って行われたとは言えない。中央土坑についても、本調査事例のように被熱の痕跡が少ないことから、石器製作など炉以外の用途に用いられた可能性が指摘できる一方で、県内の他の事例では炉堤を有するものも比較的多く、炉として機能していた蓋然性も高いと考えられるなど、一定した性格を想定できない。このことから、松菊里型住居と通例の住居の構造差が工房的な性格を有するという点のみに起因するとは言えず、あくまで要因の一つに過ぎないと考えられる。この点については、分布が極めて点的であり、事例が少数であることから、断定的なことは言及できないのが現状であり、今後、検討していく課題が多く残されている。その上でも、今回の調査で確認した2棟の松菊里型住居は、重要な調査事例と言えよう。

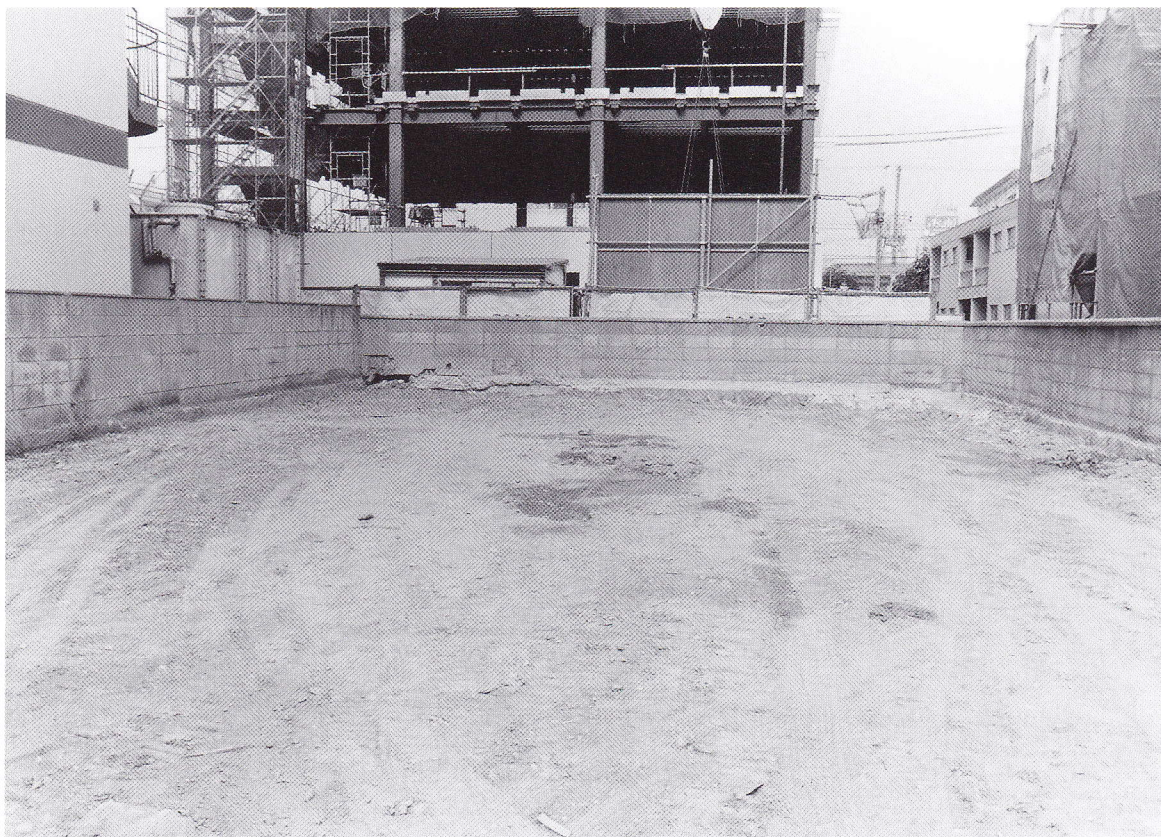
【参考文献】

- 仲間研志「松菊里型住居—我国稲作農耕受容期における竪穴住居の研究—」『東アジアの考古と歴史（中）』 同朋舎出版 1987年
 『船岡山遺跡発掘調査報告書』 和歌山県教育委員会 1986年
 『亀川遺跡』Ⅴ 海南市教育委員会 1985年
 『海南市内遺跡発掘調査概報—平成4年度—』 海南市教育委員会 1993年
 『近畿自動車道和歌山線埋蔵文化財発掘調査報告』 和歌山県教育委員会 1972年
 『溝ノ口遺跡』Ⅱ 海南市教育委員会 1987年
 『溝ノ口遺跡発掘調査報告書』 (財)和歌山県文化財センター 1997年
 『御坊駅前広場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概報』Ⅱ 御坊市遺跡調査会 1990年
 『堅田遺跡 前期弥生環濠集落』 御坊市 2000年
 植田法彦『海南市文化財ニュース』第12号 海南市文化財調査研究会 1998年

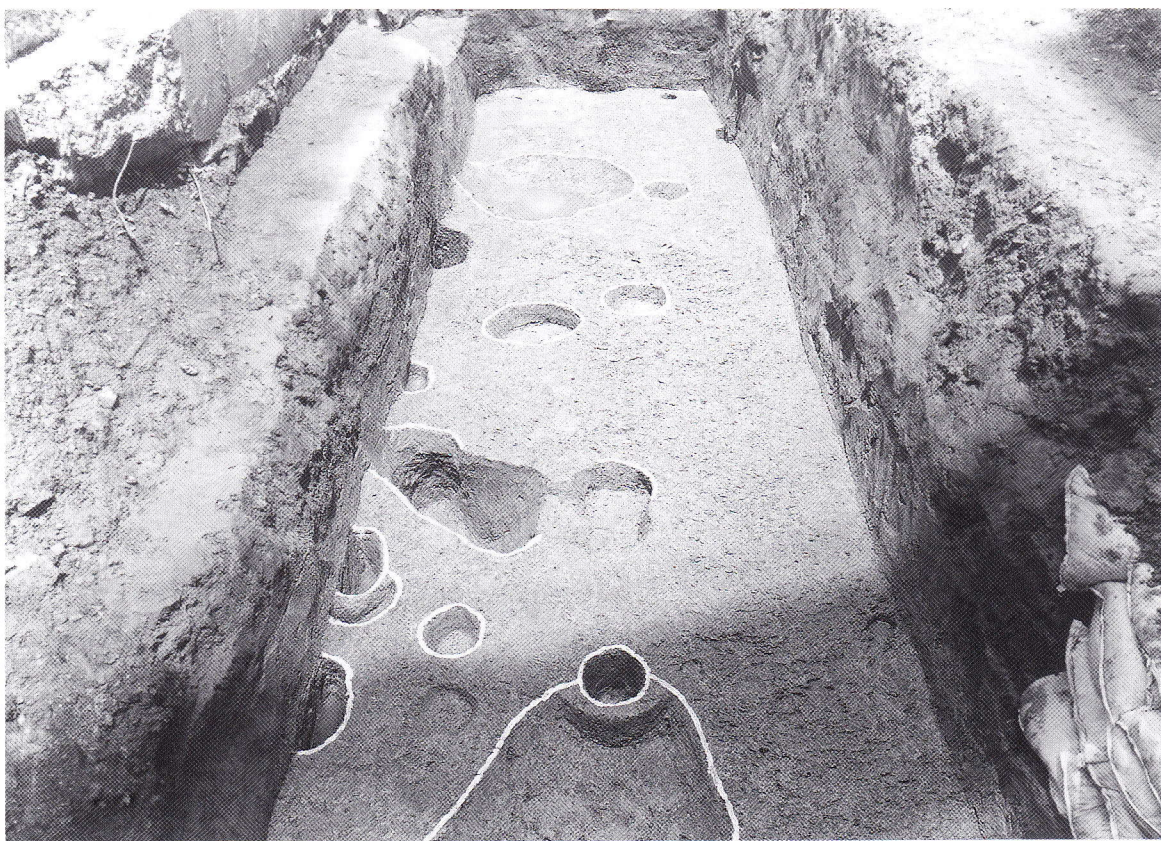
No	遺跡名・遺構名	所在地	中央土坑・炉の形状	年代	備考
1	船岡山遺跡SB01	かつらぎ町島	円形	後期前半	2度の建て替え
2	川辺遺跡SB-1	和歌山市川辺	楕円形	中期中頃	サヌカイトの剥片が多量に出土、本書にて報告
	川辺遺跡SB-2		楕円形	中期後半	本書にて報告
3	亀川遺跡第5次調査SB-54	海南市且来	楕円形	中期後半	炉堤周辺からサヌカイト剥片が多量に出土
	亀川遺跡第9次調査SB-91		楕円形	中期	壁溝・貯蔵穴なし、13個の紡錘車
4	大野中遺跡	海南市大野中	楕円形	中期後半	石庖丁未製品
5	溝ノ口遺跡第6次調査YSB-01	海南市溝ノ口・椋の木	楕円形	前期後半	炉内から石庖丁未製品、床面上から石材母岩が出土
	溝ノ口遺跡1994年度竪穴住居跡149		楕円形か	中期前半	炉内から鋳型中子が出土
6	野上中遺跡	海南市野上中			
7	堅田遺跡	御坊市湯川町財部	楕円形	前期	4棟確認、内1棟からチャートの石屑が多量に出土
8	小松原Ⅱ遺跡	御坊市湯川町小松原	楕円形	中期	炉堤に沿ってサヌカイト大小2箇所の剥片群

第1表 和歌山県内検出の松菊里型住居一覧表

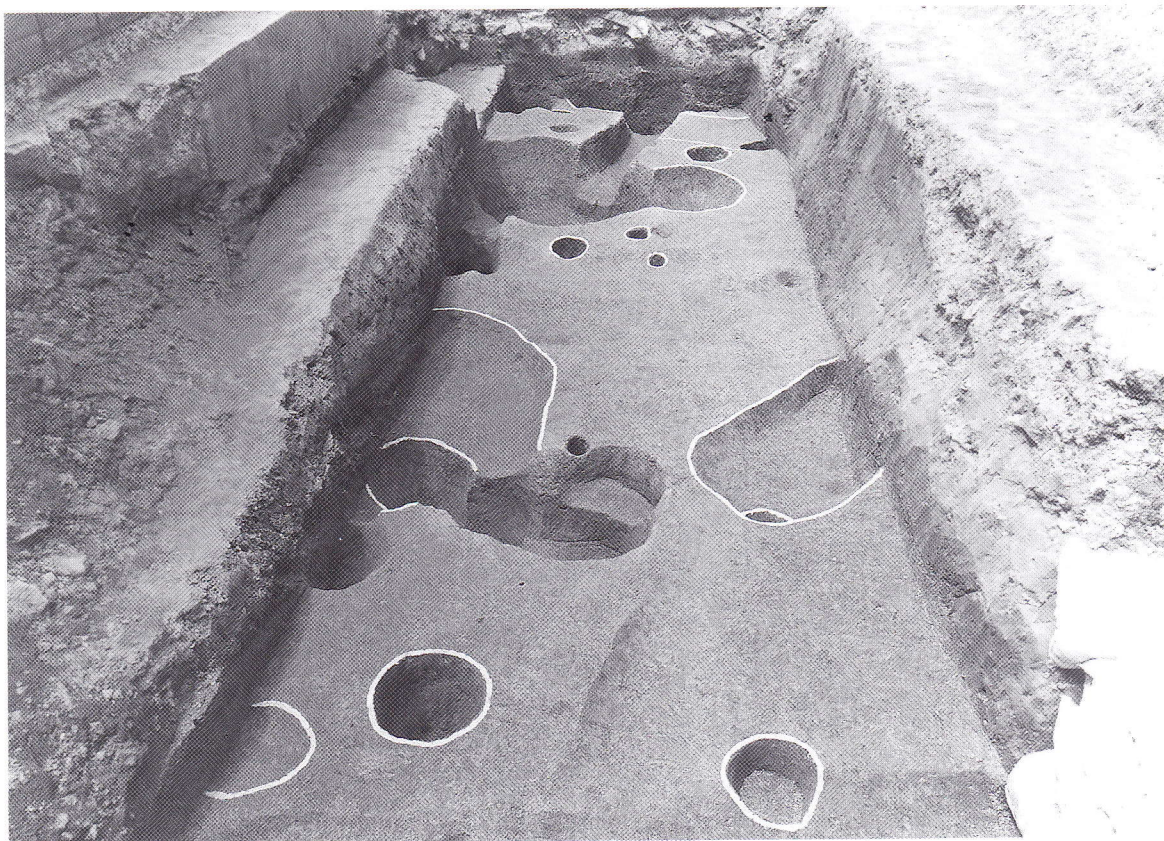
版 圖



調査前の状況（東から）



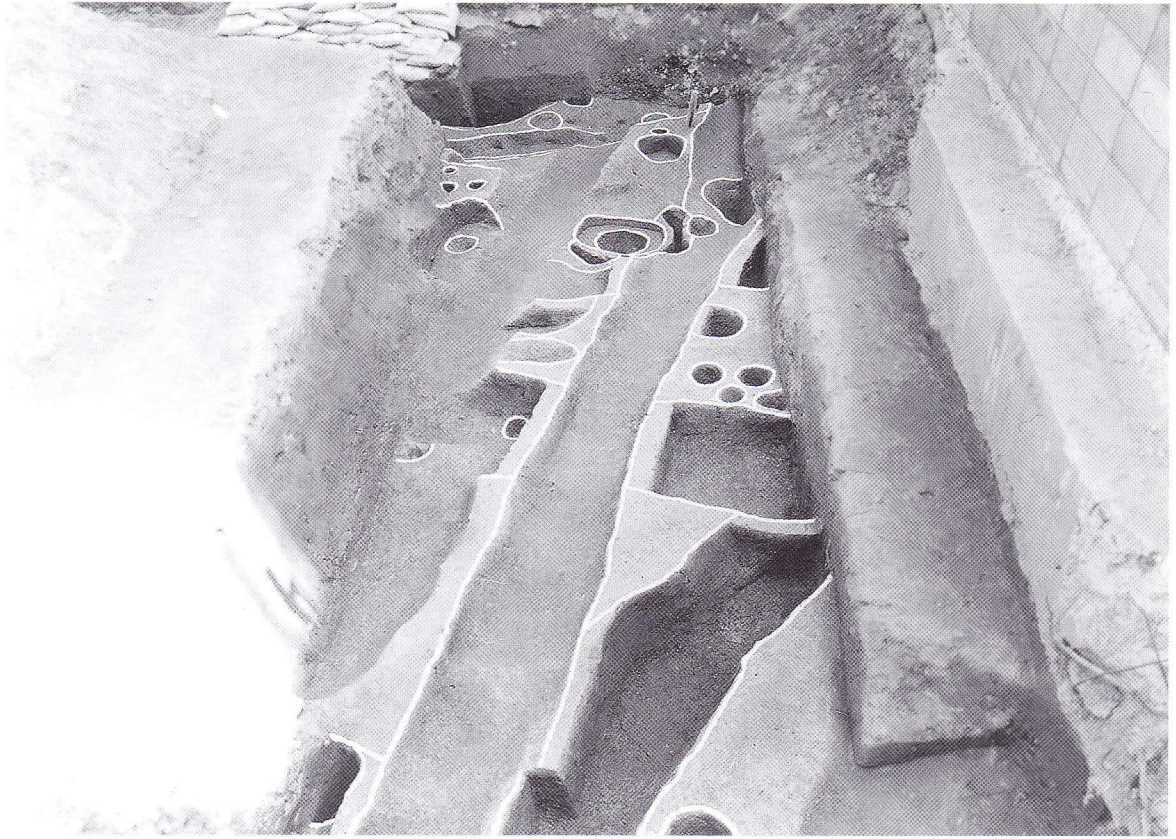
第1区 第5遺構面全景（南から）



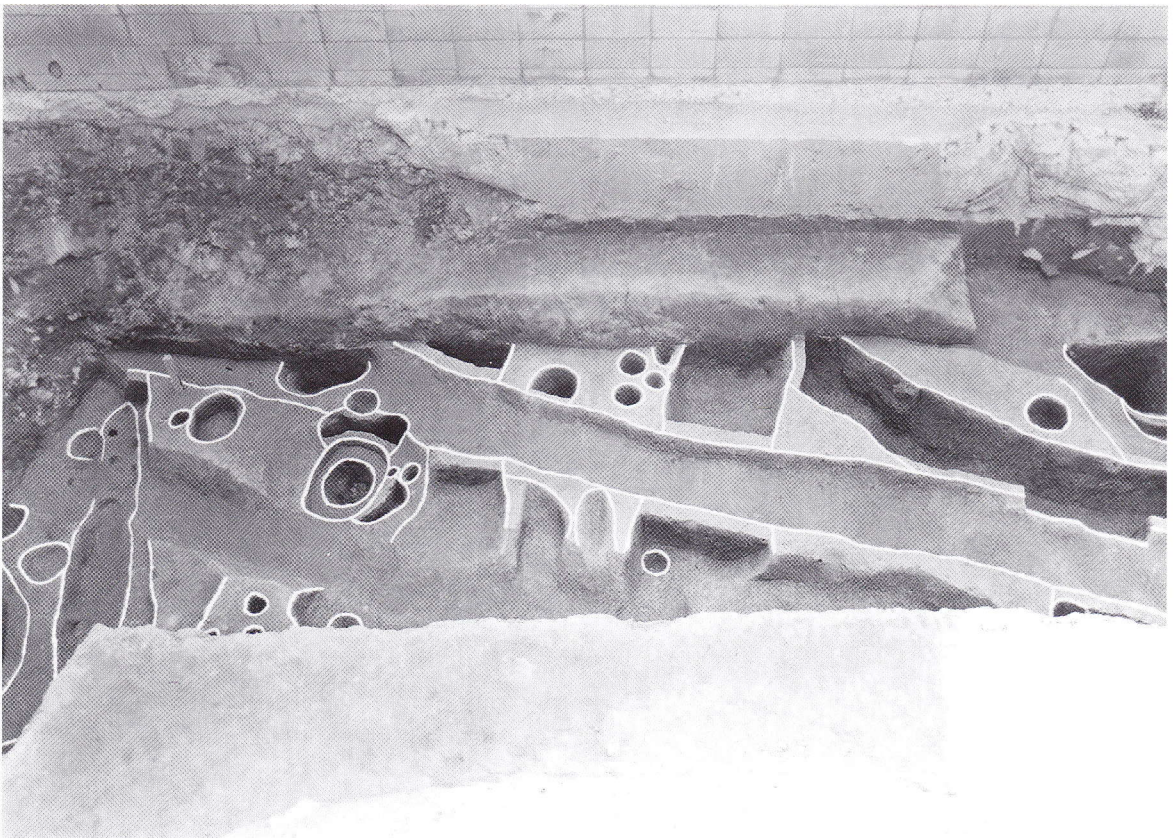
第1区 第3遺構面全景（南から）



第2区 第3遺構面全景（西から）



第1区 第2遺構面全景（北から）



第1区 第2遺構面全景（東から）



第2区 第2遺構面全景（東から）



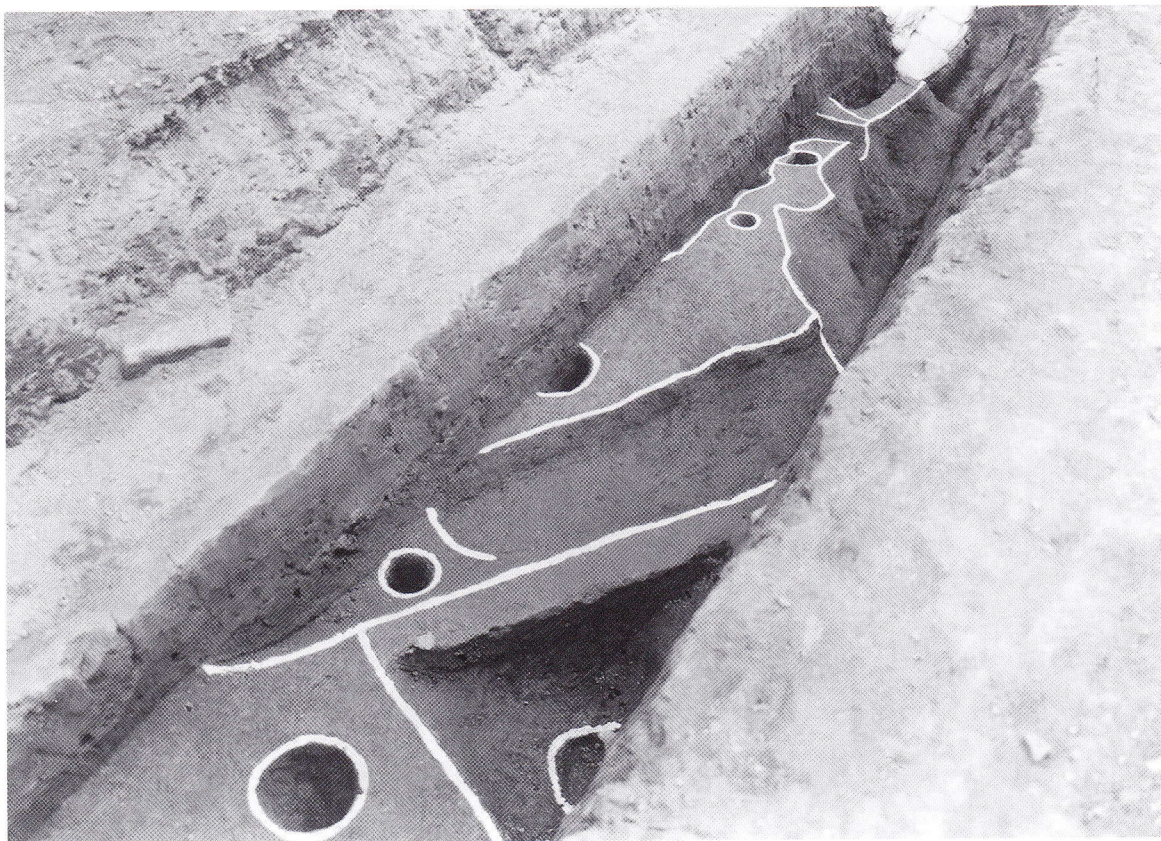
第1区 第1遺構面全景（北から）



SK-13 (南東から)



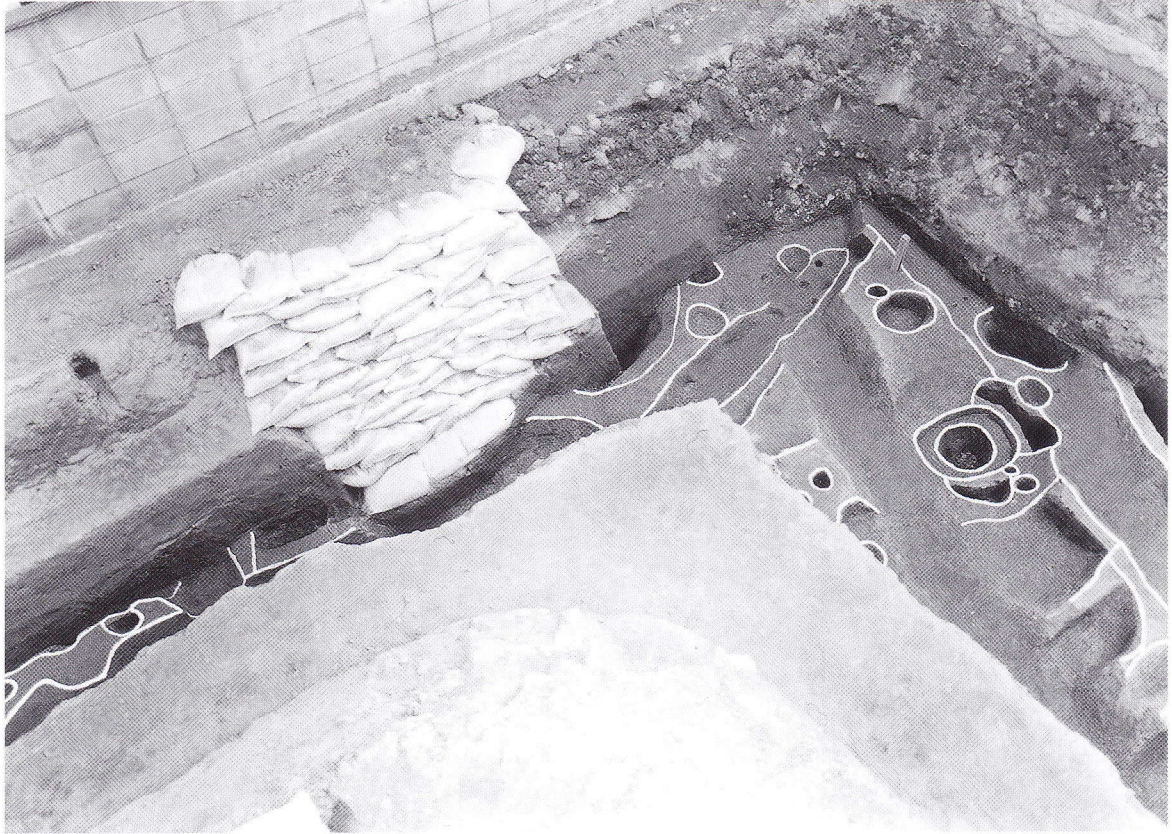
SK-13土層堆積状況 (南東から)



SB-2 (北東から)



SB-2土層堆積状況 (南東から)



SB-1 (北東から)



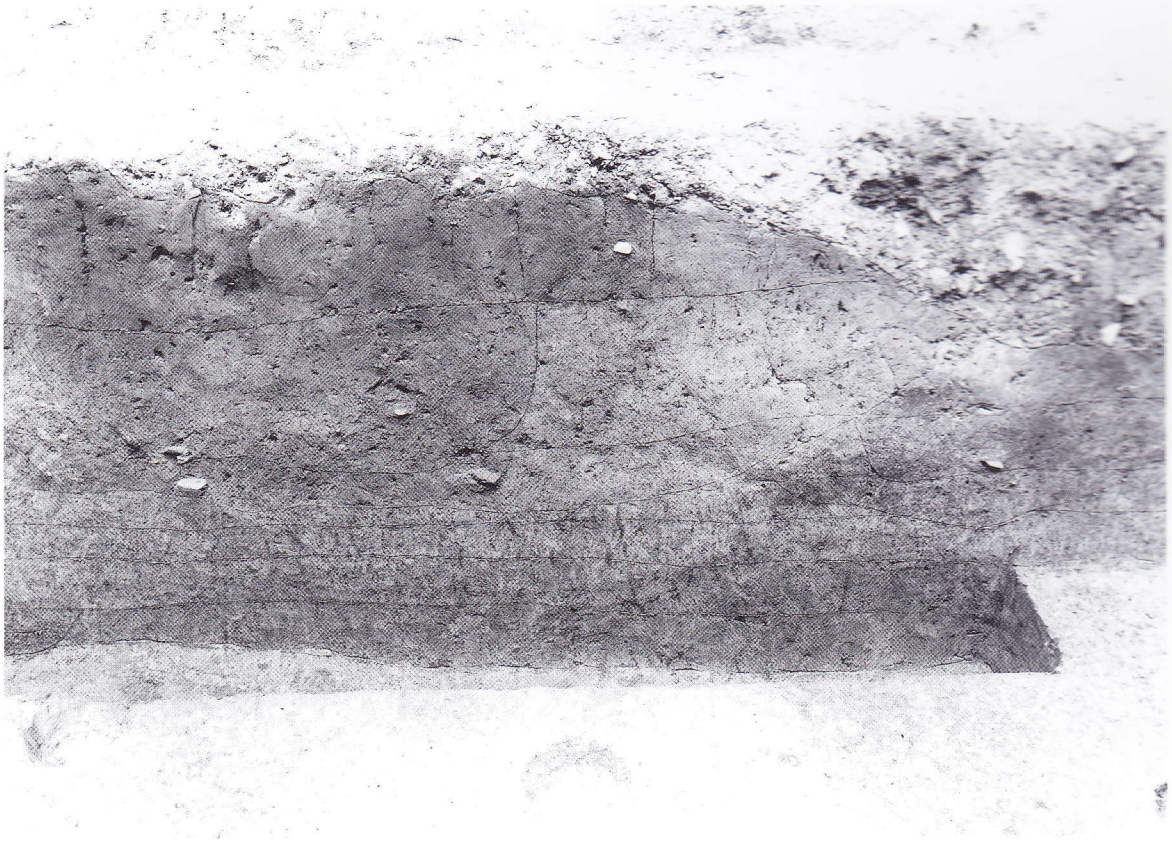
SB-1 土層堆積状況 (南西から)



SD-3・5土層堆積状況（南から）



SD-1土層堆積状況（南西から）



第1区 東壁土層堆積状況 X=-196304m付近(西から)



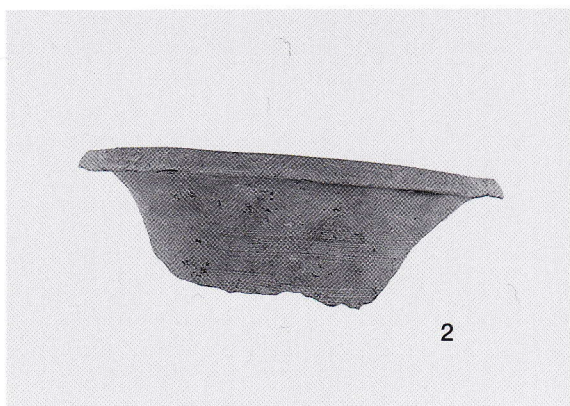
第2区 北壁土層堆積状況 Y=-73912m付近(南から)



SK-13出土遺物 弥生土器 1 壺口縁部



SK-13出土遺物 弥生土器 1 壺底部



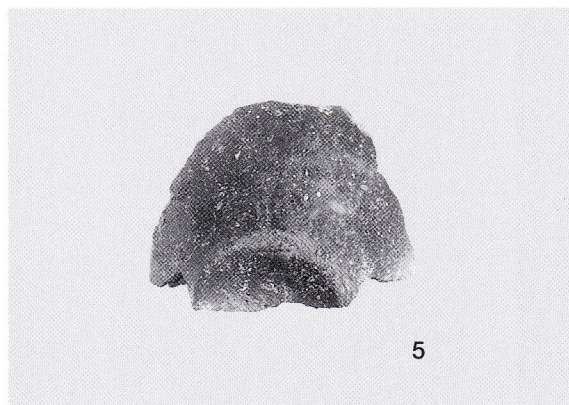
SK-13出土遺物 弥生土器 2 壺



SK-13出土遺物 弥生土器 3 壺



SK-13出土遺物 弥生土器 4 壺



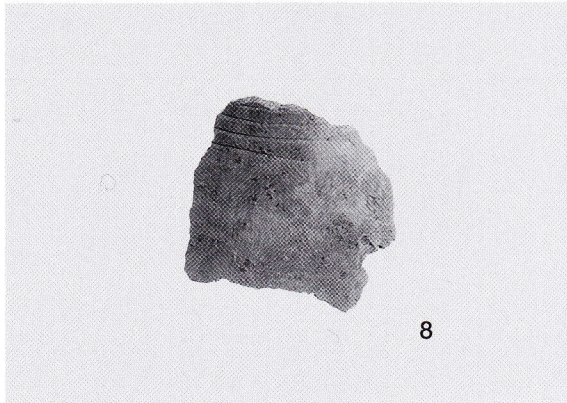
SK-13出土遺物 弥生土器 5 壺



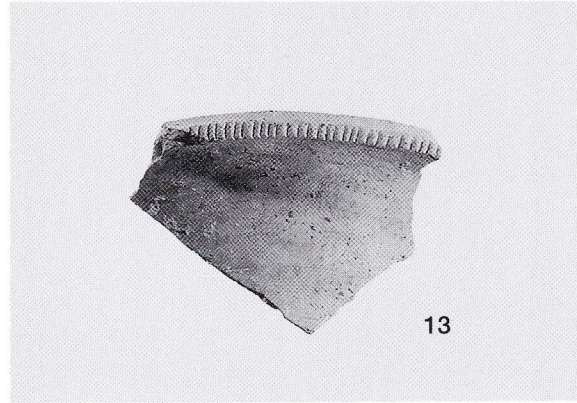
SK-13出土遺物 弥生土器 6 甕



SK-13出土遺物 弥生土器 7 甕



第6層出土遺物 弥生土器8壺



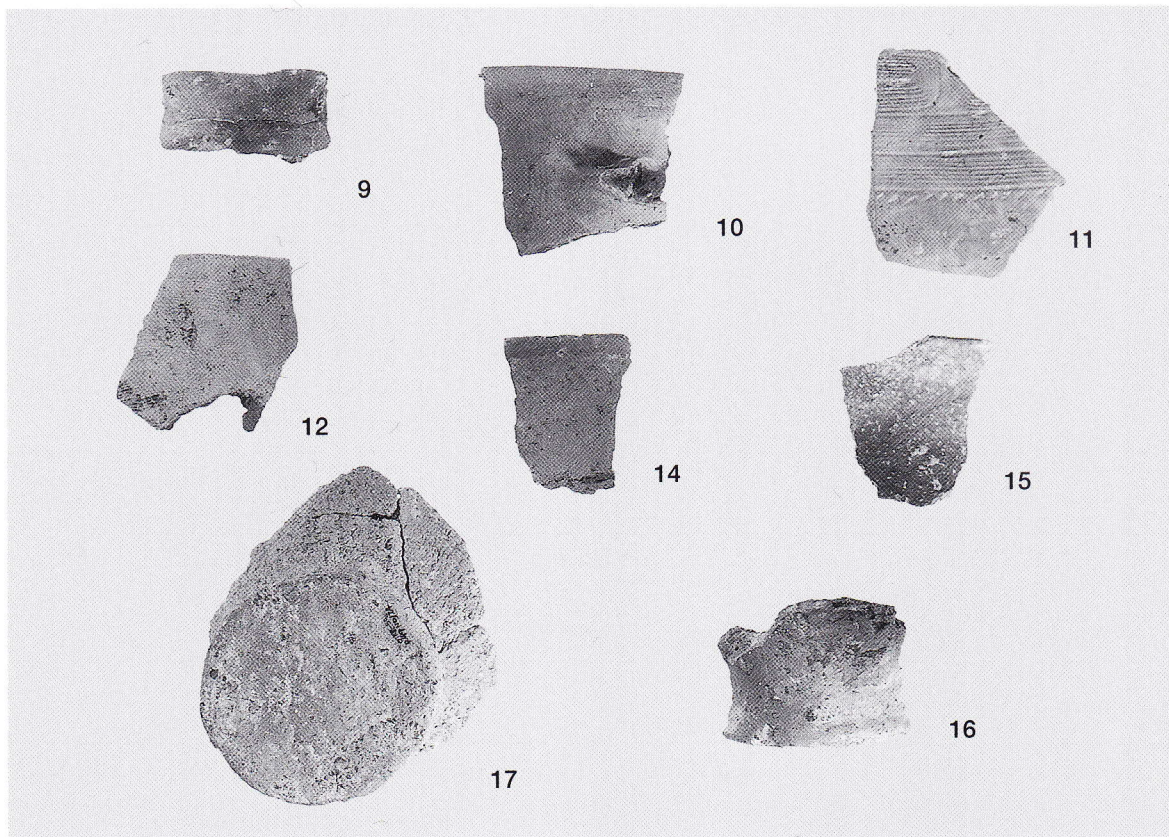
SK-15出土遺物 弥生土器13壺



第4b層出土遺物 弥生土器18甕



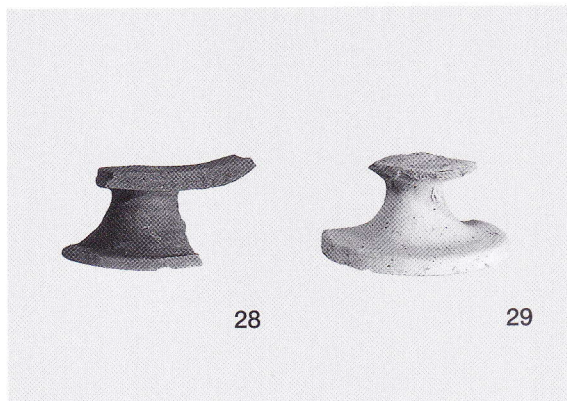
SK-12出土遺物 弥生土器19壺



SK-20他出土遺物 弥生土器9・14~17甕、10鉢、11・12壺



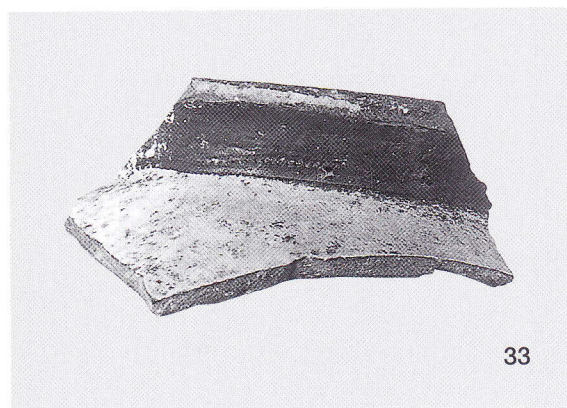
SD-5出土遺物 土師器23高杯



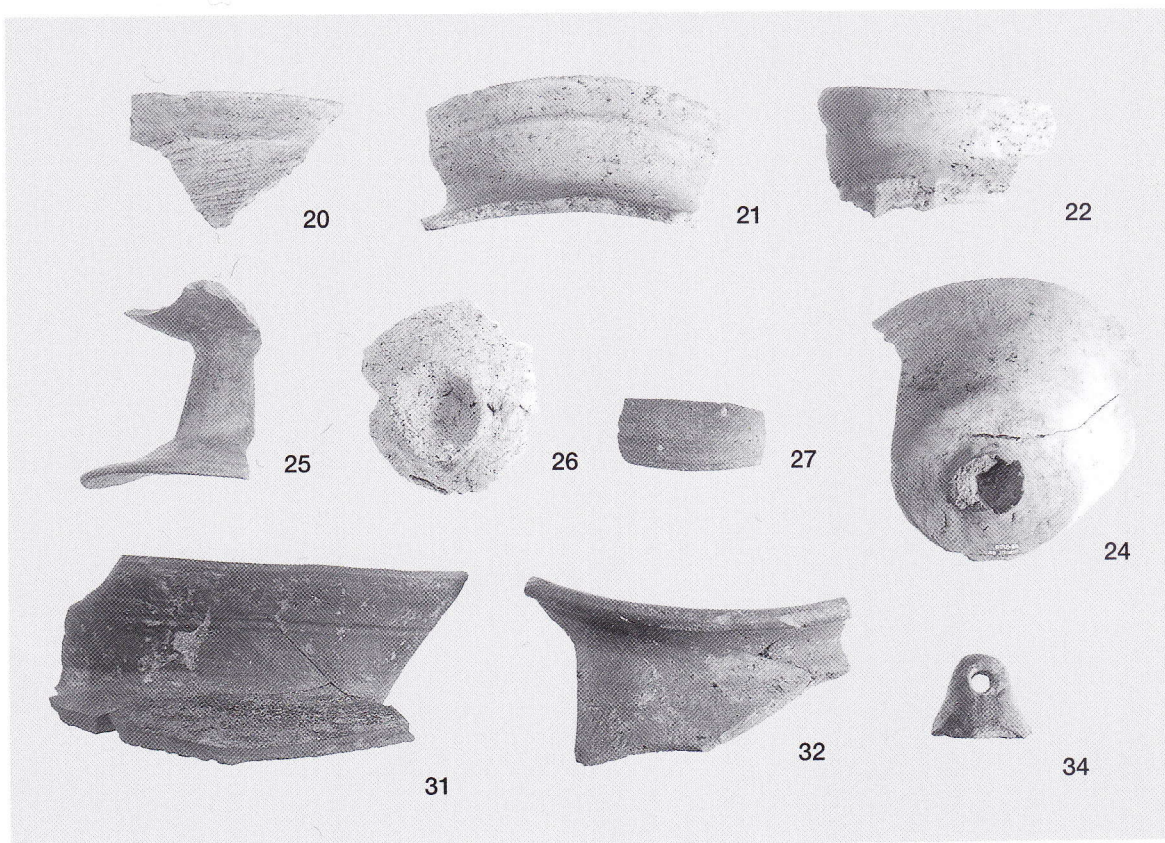
第3層出土遺物 須恵器28・29高杯



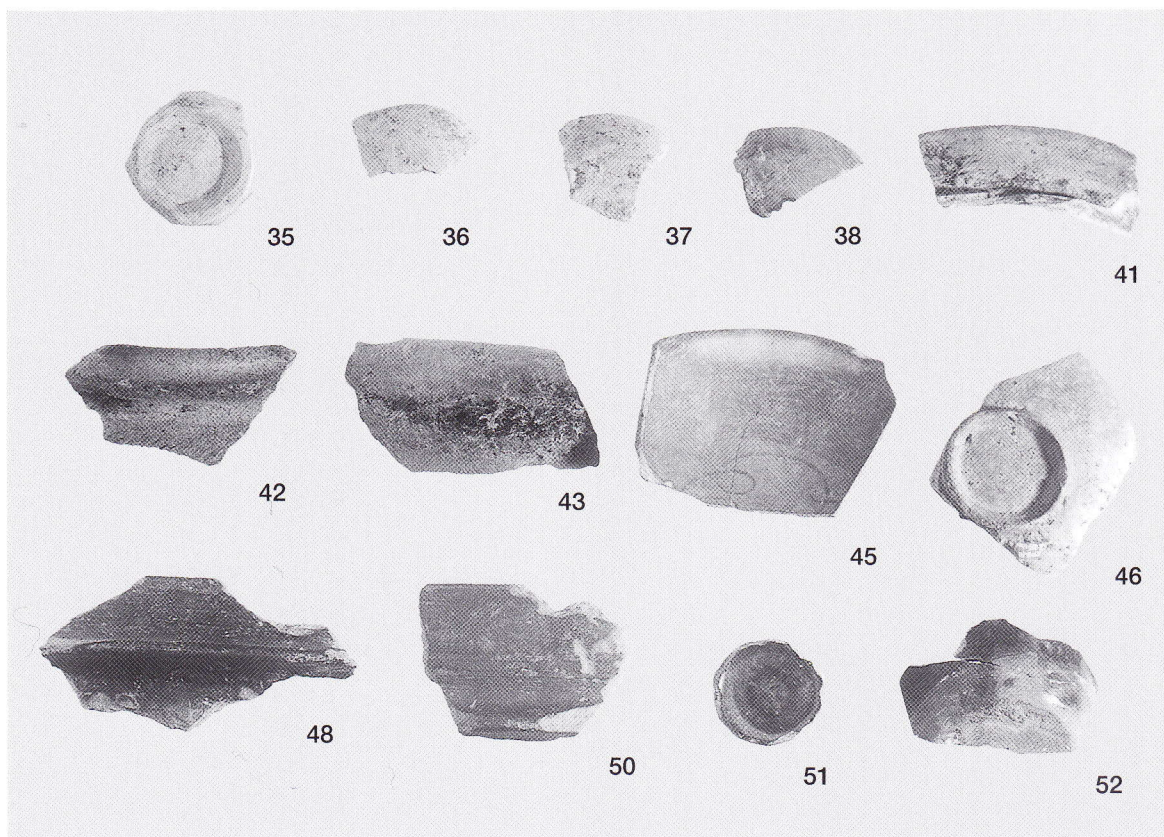
第3層出土遺物 須恵器30甃



第3層出土遺物 須恵器33甃



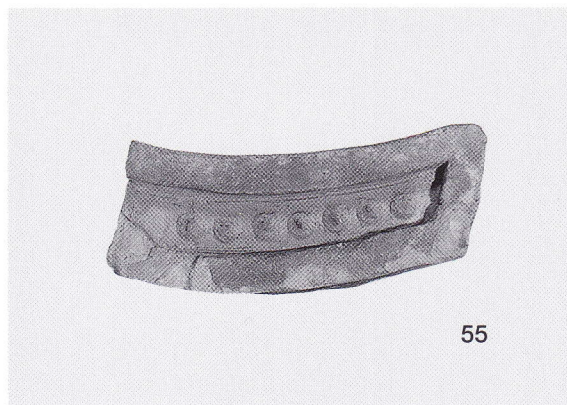
SB-2他出土遺物 土師器20・22甃、21壺、24・25高杯、26製塩土器
須恵器27杯蓋、31・32甃、34イイダコ壺



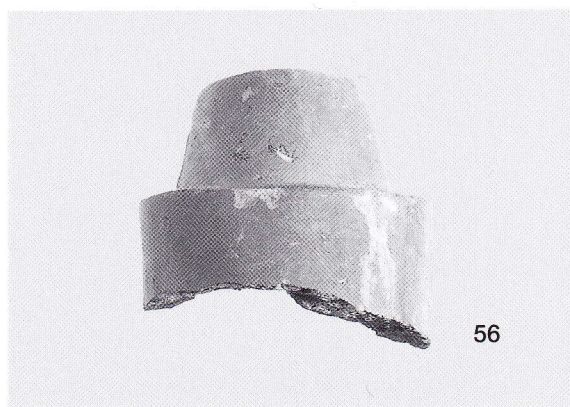
SD-1a他出土遺物 土師器35椀、36~38皿、41釜、42・43埴、瓦器45・46椀、
瓦質土器48・50羽釜、瀬戸美濃系陶器51天目茶碗、52壺



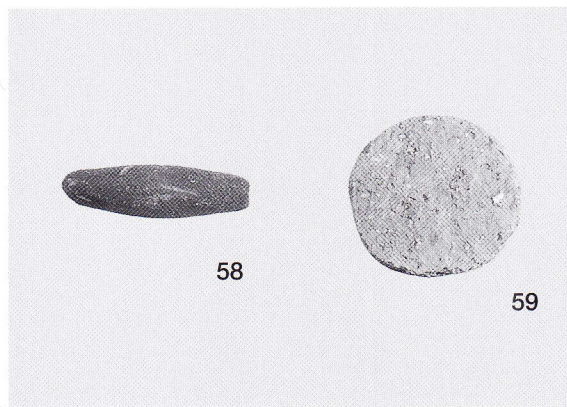
第2層出土遺物 54軒丸瓦



第2層出土遺物 55軒平瓦



第2層出土遺物 56丸瓦

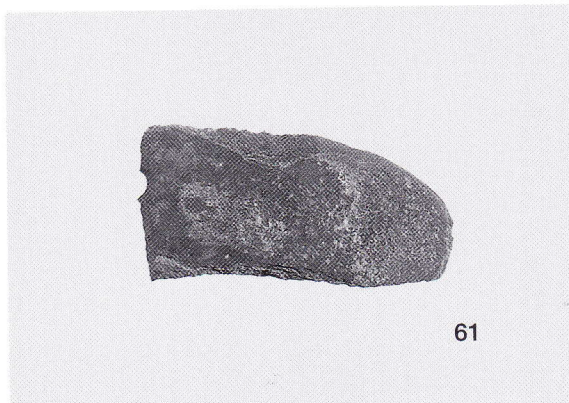


土製品 58管状土錘、59円板状転用品



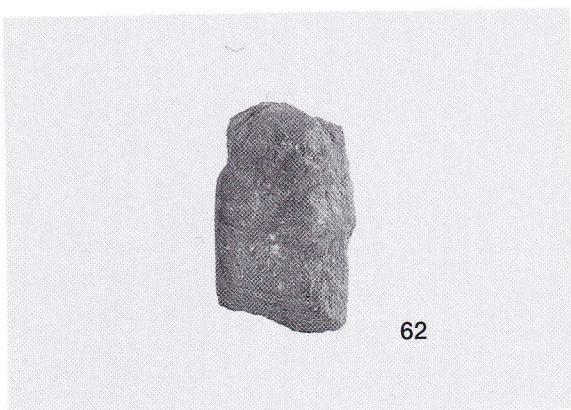
60

P-67出土遺物 60石庖丁



61

第3層出土遺物 61石庖丁



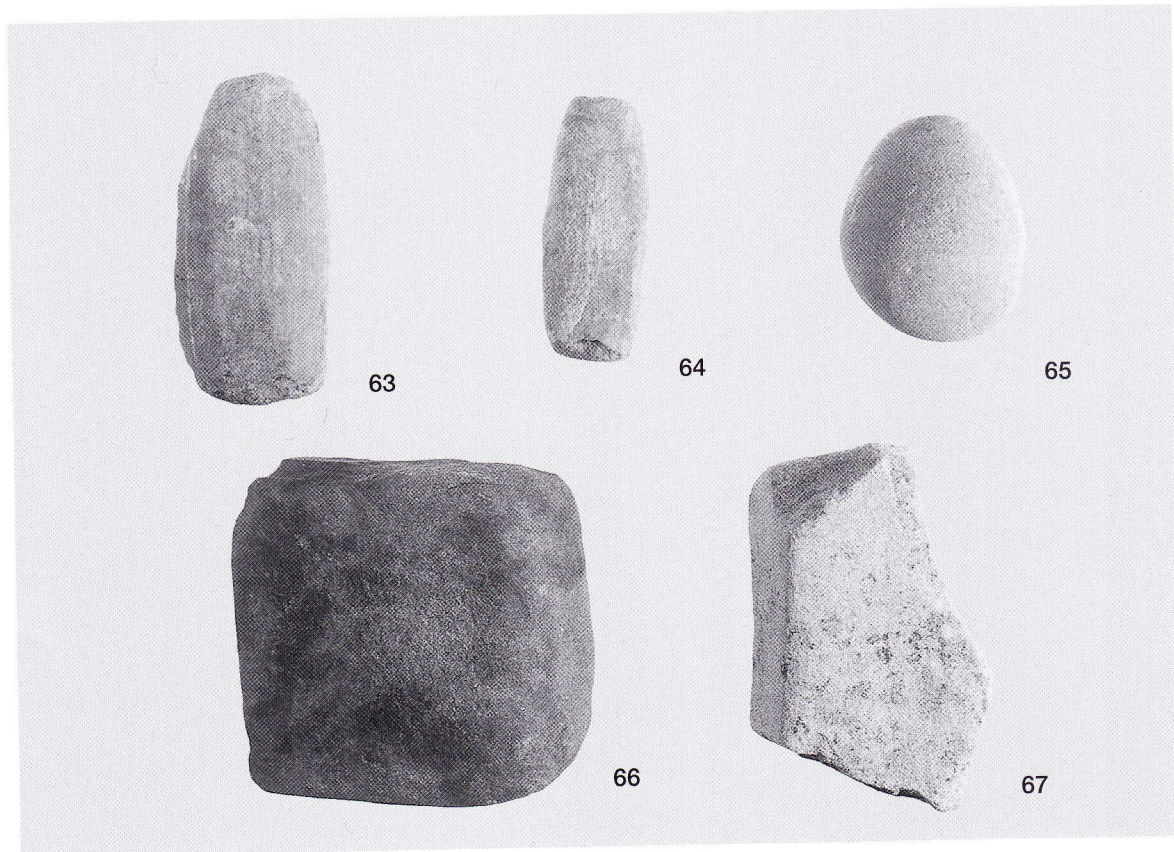
62

第6層出土遺物 62扁平両刃石斧



68

SD-1a出土遺物 68碧玉製管玉



63

64

65

66

67

SK-7他出土遺物 63~65叩石、66台石、67砥石

圖 版



調査前の状況（東から）



調査地全景（右が北）



第1区全景（東から）



第2区全景（北から）



第2区全景（南から）



第2区 サブトレンチ2 縄文土器出土状況（北東から）



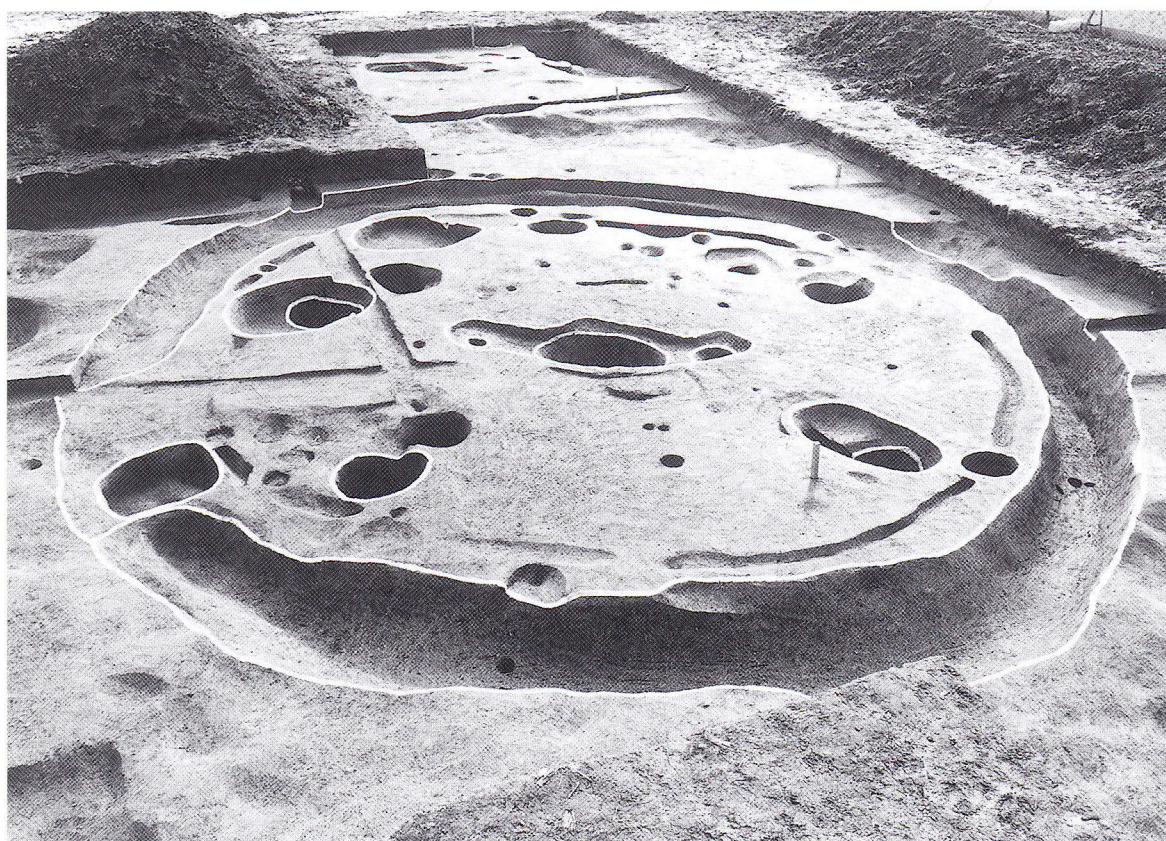
第2区 SB-1・2 (北から)



第2区 SB-1 (右が北)



第2区 SB-1 (東から)



第2区 SB-1 (北から)



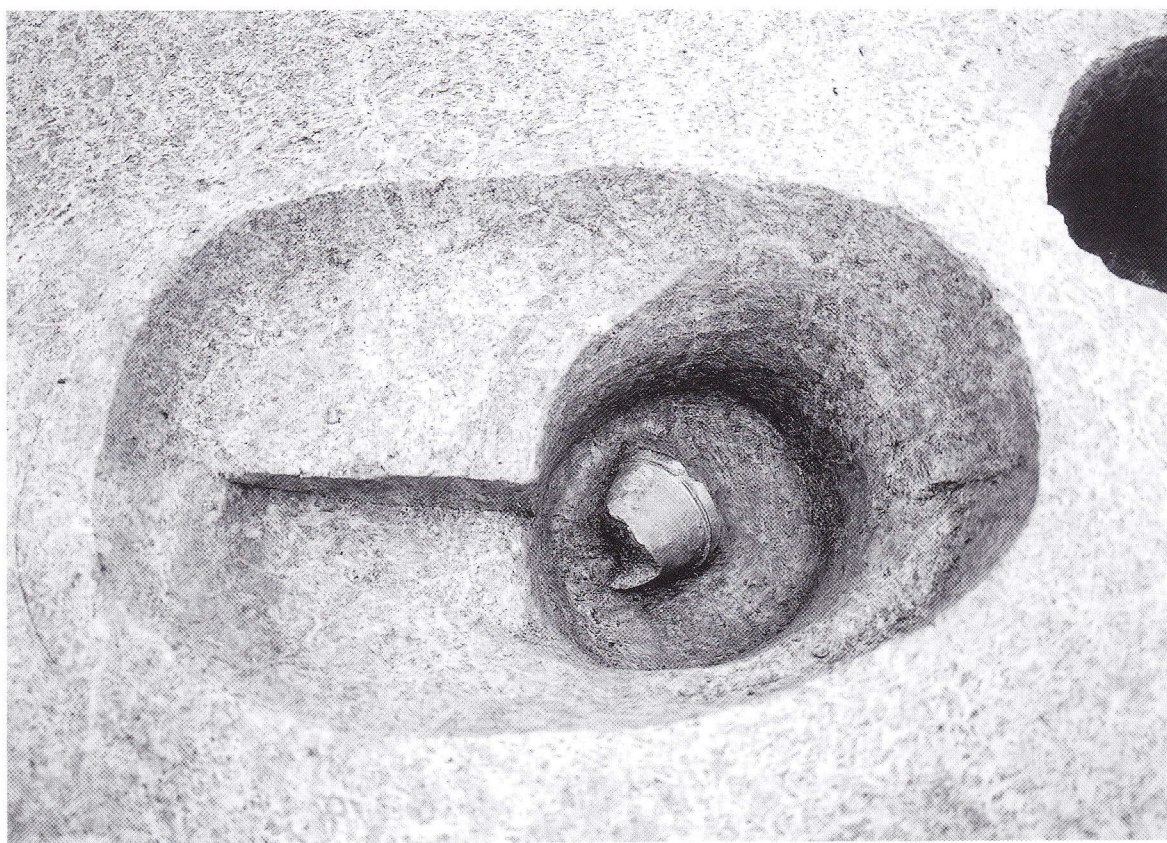
第2区 SB-1炉1・2（南東から）



第2区 SB-1炉1土層堆積状況（南西から）



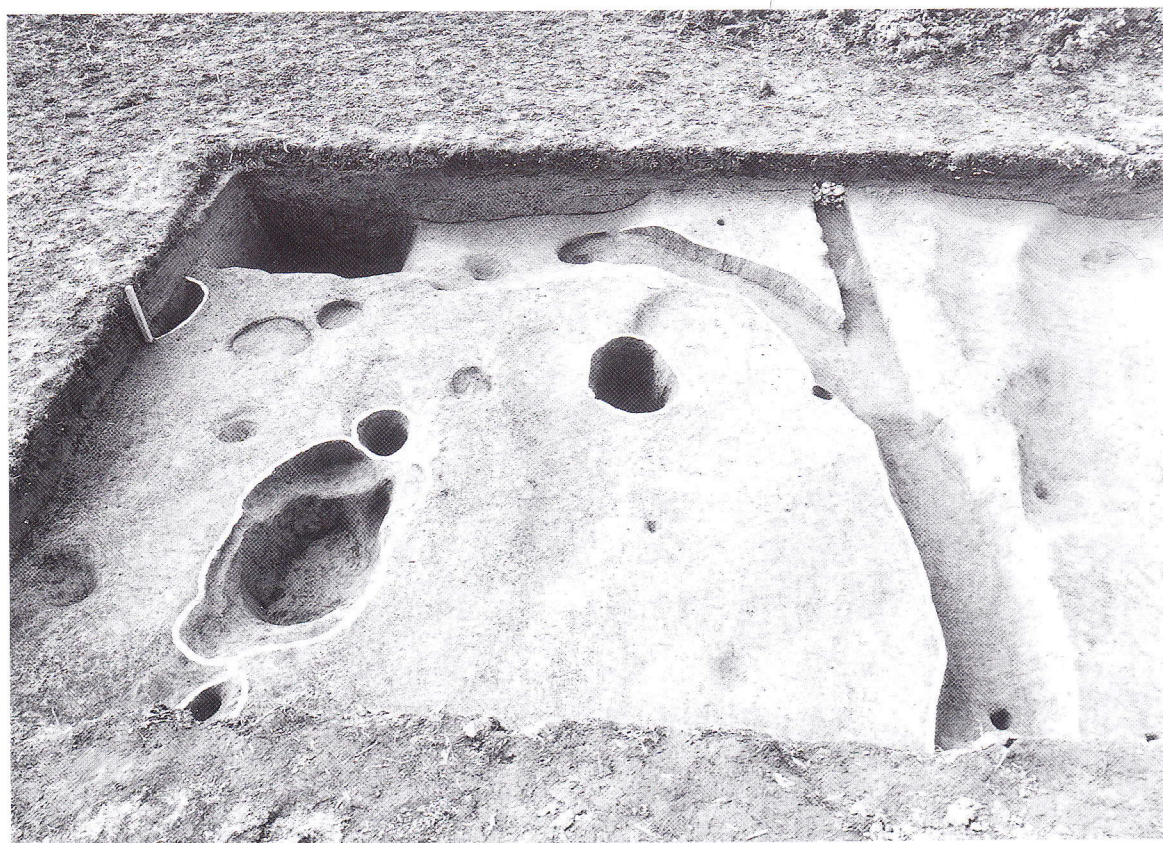
第2区 SB-1P-4土層堆積状況（東から）



第2区 SB-1P-4遺物出土状況（東から）



第2区 SB-2 (北から)



第2区 SB-2 (東から)



第2区 SB-2炉土層堆積状況（東から）



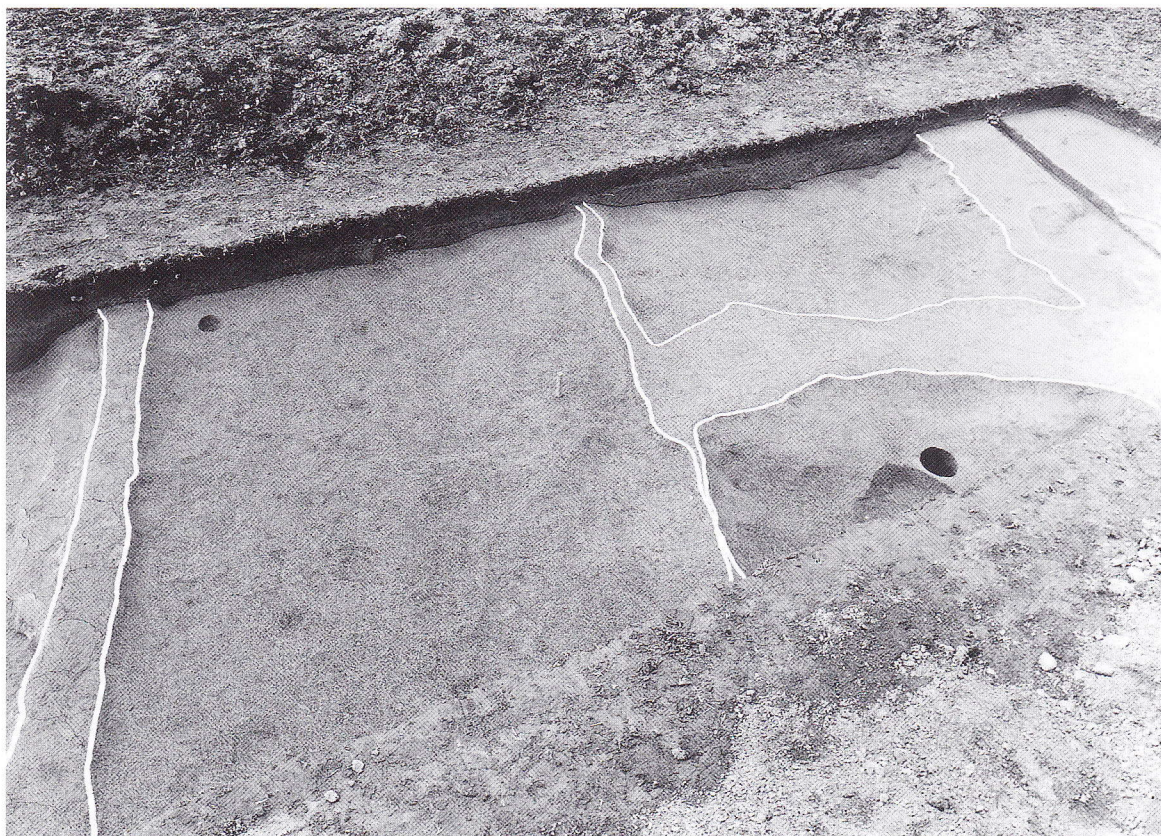
第2区 SB-2P-1遺物出土状況（西から）



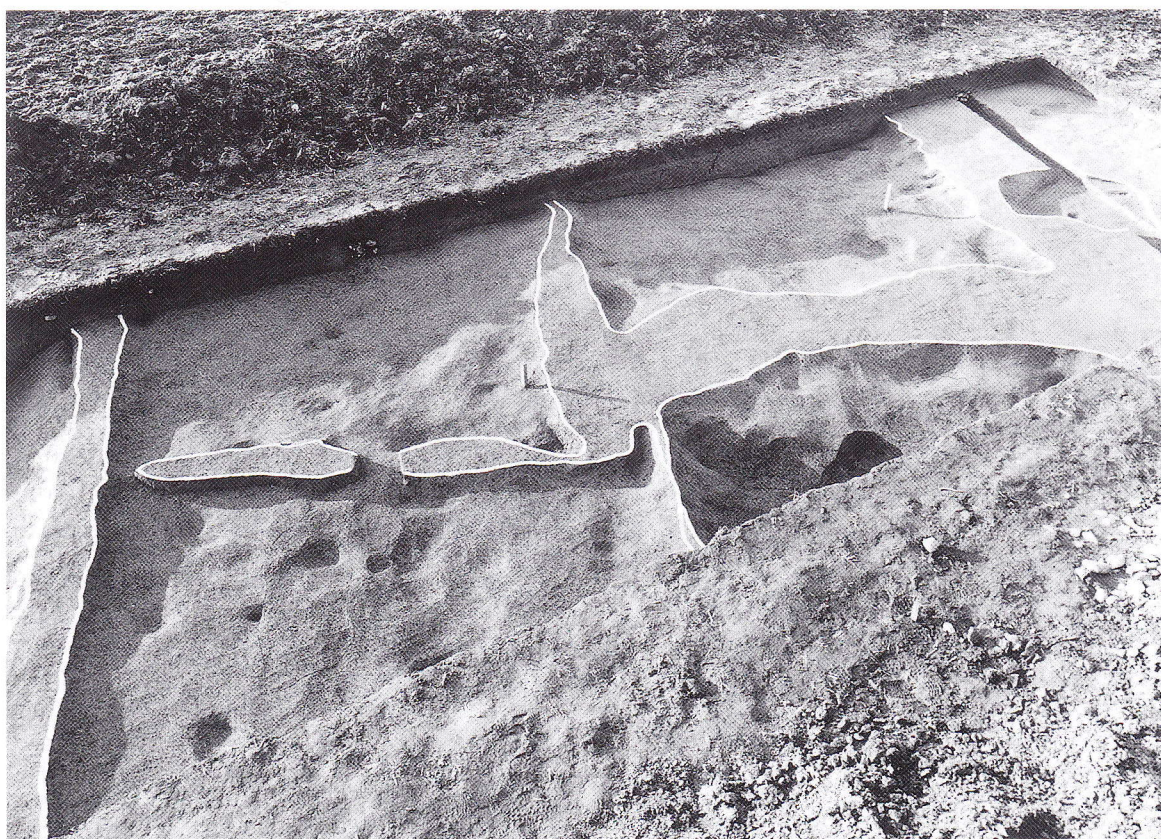
第1区 SK-1 (西から)



第1区 SK-1土層堆積状況 (南から)



第2区 SX-10~13 (南東から)



第2区 SX-10~13盛土畦畔 (南東から)



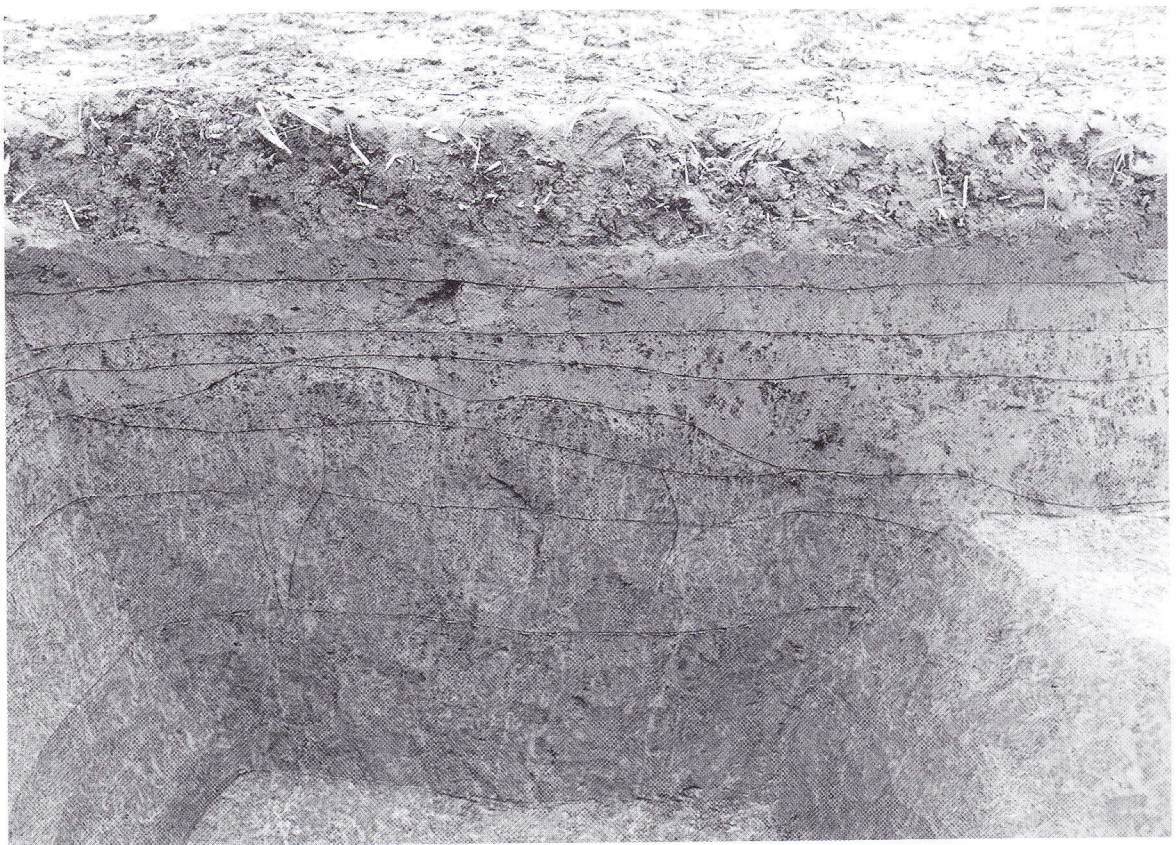
第2区 SX-10~13土層堆積状況（南西から）



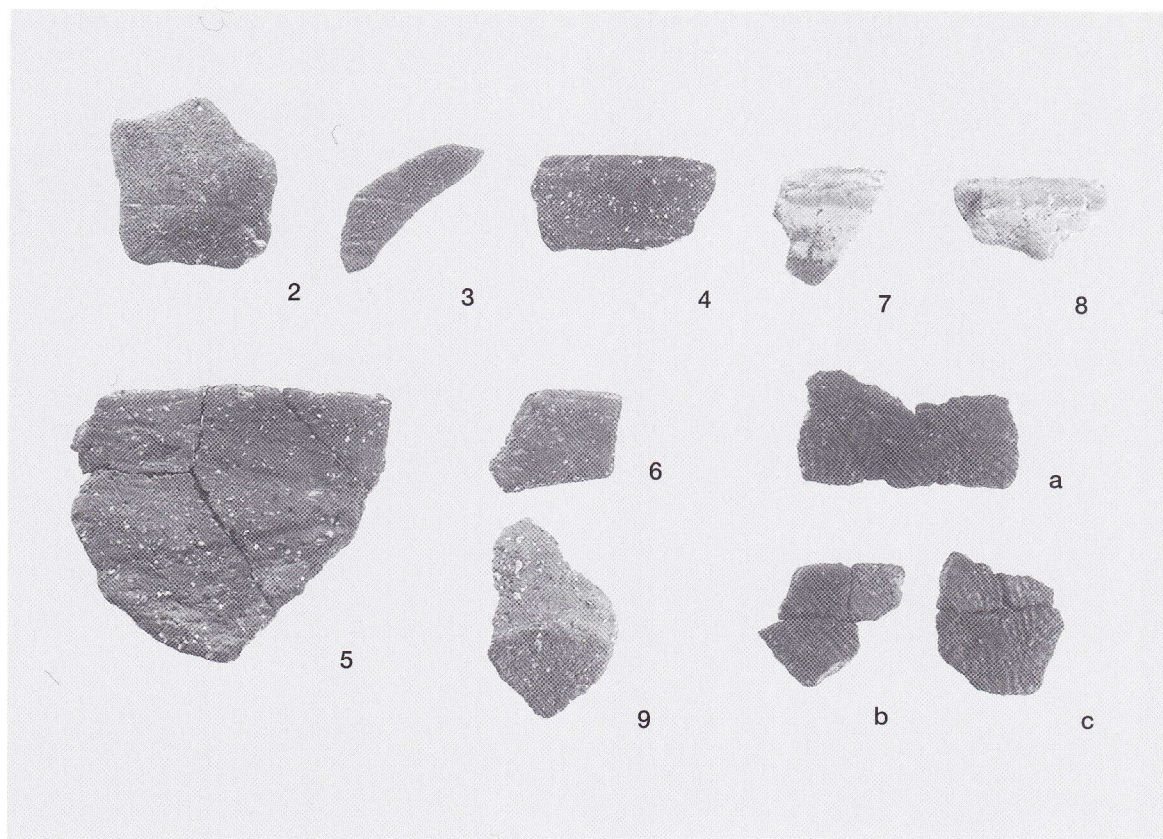
第2区 SX-17~21（東から）



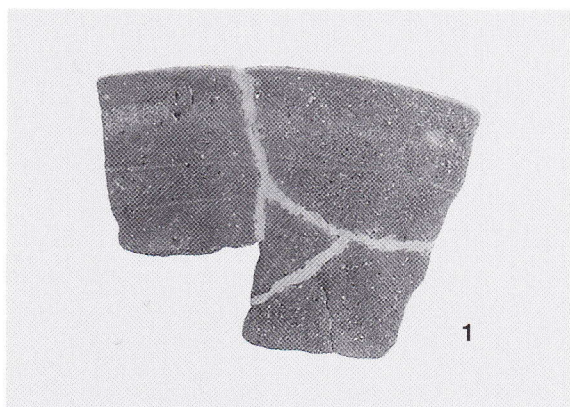
第1区 サブトレンチ1東壁土層堆積状況（西から）



第2区 サブトレンチ4西壁土層堆積状況（東から）



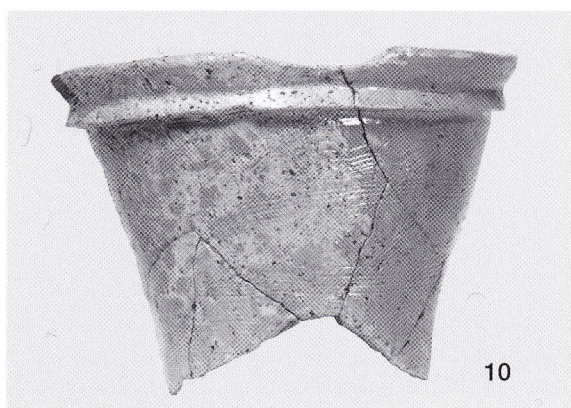
第5a層他出土遺物 縄文土器2～8深鉢、9鉢底部、a～c鉢



第5a層出土遺物 縄文土器1深鉢



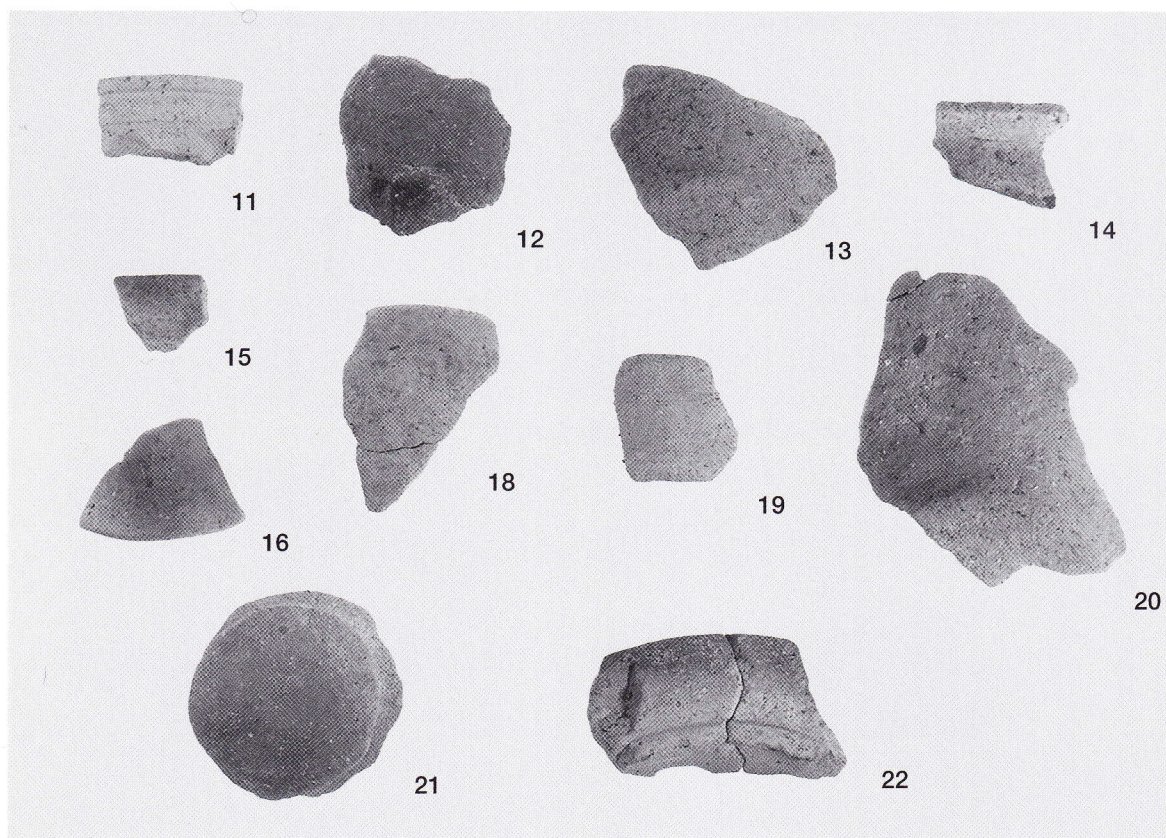
第5a層出土遺物 縄文土器1深鉢



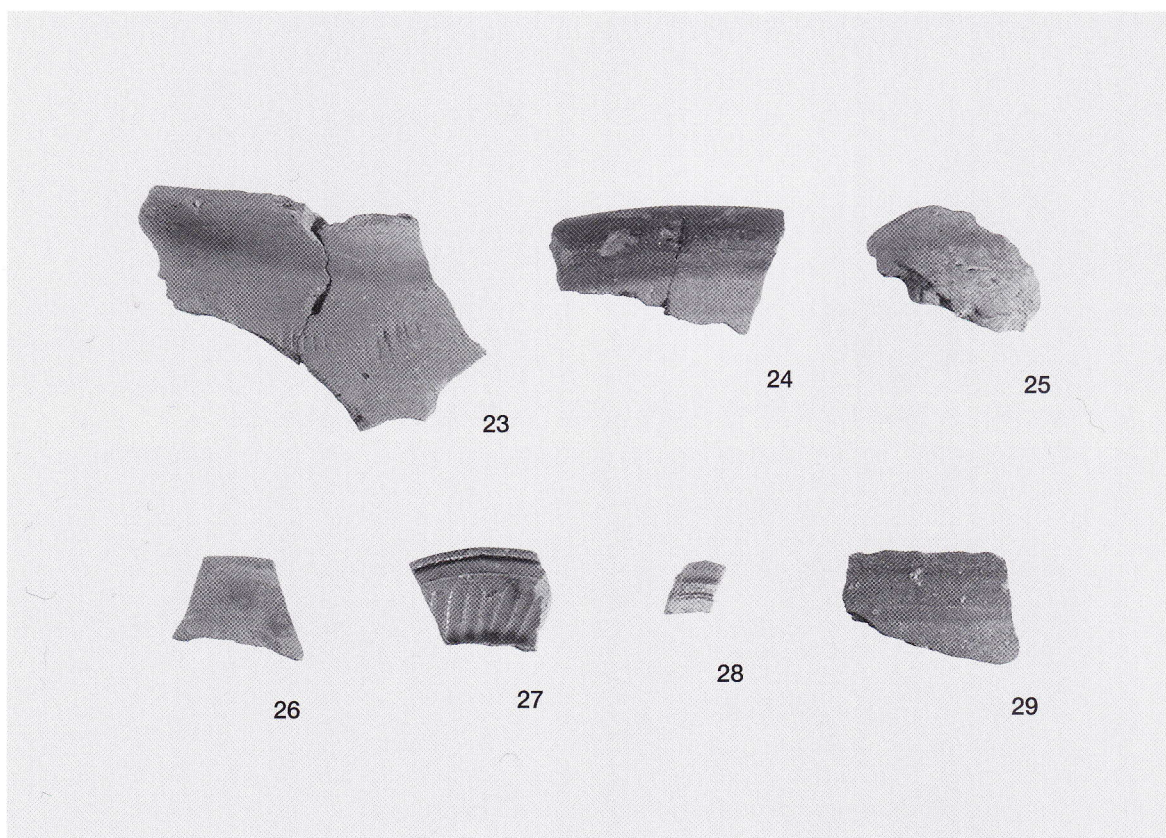
SB-1出土遺物 弥生土器10壺



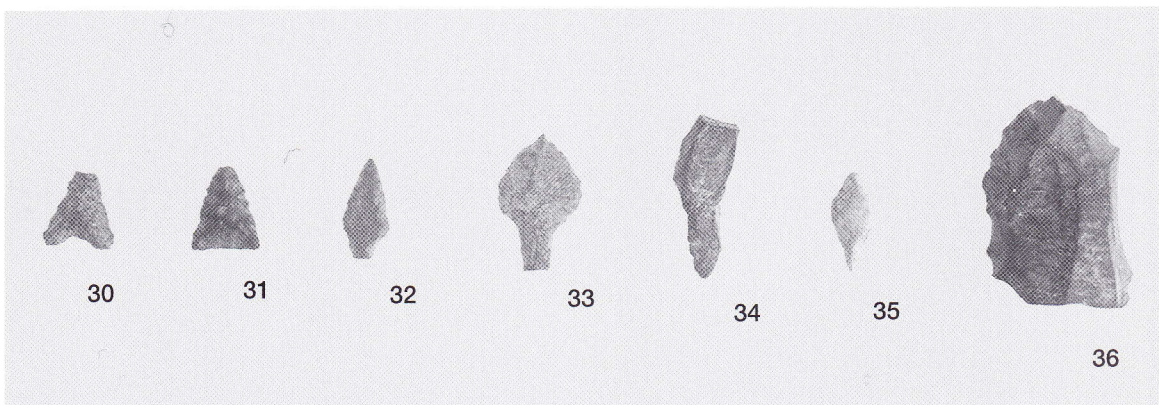
SB-2出土遺物 弥生土器17壺



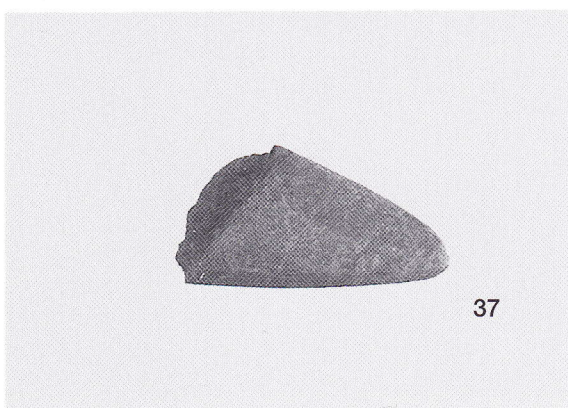
SB-1他出土遺物 弥生土器11・19壺口縁部、12・13・20壺底部、
14甕口縁部、15・18・22高杯、16鉢?脚台部、21甕底部



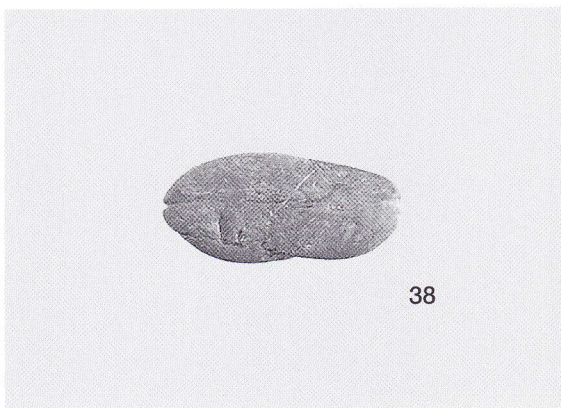
第3層他出土遺物 須恵器23甕、24こね鉢、土師器25皿、肥前系陶器26皿、
瀬戸・美濃系施釉陶器27・28皿、備前焼29鉢



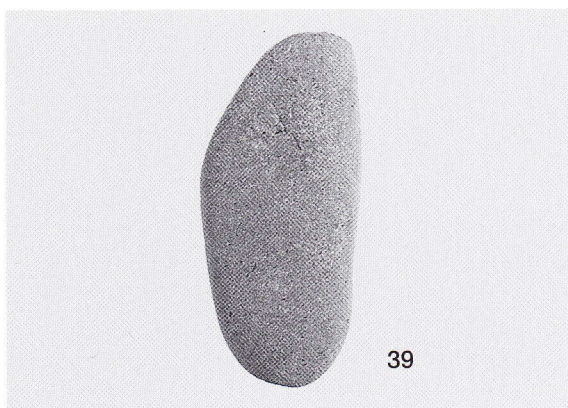
SB-1 他出土遺物 打製石器30~32石鏃、33~35石錐、36石槍



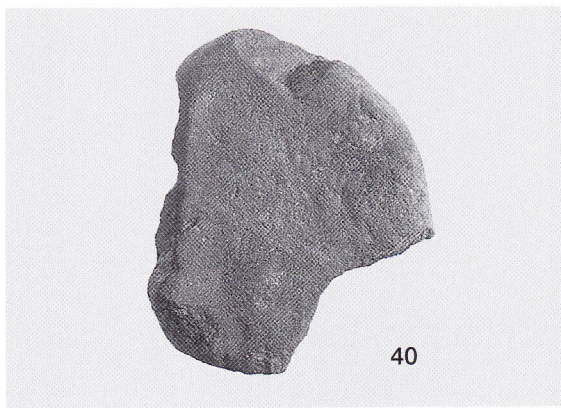
SK-1 出土遺物 磨製石器37石庖丁



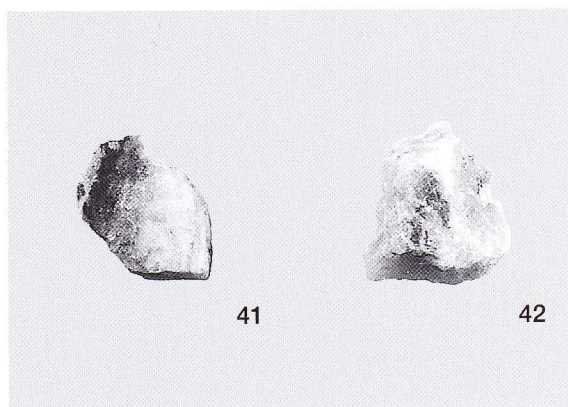
SB-1 出土遺物 磨製石器38有溝石錘



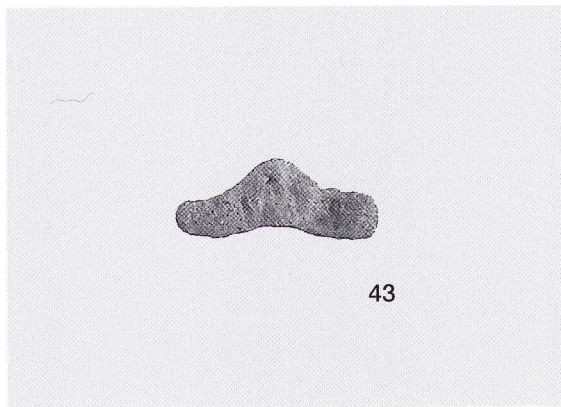
SB-1 出土遺物 礫石器39叩石



SB-1 出土遺物 礫石器40石皿



SX-15 他出土遺物 石製品41・42火打石



SX-15 出土遺物 金属製品43火打金

報告書抄録

ふりがな	わかやましないいせきはつくつちようさがいほう
書名	和歌山市内遺跡発掘調査概報
副書名	平成13年度
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	井馬好英・川口修実・奥村 薫
編集機関	和歌山市教育委員会・財団法人和歌山市文化体育振興事業団
所在地	〒640-8511 和歌山県和歌山市七番丁23 TEL 073-432-0001 〒640-8227 和歌山県和歌山市西汀丁29 TEL 073-435-1195
発行年月日	西暦 2003年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査 面積 (㎡)	調査 原因
		市町村	遺跡番号					
おおだ 太田・ くろだ いせき 黒田遺跡	わかやまけん 和歌山県 わかやまし 和歌山市 おおだ 太田	3020150	327	34°	135°	20010614	45	個人住 宅建築
			356	13′	11′	20010719		

所収遺跡名	種 別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
太田・ 黒田遺跡 太田城跡	集落跡 城館跡	弥生時代 古墳時代 鎌倉時代 室町時代	竪穴住居・ 溝・土坑・ ピット	弥生土器・土師器・須 恵器・瓦器・中世土師 器・輸入磁器・石器・ 石製品	弥生時代前期の 土坑や古墳時代の 竪穴住居などを 確認。

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査 面積 (㎡)	調査 原因
		市町村	遺跡番号					
かわなべいせき 川辺遺跡	わかやまけん 和歌山県 わかやまし 和歌山市 かわなべ 川辺	3020150	145	34°	135°	20011226	192	遺跡 確認
				15′	16′	20020225		

所収遺跡名	種 別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
川辺遺跡	集落跡	縄文時代 弥生時代 江戸時代	竪穴住居・ 土坑・水田 区画	縄文土器・弥生土器・ 須恵器・瓦器・輸入陶 磁器・中近世陶磁器・ 石器・石製品・金属製品	弥生時代中期の 松菊里型住居 2 棟、近世初頭の 水田区画19単位 以上を確認。

文化財室

平成15年3月31日発行

和歌山市内遺跡発掘調査概報

— 平成13年度 —

編集 (財)和歌山市文化体育振興事業団

和歌山市西汀丁29

発行 和歌山市教育委員会

和歌山市七番丁23

印刷 株式会社 昇和印刷

©和歌山市教育委員会 2003